569-142
1200501517386
569
32
142

改造文庫

第二十三篇　第二部

徒然草

吉澤義則校訂

改造社出版

147

紙本

改造文庫

第二部 第二十三篇

徒然草

吉澤義則註校

改造社出版

昭和小倉文庫

569-142.

例言

一　從來徒然草の異本はないとせられてゐた。が、靜嘉堂文庫所藏正徹自筆本系統の諸本、及び龍谷大學圖書館藏延德寫本等は章段の排列、語句などに流布本とは可成りの異同があり、異本として立てゝ然るべきものであらう。

一　本書は徒然草諸抄大成の本文を底本とした。各段の段落もほゞもとの儘である。但し、古版本や古註本に間々見られるあきらかな假名遣の誤や、不適切な用字は正しきに從つて改めた。

一　校合には主として久原文庫藏嵯峨本、及び吉澤本を用ひた。共に流布本系統に屬する。吉澤本は、奥書こそないが、室町末期の所寫と推定される寫本で旁註がある。章段の排列は流布本に等しい。併し、語句の異同が正徹本系統、殊に延德本と似てゐる點が可成り多いのは、特に注意されてよいであらう。

一　以上二本の語句の異同の重なるものは上欄に掲出した。○印を附してあるのがそれである。

なほ、嵯峨本、吉澤本その他、若しくはその他諸本云々とあるのは、諸抄大成本以外の諸本、たとへば文段抄本、光廣本等も同樣である事を表す。但し、これは極めて、少數の例にとどめた。

徒然草

一　頭註は、地名、人名、書名、故事、及び多少有職めいたものに限つた。

一　上欄の數字は段を示す。頭註の所在を明瞭にするためである。

一　卷末の追加は、勿論諸抄大成から收錄したものである。

昭和七年盛夏

校註者識

目次

序段　つれづれなるまゝに……二五
第一段　いでやこの世に生れては……二五
第二段　いにしへの聖の御代の……二七
第三段　よろづにいみじくとも……二七
第四段　後の世の事心にわすれず……二八
第五段　不幸に愁にしづめる人の……二八
第六段　わが身のやんごとなからんにも……二八
第七段　あだし野の露……二九
第八段　世の人のこゝろまどはすこと……三〇
第九段　女は髮のめでたからんこそ……三一
第十段　家居のつきづきしく……三二

第十一段　神無月の頃……三三
第十二段　おなじ心ならん人と……三四
第十三段　ひとりともし火のもとに……三五
第十四段　和歌こそ……三六
第十五段　いづくにもあれ……三七
第十六段　神樂こそ……三七
第十七段　山寺にかきこもりて……三八
第十八段　人はおのれをつゞまやかにし……三八
第十九段　をりふしのうつりかはるこそ……三九
第二十段　なにがしとかやいひし世すて人の……四二
第二十一段　よろづの事は月見るにこそ……四二
第二十二段　何事もふるき世のみぞ……四三
第二十三段　おとろへたる末の世とはいへど……四四
第二十四段　齊宮の野宮に……四四

第二十五段　飛鳥川の淵瀬……四五
第二十六段　風も吹きあへず……四六
第二十七段　御國ゆづりの節會……四七
第二十八段　諒闇の年ばかり……四八
第二十九段　しづかにおもへば……四八
第三十段　人のなきあとばかり……四九
第三十一段　雪のおもしろう降りたりし朝……五〇
第三十二段　九月二十日のころ……五一
第三十三段　今の內裏つくり出されて……五一
第三十四段　甲香は……五一
第三十五段　手のわろき人の……五二
第三十六段　久しくおとづれぬ頃……五三
第三十七段　朝夕へだてなくなれたる人の……五三
第三十八段　名利につかはれて……五三

第三十九段　ある人法然上人に……五六
第四十段　因幡國に……五六
第四十一段　五月五日加茂のくらべ馬を……五七
第四十二段　唐橋中將といふ人の子に……五八
第四十三段　春のくれつかた……五八
第四十四段　あやしの竹のあみ戸のうちより……五九
第四十五段　公世の二位のせうとに……六〇
第四十六段　柳原の邊に……六一
第四十七段　ある人淸水へまゐりけるに……六一
第四十八段　光親卿院の最勝講奉行して……六二
第四十九段　老來りてはじめて……六二
第五十段　應長のころ伊勢國より……六三
第五十一段　龜山殿の御池に……六四
第五十二段　仁和寺にある法師……六五

第五十三段　これも仁和寺の法師……六六
第五十四段　御室にいみじき兒の……六七
第五十五段　家の造りやうは……六八
第五十六段　久しくへだゝりて……六九
第五十七段　人のかたり出でたる歌物語の……七〇
第五十八段　道心のあらばすむ所にしもよらじ……七〇
第五十九段　大事を思ひたゝん人は……七一
第六十段　眞乘院に盛親僧都とて……七三
第六十一段　御産のとき……七四
第六十二段　延政門院……七五
第六十三段　後七日の阿闍梨……七五
第六十四段　車の五緒は……七六
第六十五段　このごろの冠は……七六
第六十六段　岡本關白殿……七六

第六十七段　加茂の岩本橋本は……七八
第六十八段　筑紫になにがしの押領使……七九
第六十九段　書寫の上人は……七九
第七十段　元應の淸暑堂の御遊に……八〇
第七十一段　名を聞くよりやがて……八一
第七十二段　いやしげなるもの……八一
第七十三段　世にかたりつたふる事……八二
第七十四段　蟻のごとくにあつまりて……八四
第七十五段　つれづれわぶる人は……八五
第七十六段　世のおぼえはなやかなる……八五
第七十七段　世の中にその頃人の……八六
第七十八段　今やうの事どものめづらしきを……八六
第七十九段　何事も入りたゝぬさま……八七
第八十段　人ごとにわが身にうとき事を……八七

第八十一段　屛風障子などの繪も文字も……八八
第八十二段　うすものゝ表紙は……八九
第八十三段　竹林院入道左大臣殿……九〇
第八十四段　法顯三藏の……九〇
第八十五段　人のこゝろすなほならねば……九一
第八十六段　惟繼中納言は……九二
第八十七段　下部に酒のまする事は……九二
第八十八段　ある者小野道風の……九四
第八十九段　奥山に猫またといふもの……九四
第九十段　大納言法印のめしつかひし乙鶴丸……九五
第九十一段　赤舌日といふこと……九六
第九十二段　ある人弓いる事を……九六
第九十三段　牛を賣る者あり……九七
第九十四段　常盤井相國……九九

第九十五段　箱のくりかたに……九九
第九十六段　めなもみといふ草……一〇〇
第九十七段　その物につきて……一〇〇
第九十八段　たふとき聖のいひおきけること……一〇〇
第九十九段　堀川相國は……一〇一
第百段　久我相國は殿上にて……一〇二
第百一段　ある人任大臣の節會の……一〇二
第百二段　尹大納言光忠入道……一〇三
第百三段　大覺寺殿にて……一〇三
第百四段　荒れたる宿の……一〇四
第百五段　北の屋かげに……一〇五
第百六段　高野の證空上人……一〇六
第百七段　女の物いひかけたる返事……一〇七
第百八段　寸陰をしむ人なし……一〇八

第百九段　高名の木のぼり……一一〇
第百十段　雙六の上手といひし人に……一一一
第百十一段　圍碁雙六このみて……一一一
第百十二段　明日は遠國へ……一一一
第百十三段　四十にもあまりぬる人の……一一二
第百十四段　今出川のおほい殿……一一三
第百十五段　宿河原といふ所にて……一一四
第百十六段　寺院の號……一一五
第百十七段　友とするにわろきもの……一一五
第百十八段　鯉のあつもの……一一六
第百十九段　鎌倉の海に……一一七
第百二十段　唐の物は……一一七
第百二十一段　やしなひ飼ふものには……一一八
第百二十二段　人の才能は……一一九

第百二十三段　無益の事をなして……一二〇
第百二十四段　是法法師は……一二〇
第百二十五段　人におくれて……一二一
第百二十六段　ばくちの負きはまりて……一二二
第百二十七段　あらためて益なきことは……一二二
第百二十八段　雅房大納言は……一二三
第百二十九段　顔回は……一二三
第百三十段　物にあらそはず……一二四
第百三十一段　貧しきものは……一二六
第百三十二段　鳥羽の作道は……一二六
第百三十三段　夜のおとゞは……一二七
第百三十四段　高倉院の法華堂の三昧僧……一二七
第百三十五段　資季大納言入道……一二九
第百三十六段　醫師あつしげ……一三〇

第百三十七段　花はさかりに……一三一
第百三十八段　祭すぎぬれば……一三二
第百三十九段　家にありたき木は……一三六
第百四十段　身死して財殘ることは……一三八
第百四十一段　悲田院堯蓮上人は……一三九
第百四十二段　心なしと見ゆる者も……一四〇
第百四十三段　人の終焉のありさまの……一四一
第百四十四段　栂尾の上人……一四二
第百四十五段　御隨身秦重躬……一四二
第百四十六段　明雲座主……一四三
第百四十七段　灸治あまた所になりぬれば……一四四
第百四十八段　四十以後の人……一四四
第百四十九段　鹿茸を鼻にあてゝ……一四四
第百五十段　能をつかんとする人……一四四

第百五十一段　ある人のいはく年五十……一四五
第百五十二段　西大寺靜然上人……一四六
第百五十三段　爲兼大納言入道……一四七
第百五十四段　この人東寺の門に……一四七
第百五十五段　世にしたがはん人は……一四八
第百五十六段　大臣の大饗は……一四九
第百五十七段　筆をとれば……一五〇
第百五十八段　盃のそこをすつる事は……一五〇
第百五十九段　みなむすびといふは……一五一
第百六十段　門に額かくるを……一五一
第百六十一段　花のさかりは……一五二
第百六十二段　遍照寺の承仕法師……一五二
第百六十三段　太衝の太の字……一五三
第百六十四段　世の人あひ逢ふ時……一五三

第百六十五段　あづまの人の……一五四
第百六十六段　人間のいとなみあへるわざ……一五四
第百六十七段　一道にたづさはる人……一五四
第百六十八段　年老いたる人の……一五六
第百六十九段　何事の式といふ事は……一五六
第百七十段　さしたることなくて……一五七
第百七十一段　貝をおほふ人の……一五八
第百七十二段　わかき時は……一五九
第百七十三段　小野小町がこと……一六〇
第百七十四段　小鷹によき犬……一六一
第百七十五段　世には心得ぬ事の……一六一
第百七十六段　黒戸は……一六五
第百七十七段　鎌倉中書王にて……一六五
第百七十八段　ある所のさぶらひども……一六六

第百七十九段　入宋の沙門道眼上人……一六六
第百八十段　さぎちやうは……一六七
第百八十一段　ふれふれこゆき……一六七
第百八十二段　四條大納言隆親卿……一六八
第百八十三段　人つく牛をば……一六八
第百八十四段　相模守時頼の母は……一六九
第百八十五段　城陸奥守泰盛は……一七〇
第百八十六段　吉田と申す馬乗の……一七〇
第百八十七段　萬の道の人……一七一
第百八十八段　ある者子を法師になして……一七一
第百八十九段　今日はその事をなさんと思へど……一七五
第百九十段　妻といふものこそ……一七五
第百九十一段　夜に入りてものゝはえなし……一七六
第百九十二段　神佛にも……一七七

第百九十三段　くらき人の……一七八
第百九十四段　達人の人をみる眼は……一七八
第百九十五段　ある人久我繩手を……一八〇
第百九十六段　東大寺の神輿……一八〇
第百九十七段　諸寺の僧のみにもあらず……一八一
第百九十八段　揚名介にかぎらず……一八一
第百九十九段　横川行宣法印が……一八一
第二百段　吳竹は葉ほそく……一八二
第二百一段　退凡下乘の卒塔婆……一八二
第二百二段　十月をかみな月といひて……一八二
第二百三段　勅勘のところに……一八三
第二百四段　犯人をしもとにてうつ時は……一八三
第二百五段　比叡山に……一八三
第二百六段　德大寺右大臣殿……一八四

第二百七段　龜山殿たてられんとて……一八五
第二百八段　經文などの紐をゆふに……一八五
第二百九段　人の田を論ずるもの……一八六
第二百十段　喚子鳥は……一八六
第二百十一段　萬の事はたのむべからず……一八七
第二百十二段　秋の月は……一八八
第二百十三段　御前の火爐に……一八八
第二百十四段　想夫戀といふ樂は……一八九
第二百十五段　平宣時朝臣……一八九
第二百十六段　最明寺入道……一九〇
第二百十七段　ある大福長者のいはく……一九一
第二百十八段　狐は人にくひつくものなり……一九三
第二百十九段　四條黃門命ぜられて……一九三
第二百二十段　何事も邊土はいやしく……一九五

第二百二十一段　建治弘安の比は……一九六
第二百二十二段　竹谷乘願房……一九六
第二百二十三段　たづのおほいどのは……一九七
第二百二十四段　陰陽師有宗入道……一九七
第二百二十五段　多久助が……一九八
第二百二十六段　後鳥羽院の御時……一九八
第二百二十七段　六時禮讚は……一九九
第二百二十八段　千本釋迦念佛は……二〇〇
第二百二十九段　よき細工は……二〇〇
第二百三十段　五條の內裏には……二〇〇
第二百三十一段　園の別當入道は……二〇〇
第二百三十二段　すべて人は無智無能……二〇一
第二百三十三段　萬のとがあらじとおもはゞ……二〇三
第二百三十四段　人の物を問ひたるに……二〇三

第二百三十五段　ぬしある家には……二〇四
第二百三十六段　丹波に出雲といふ處あり……二〇五
第二百三十七段　柳箱に据うるものは……二〇六
第二百三十八段　御隨身近友が自讃とて……二〇六
第二百三十九段　八月十五日……二一〇
第二百四十段　しのぶの浦の……二一一
第二百四十一段　望月のまどかなる事は……二一二
第二百四十二段　とこしなへに違順に……二一三
第二百四十三段　八になりし年……二一四
追加……二一五

徒然草

序段

つれづれなるまゝに、日ぐらし硯にむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物ぐるほしけれ。

第一段

いでや、この世に生れては、ねがはしかるべき事こそおほかめれ。

みかどの御位はいともかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御ありさまはさらなり、たゞ人も、舎人などは給はるきはゝ、ゆゝしと見ゆ。その子うまごまでは、はふれにたれど猶なまめかし。それよりしもつかたは、ほどにつけつゝ、時にあひ、したり顔なるも、みづからはいみじと思ふらめど、いとくちをし。

法師ばかりうらやましからぬものはあらじ。「人には木のはしのやうに思はるゝよ」と、清少納言が書けるも、げにさることぞかし。いきほひ猛に

1 一の人――摂政関白の異称。舎人――昔、天皇、皇族などに近侍した雑掌、臣下でも賜つた者は之を具すことがある。○その子うまご――吉澤本「子」なし。○したり顔なるも――嵯峨本「したり顔なると」。清少納言――肥後守清原元輔の女。一條

天皇の皇后定子に仕へて才名があつた。「枕草子」の著者。

壇賀ひじり――榮議橘ノ恒平の子、比叡山の天台座主慈恵に師事し、後、大和の多武峯にかくれ住んだ。偏に名利をいとひ奇行が多かつた。

賢より賢にも――論語學而篇に「賢賢易色」とありまた皇侃の論語義疎に「能改二易好色之心一以好二於賢一。卽此人便是賢二於賢一者」とある。

有職――朝廷武家などの儀式典故等に通ずること。

公事――朝廷の政務や儀式。

のゝしりたるにつけて、いみじとは見えず、壇賀ひじりのいひけんやうに名聞ぐるしく、佛の御をしへにたがふらむとぞおぼゆる。ひたぶるの世捨人は、なかなかあらまほしきかたもありなん。

人はかたちありさまの勝れたらんこそ、あらまほしかるべけれ。物うちいひたる、ききにくからず、愛敬ありて、詞おほからぬこそ、あかずむかはまほしけれ。めでたしとみる人の、心おとりせらるゝ本性みえんこそ、くちをしかるべけれ。

しなかたちこそ生れつきたらめ、心は賢より賢にもうつさばうつらざらん。かたち心ざまよき人も才なく成りぬれば、しなくだり、顏にくさげなる人にも立ちまじりて、かけずけおさるゝこそ、ほいなきわざなれ。

ありたき事は、まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道、また有職に公事のかた、人の鏡ならんこそいみじかるべけれ。手なゝどつたなからずはしりがき、聲をかしくて拍子とり、いたましうするものから、下戸ならぬこそ、男はよけれ。

2 ○そこなはるゝも――嵯峨本その他には「そこなはるゝをも」とある。

○馬車にいたるまで――吉澤本「にいたる」の四字なし。

九條殿――右大臣藤原師輔。忠平の子で朱雀、村上の二朝に仕へた。子孫の爲に作つた「遺誡」一篇がある。

順德院――八十四代順德天皇。禁中の事ども云々は御著「禁祕抄」をさしてゐる。

3 ○色このまざらん――吉澤本「色このみならざらん」。

第二段

いにしへの聖の御代の政をもわすれ、民の愁へ、國のそこなはるゝもしらず、よろづにきよらをつくして、いみじとおもひ、所せきさましたる人こそ、うたておもふところなく見ゆれ。「衣冠より馬車にいたるまで、あるにしたがひて用ひよ、美麗をもとむることなかれ」とぞ、九條殿の遺誡にも侍る。順德院の禁中の事どもかゝせ給へるにも、「おほやけのたてまつり物は、おろそかなるをもつてよしとす」とこそ侍れ。

第三段

よろづにいみじくとも、色このまざらん男は、いとさうざうしく、玉の扈の當なきこゝちぞすべき。

露、霜にしほたれて、所さだめずまどひありき、親のいさめ、世のそしりをつゝむに心のいとまなく、あふさきるさに思ひみだれ、さるはひとり

寢がちにまどろむ夜なきこそをかしけれ。

さりとて、ひたすらたはれたるかたにはあらで、女にたやすからず思はれんこそ、あらまほしかるべきわざなれ。

第四段

後の世の事心にわすれず、佛の道うとからぬ、こゝろにくし。

第五段

不幸に愁にしづめる人の、頭おろしなど、ふつゝかに思ひとりたるにはあらで、あるかなきかに門さしこめて、待つこともなく明し暮したる、さるかたにあらまほし。顯基中納言のいひけん、配所の月、罪なくて見んこと、さもおぼえぬべし。

第六段

5 顯基中納言――從三位權中納言源顯基、大納言俊賢の子で、後一條院の近習であつたが、院の崩後剃髮して大原に住む。配所の月云々の事は「發心集」「撰集抄」「十訓抄」等に見えてゐる。

わが身のやんごとなからんにも、まして數ならざらんにも、子といふものなくてありなん。

前中書王、九條太政大臣、花園左大臣、みな族絶えんことを願ひたまへり。染殿大臣も、「子孫おはせぬぞよく侍る。末のおくれ給へるはわろき事なり」とぞ、世繼の翁の物語には云へる。聖德太子の御墓をかねてつかせ給ひける時も、「こゝをきれ、かしこをたて、子孫あらせじと思ふなり」と侍りけるとかや。

第七段

あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ちさらでのみ住み果つるならひならば、いかに物のあはれもなからん。世は定めなきこそいみじけれ。

命あるものをみるに、人ばかり久しきはなし。かげろふのゆふべをまち、夏のせみの春秋をしらぬもあるぞかし。つくづくと一年をくらすほどだにも、こよなうのどけしや。あかず惜しと思はゞ、千年を過すとも、一夜の

6 前中書王――醍醐天皇の皇子、中務卿兼明親王。中書は中務の唐名。村上天皇の皇子、具平親王を後中書王といふのに對し「前」といふ。

九條太政大臣――大宮太政大臣藤原伊通。二子があつたが夭折した。

花園左大臣――後三條院の御孫源有仁。矢張り子のない人であつた。

染殿大臣――太政大臣藤原良房。染殿は所の名である。

世繼の翁の物語――「大鏡」をさす。

聖德太子――推古天皇の皇太子、佛敎に御熱心であつた。

7 あだし野――共同墓地のあつた所。嵯峨野の奥、愛宕山の南麓あたりの總稱であるといふ。

鳥部山――洛東、阿彌陀が峯の裾、清水寺の下にある墓地。

○あらまし――吉澤本「あらまほし」。
○なりゆきなん――嵯峨本その他「なりゆくなん」。

8
○かりの物なるに――吉澤本「かりの物ぞかし」。
○心ときめき――嵯峨本、吉澤本その他には「必ず心ときめき」とある。
久米の仙人――元享釋書、卷十八に「久米仙人者和州葛上郡人。入深山學仙法。食松葉、服薜荔。一日騰空、飛過故里。會々婦人以足踏浣衣。其脛甚白、忽生染心、即時墜落云々」とある。

夢のこゝちこそせめ。住み果てぬ世に、みにくきすがたを待ちえて何かはせん。命ながければ辱おほし。ながくとも、四十にたらぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。

そのほどすぎぬれば、かたちをはづる心もなく、人に出でまじらはんことを思ひ、夕の陽に子孫を愛し、さかゆくすゑを見んまでのいのちをあらまし、ひたすら世をむさぼる心のみふかく、ものゝあはれもしらずなりゆきなんあさましき。

第八段

世の人のこゝろまどはすこと、色欲にはしかず。

人のこゝろは愚なるものかな。にほひなどは、かりの物なるに、しばらく衣裳にたきものすとしりながら、えならぬにほひには、心ときめきするものなり。

久米の仙人の、ものあらふ女の脛のしろきを見て、通をうしなひけんは

○ものうちいひたる――吉澤本、嵯峨本その他には「うち」の二字なし。
六塵の樂欲――佛教語。六塵は眼、耳、鼻、舌、身、意、即ち六根の欲を起す色、聲、香、味、觸、法の六つの穢れをいふ。
○なしとぞみゆ――嵯峨本「なしとみゆる」。

まことに、手あし、肌などの、きよらに肥えあぶらづきたらんは、外の色ならねば、さもあらんかし。

第九段

女は髪のめでたからんこそ、人のめだつべかめれ。

人のほど、心ばへなどは、ものうちいひたるけはひにこそ、物ごしにも知らるれ。

ことに觸れてうちあるさまにも人の心をまどはし、すべて女の、うちとけたるいもねず、身を惜しともおもひたらず、たふべくもあらぬわざにもよく堪へしのぶは、たゞ色をおもふがゆゑなり。

まことに、愛着の道、その根ふかく源とほし。六塵の樂欲おほしといへども、みな厭離しつべし。そのなかに、たゞ彼のまどひのひとつ止めがたきのみぞ、老いたるもわかきも、智あるも愚なるも、かはる所なしとぞみゆ。

○女の髪すぢにて――嵯峨本その他「女の髪すぢを」。
大象もよくつながれ――大威德陀羅尼經第十九に「以二女人髮一爲二作一綱維一香象能繫云々」とある。
秋の鹿かならず――出處不明。野槌に「近代參河國、安部ノ山人都ニノボリ、名アル遊女ノハケル履ヲトリテ歸リ、笛ニ作リテ、阿部山ノ中ニ入リ、是ヲ吹クニ鹿ノ多クヨル事、常ノアシダニテ作レル笛ヨリモ、マサリテ、シルシアリ云々」。
○10 ○きららか――嵯峨本「きよらか」。

されば、女の髪すぢにてよれる綱には、大象もよくつながれ、女のはけるあしだにてつくれる笛には、秋の鹿かならずよるとぞいひ傳へ侍る。みづからいましめて、おそるべくつゝしむべきはこのまどひなり。

第十段

家居のつきづきしくあらまほしきこそ、かりのやどりとは思へど、興あるものなれ。

よき人ののどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、ひときはしみじみと見ゆるぞかし。今めかしくきららかならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子、透垣のたよりをかしく、うちある調度も、むかしおぼえてやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。

おほくのたくみの、心をつくしてみがきたて、唐の、大和の、めづらしくえならぬ調度どもならべおき、前栽の草木まで、心のまゝならずつくりなせるは、見る目もくるしく、いとわびし。さてもやはながらへ住むべき。

○うちみるよりも――吉澤本、嵯峨本「も」なし。
後德大寺大臣――左大臣藤原實定。歌をよくした。西行はもとその家人で、これは西行が出家修行の後訊ねて來た時の話である。古今著聞集卷十五に出てゐる。
西行――俗名右兵衞尉佐藤義清。後鳥羽院の北面であつたが後出家した。歌人で山家集の著がある。
○鳶のゐたらん――吉澤本、嵯峨本「鳶のゐたらんは」。
綾小路宮――鶴山院の第十三皇子性惠法親王。
11 栗栖野――京都市東山區中科のあたりにある。歌枕。

また時のまの煙ともなりなんとぞ、うちみるよりもおもはるゝ。

おほかたは、家居にこそ、ことざまはおしはからるれ。

後德大寺大臣の、寢殿に鳶ゐさせじとて、繩をはられたりけるを、西行が見て、「鳶のゐたらん、何かはくるしかるべき。この殿の御心、さばかりにこそ」とて、その後はまゐらざりけると聞きはんべるに、綾小路宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや繩をひかれたりしかば、かのためし思ひ出られ侍りしに、まことや「烏のむれゐて池の蛙をとりければ、御覽じかなしませ給ひてなん」と人のかたりしこそ、さてはいみじくこそとおぼえしか。德大寺にも、いかなるゆゑか侍りけん。

第十一段

神無月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入ること侍りしに、遙なる苔の細道をふみわけて、心ぼそく住みなしたる庵あり。木の葉にうづもるゝ筧のしづくならでは、露おとなふものなし。閼伽棚に菊、

紅葉なんど折りちらしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよとあはれにみるほどに、かなたの庭に、おほきなる柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしくかこひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばとおぼえしか。

第十二段

おなじ心ならん人と、しめやかに物語して、をかしき事も、世のはかなき事も、うらなくいひなぐさまんこそうれしかるべきに、さる人あるまじければ、露たがはざらんとむかひゐたらんは、ひとりあるこゝちやせん。たがひにいはんほどの事をば、げにと聞くかひあるものから、いさゝかたがふ所もあらん人こそ、「我はさやはおもふ」などあらそひにくみ、「さるからさぞ」ともうち語らはば、つれづれなぐさまめとおもへど、げにはすこしかこつかたも、我とひとしからざらん人は、大方のよしなしごといはんほどこそあらめ、まめやかの心の友には、遥かにへだたる所のありぬべきぞわびしきや。

第十三段

ひとりともし火のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするこそ、こよなうなぐさむわざなれ。文は文選のあはれなる巻々、白氏文集、老子のことば、南華の篇、この國のはかせどもの書けるも、いにしへのは、あはれなることおほかり。

第十四段

和歌こそなほをかしきものなれ。あやしの賤山がつのしわざもいひ出づればおもしろく、おそろしきゐのししも、ふすゐの床といへば、やさしくなりぬ。

このごろの歌は、ひとふしをかしくいひかなへたりと見ゆるはあれど、ふるき歌どものやうに、いかにぞや、ことばの外にあはれにけしきおぼゆ

13 ○友とするこそ、……わざなれ——嵯峨本「友とするぞ、……わざなる」。
文選——梁の武帝の子昭明太子の撰、周末より六朝までの詩文を輯む。
白氏文集——唐の白樂天の詩文集。
老子のことば——「老子」即ち老子經二巻、老聃の著。
南華の篇——所謂「莊子」のこと。南華眞經ともいふ。周の莊周の撰である。

14 貫之――紀貫之。古今和歌集の撰者の一人。

絲による――古今集巻九羈旅部「絲によるものならなくにわかれ路の心ぼそくもおもほゆるかな」。

○古今集の――嵯峨本、吉澤本その他「古今集の中の」とある。

古今集――醍醐帝の勅により、貫之、躬恒、友則、忠岑これを撰ぶ。勅撰集の始。

○その世のうたには――吉澤本「その頃のうたに」は「の」字なし。

源氏物語――紫式部の作。五十四帖。

ものとはなしに――源氏、總角の巻に「物とはなしにと貫之がこの世ながらの別れたゞに心細きすぢに引きかけけんを云云」と出てゐる。

るはなし。

貫之が「絲によるものならなくに」といへるは、古今集の歌くづとかやいひつたへたれど、今の世の人のよみぬべきことがらとは見えず。その世のうたには、すがた・詞このたぐひのみおほし。この歌にかぎりて、かくいひたてられたるも知りがたし。源氏物語には、「ものとはなしに」とぞかける。新古今には、「殘る松さへ嶺にさびしき」といへる歌をぞいふなるは、まことにすこしくだけたる姿にもや見ゆらん。されど、この歌も衆議判のとき、よろしきよし沙汰ありて、後にも殊更に感じ仰せ下されけるよし、家長が日記にはかけり。

歌の道のみいにしへにかはらぬなどいふこともあれど、いさや。今もよみあへるおなじ詞、歌枕も、むかしの人のよめるは、さらにおなじものにあらず。やすくすなほにして、すがたもきよげに、あはれもふかく見ゆ。

梁塵秘抄の郢曲のことばこそ、またあはれなることはおほかめれ。むかし

新古今――後鳥羽上皇の院宣で、通具、有家、定家、家隆、雅經が撰した。

殘る松さへ――新古今集冬の部に「冬の來て山もあらはに木の葉ふり殘る松さへ嶺にさびしき」とある。祝部成仲の作。

家長――源家長、後鳥羽上皇和歌所を置き給うた時、その開闔となつた。

梁塵秘抄――法文歌神樂歌など平安朝時代の謠物を集めた書。後白河院の勅撰と云はれてゐる。近時その零本が發見され佐佐木信綱氏の校訂で出版された。

郢曲――神樂歌、催馬樂、風俗歌、今樣、朗詠など謠物の總稱。

○むかしの人は――嵯峨本その他には「いかに」との間に

しの人はいかにいひすてたることぐさも、みないみじくきこゆるにや。

第十五段

いづくにもあれ、しばし旅だちたるこそ、めさむるこゝちすれ。そのわたり、こゝかしこ見ありき、ゐなかびたる所、山里などは、いとめなれぬ事のみぞおほかる。都へたよりもとめて文やる。「その事かの事便宜にわするな」など云ひやるこそ、をかしけれ。さやうの所にてこそ、よろづに心づかひせらるれ。

もてる調度まで、よきはよく、能ある人、かたちよき人も、常よりはをかしとこそ見ゆれ。

寺、社などに忍びてこもりたるもをかし。

第十六段

神樂こそなまめかしくおもしろけれ。おほかたものゝ音には、笛、篳篥。

「たゞ」の二字がある。

16 ○ものゝ音には――吉澤本「ものゝねは」。

18 許由――堯帝の時の賢人。堯が天子を讓らうとしたが受けず箕山にかくれた。本文の瓢の件は箕山でのことである。○かけたりければ――嵯峨本、吉澤本等には「かけたりけるが」とある。

つねにきゝたきは、琵琶・和琴。

第十七段

山寺にかきこもりて、佛につかうまつるこそ、つれづれもなく、心の濁もきよまるこゝちすれ。

第十八段

人はおのれをつゞまやかにし、おごりを退けて財をもたず、世をむさぼらざらんぞ、いみじかるべき。むかしより賢き人の富めるは稀なり。

もろこしに許由といひつる人は、さらに身にしたがへるたくはへもなくて、水をも手してさゝげて飲みけるを見て、なりひさごといふものを、人の得させたりければ、ある時、木の枝にかけたりければ、風に吹かれてなりけるを、かしがましとて捨てつ。また、手にむすびてぞ水も飲みける。いかばかり心のうちすゞしかりけん。孫晨は冬月に衾なくて、藁一束あ

孫晨――蒙求に「孫晨、字元公、家貧織レ席爲レ業。明ニ詩書一。爲ニ京兆功曹一。冬月無レ被、有ニ藁一束一、暮臥朝收。」

19 ものゝあはれは――拾遺集卷一、讀人しらず「春はたゞ花のひとへに咲くばかり物のあはれは秋ぞまされる」。白樂天の詩に「大抵四時心惣苦就中腸斷是秋天」など秋のあはれを云つてゐる。

りけるを、夕にはこれに臥し、朝にはをさめけり。もろこしの人は、これをいみじと思へばこそ、しるしとゞめて世にもつたへけめ。これらの人はかたりも傳ふべからず。

第十九段

をりふしのうつりかはるこそ、物ごとにあはれなれ。

「ものゝあはれは秋こそまされ」と人ごとにいふめれど、それもさるものにて、今ひときは心もうきたつものは、春のけしきにこそあめれ。鳥の聲なども、ことのほかに春めきて、のどやかなる日影に、かきねの草萌えいづるころより、やゝ春ふかく霞みわたりて、花もやうやうけしきだつほどこそあれ、折しも雨風うちつゞきて、心あわたゞしく散りすぎぬ。青葉になりゆくまで、よろづにたゞ心をのみぞなやます。花橘は名にこそおへれ、なほ梅のにほひにぞ、いにしへのこともたちかへり、こひしう思ひいでらるゝ。山吹のきよげに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひすてが

灌佛――四月八日、釋迦誕生の日、朝廷で行はれた法會。佛生會、灌佛會、灌佛など云はれてゐる。
祭――加茂の葵祭。卯月中の酉の日。
○世のあはれも――吉澤本「世のあはれさも」。
○げにさるものなれ――吉澤本「まことさるものなれ」。
○夕顔のしろく――吉澤本「く」なし。
六月祓――六月晦日半年間の身の罪穢を拂ひ清める神事。大祓、夏祓、なごしの祓などともいふ。
七夕――七月七日の夜牽牛、織女二星が天の川で相逢ふを祝福する祭。
○わさ田――吉澤本

たきことおほし。

灌佛のころ、祭のころ、「若葉の梢すゞしげに茂りゆくほどこそ、世のあはれも、人の戀しさもまされ」と、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月、あやめふくころ、早苗とるころ、水雞のたゝくなど、心ぼそからぬかは。六月のころ、あやしき家に、夕顔のしろく見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。

七夕まつるこそなまめかしけれ。やうやう夜寒になるほど、雁なきてくるころ、萩の下葉色づくほど、わさ田刈りほすなど、とりあつめたること、は、秋のみぞおほかる。また野分のあしたこそをかしけれ。いひつゞくれば、みな源氏物語、枕草紙などにことふりにたれど、おなじことまた今さらにいはじとにもあらず。おぼしき事いはぬは、腹ふくるゝわざなれば、筆にまかせつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやり捨つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

さて、冬がれの景色こそ、秋にはをさをさおとるまじけれ。汀の草に紅

「早苗田」。
枕草紙――清少納言の著。
○かいやり――嵯峨木「かつやり」。
御佛名――十二月十九日より三日間、清涼殿で僧侶に三世の諸佛の名號を唱へしめる佛事。
荷前の使――年の暮に諸國からの貢物の初穂を朝廷より十陵八墓にすゝめ幣帛を奉る爲に立てる使者。
追儺――十二月晦日人を疫病の鬼に扮せしめて、追ひやらふ式。
四方拜――元旦未明天皇が清涼殿東階の庭に出御、天地、四方、山陵を拜せられ、年災を祓ひ、五穀の

葉の散りとゞまりて、霜いとしろうおける朝、やり水より煙のたつこそをかしけれ。年のくれはてて、人毎にいそぎあへるころぞ、またなくあはれなる。すさまじきものにして、見る人もなき月の、さむけくすめる二十日あまりの空こそ、心ぼそきものなれ。御佛名、荷前の使たつなどぞ、あはれにやんごとなき。公事どもしげく、春のいそぎにとりかさねて、もよほしおこなはるゝさまぞいみじきや。追儺より四方拜につゞくこそおもしろけれ。つもごりの夜いたう暗きに、松どもともして、夜半すぐるまで、人の門たゝきはしりありきて、何事にかあらん、ことごとしくのゝしりて、足を空にまどふが、曉がたより、さすがに音なくなりぬるこそ、年の名残もこゝろぼそけれ。なき人のくる夜とて、靈祭るわざは、このごろ都にはなきを、あづまのかたには猶することにてありしこそ、あはれなりしか。

かくて明けゆく空のけしき、昨日にかはりたりとは見えねど、ひきかへめづらしきこゝちぞする。大路のさま、松たてわたして、はなやかにうれ

しげなるこそ、またあはれなれ。

第二十段

なにがしとかやいひし世すて人の、「この世のほだしもたらぬ身に、たゞそらの名殘のみぞ惜しき」といひしこそ、まことにさもおぼえぬべけれ。

第二十一段

よろづの事は、月見るにこそなぐさむものなれ。ある人の、「月ばかりおもしろきものはあらじ」といひしに、またひとり、「露こそあはれなれ」ともらそひしこそをかしけれ。折にふれば、何かはあはれならざらん。

月花はさらなり。風のみこそ人に心はつくめれ。岩にくだけて清くながるゝ水のけしきこそ、時をもわかずめでたけれ。沉湘日夜東に流去る。愁人のためにとゞまることしばらくもせず」といへる詩を見侍りしこそ、あはれなりしか。

21 沉湘——沉も湘も河の名。この詩は三體詩卷一にある唐の戴叔倫の作。

○しばらくもせず——嵯峨本「少時もせず」、吉澤本「しばらく時もせず」。

豐穰、寶祚の長久を祀られ。儀式。靈祭るわざ——精靈祭のこと。年二回、七月十四日、十二月晦日の夜行つた。

嵇康——竹林の七賢人の一人。同じく七賢人の一人の山濤が晉の吏部尚書であつたが、嵇康をあげて己に代らせようとした。康、絶交の書を送つて曰く、「遊ニ山澤一觀二鳥魚一心甚樂之。一行作レ吏此事便廢」。

○魚鳥を見て——嵯峨本始め諸本には「見れば」とある。

22 主殿寮——宮內省被管の寮。燈燎、湯沐、洒掃、饗奬、供御等を掌る。

最勝講——毎年五月吉日を選び、五日間、東大寺、興福寺、延曆寺、園城寺の僧を召して清涼殿で最勝

嵇康も「山澤にあそびて魚鳥を見て心たのしぶ」といへり。人とほく、水草きよき所にさまよひありきたるばかり、心なぐさむことはあらじ。

第二十二段

何事も、ふるき世のみぞしたはしき。いまやうは無下にいやしくこそなりゆくめれ。

彼の木の道のたくみの作れるうつくしきうつはものも、古代のすがたこそ、をかしと見ゆれ。

文のことばなどぞ、むかしの反古どもはいみじき。たゞいふ詞も、くちをしうこそなりもてゆくなれ。いにしへは「車もたげよ」「火かゝげよ」とこそいひしを、今やうの人は「もてあげよ」「かきあげよ」といふ。主殿寮の「人數たて」といふべきを、「たちあかししろくせよ」といひ、最勝講の御聽聞所なるをば、「御講の廬」といふべきを、「講廬」といふ、くちをしとぞ、ふるき人の仰せられし。

王經を講ぜしめられた法會。
御聽聞所――天子の講經を御聽聞になる所。
御講の廬――天子の最勝講を御聽聞になる御座席。
○御講の廬といふべきを――吉澤本、嵯峨本「とこそいふを」。
九重――内裏のこと。
露臺――仁壽殿の南にある。屋根のない板敷の臺で、五節の亂舞など行はれる。
朝餉――清涼殿の中の南にある。天子の朝餉を召されるところ。
小蔀――蔀は日をよけ雨風を防ぐ戸で、細い木を碁盤に組んだ格子に板をけ上下二枚にしたもの。

第二十三段

おとろへたる末の世とはいへど、なほ九重のかみさびたるありさまこそ世づかずめでたきものなれ。

露臺、朝餉、何殿、何門などは、いみじとも聞ゆべし。あやしの所にもありぬべき、小蔀、小板敷、高遣戸なども、めでたくこそきこゆれ。

「陣に夜の設せよ」といふこそいみじけれ。夜の御殿のをば、「かいともし、とうよ」などいふ、まためでたし。上卿の、陣にておこなへるさまは更なり、諸司の下人どもの、したり顔になれたるもをかし。さばかり寒き夜もすがら、こゝかしこにねぶりゐたるこそをかしけれ。

「内侍所の御鈴のおとは、めでたく優なるものなり」とぞ、德大寺の太政大臣はおほせられける。

第二十四段

小蔀はそれの小さいもので、殿上六間にあり、主上の殿上をみそなはす所。
小板敷――清涼殿の南小庭から殿上に昇る階の上の板敷。
高遣戸――清涼殿の坤の廊下の間にある。
陣――清涼殿の前紫震殿の西にあり、節會のとき諸卿の坐する所。
○夜の設せよと――吉澤本「せよなど」。夜の御殿――天子の御寢所。
○夜の御殿をば――吉澤本「夜の御殿のともし灯をば」。
○陣にておこなへる――吉澤本嵯峨本その他諸本に「陣にて事おこなへる」。
内侍所――神鏡の奉齋宮の野宮におはしますこそ、やさしくおもしろきことのかぎりとは覺えしか。「經」「佛」などいみて、「なかご」「染紙」などいふなるもをかし。

すべて神の社こそ、すてがたくなまめかしきものなれや。ものふりたる森のけしきもただならぬに、玉垣しわたして、榊に木綿かけたるなど、いみじからぬかは。殊にをかしきは、伊勢、賀茂、春日、平野、住吉、三輪、貴船、吉田、大原野、松尾、梅宮。

第二十五段

飛鳥川の淵瀬、常ならぬ世にしあれば、時うつり事さり、たのしびかなしびゆきかひて、はなやかなりしあたりも、人すまぬ野らとなり、かはらぬ住家は人あらたまりぬ。桃李ものいはねば、誰とともにか昔をかたらむ。まして見ぬいにしへの、やんごとなかりけん跡のみぞ、いとはかなき。

京極殿、法成寺など見るこそ、志とゞまり、事變じにけるさまはあはれなれ。御堂殿の作りみがゝせ給ひて、庄園おほくよせられ、わが御族のみ

安所、溫明殿にある。徳大寺太政大臣――藤原實基。或はその子公孝とも云はれてゐる。

24 ○齋宮――嵯峨本「齋王」。齋宮――内親王を天照大神の御杖代に定め奉られること。野宮――齋宮、齋院が伊勢或は加茂に赴き、ふ前に、御齋戒のためにおはします宮の稱。齋宮のは嵯峨の有栖川に、齋院のは紫野にあつた。○おはしますこそ――嵯峨本始め諸本に「おはしますありさまこそ」とある。伊勢――伊勢大神宮。賀茂――京都の上鴨及び下鴨兩神社。春日――奈良、春日神社。平野――京都市上京區平野神社。住吉――大阪市住吉區住吉神社。三輪――大和、三諸山の三輪神社。貴船――京都府愛宕郡貴船神社。吉田――京都左京區吉田、吉田神社。大原野――京都府下乙訓郡、大原野神社。松尾――京都府葛野郡松尾村、松尾神社。梅宮――同葛野郡西梅津、梅宮。

25 飛鳥川――大和高市郡飛鳥の地を流れてゐる川。京極殿――藤原道長の邸宅。京極の西にあつたので京極殿といふ。善美をつくしたものであつたが、その竟後十三年目に燒け、また再興されなかつた。法成寺――道長の出

御門の御うしろみ、世のかためにて、行末までとおぼしおきし時、いかならん世にもかばかりあせはてんとはおぼしてんや。大門、金堂など、ちかくまでありしかど、正和のころ、南門は燒けぬ。金堂はその後たふれふしたるまゝにて、とりたつるわざもなし。無量壽院ばかりぞ、そのかたとてのこりたる。丈六の佛九體、いとたふとくてならびおはします。行成大納言の額、兼行がかける扉、あざやかに見ゆるぞあはれなる。法華堂などもいまだ侍るめり。是もまたいつまでかあらん。かばかりの名殘だになき所々は、おのづから石ずゑばかりのこるもあれど、さだかに知れる人もなし。

されば、よろづに見ざらん世までを、おもひおきてんこそ、はかなかるべけれ。

第二十六段

風も吹きあへずうつろふ人の心の花に、なれにし年月をおもへば、あはれと聞きし言の葉ごとに、わすれぬものから、わが世のほかになりゆくならひこそ、なき人のわかれよりもまさりて、悲しきものなれ。

されば白き糸のそまんことをかなしび、路のちまたのわかれん事をなげく人もありけんかし。堀川院の百首の歌の中に、

むかし見し妹が垣根はあれにけりつばなまじりのすみれのみして

さびしきけしき、さること侍りけん。

第二十七段

御國ゆづりの節會おこなはれて、劔、璽、内侍所わたし奉らるゝほどこそ、かぎりなう心ぼそけれ。

新院のおりゐさせ給ひての春、よませ給ひけるとかや、

殿守のとものみやつこよそにしてはならはぬ庭に花ぞちりしく

今の世のことしげきにまぎれて、院にはまゐる人もなきぞさびしげなる。かゝるをりにぞ、人のこころもあらはれぬべき。

宗後住んだ寺。京極の にあつた。南北の亂前まで舊址を止めてゐたが、水害で滅んだ。
御堂殿――藤原道長。
正和――花園天皇の年號。
無量壽院――法成寺の中にある阿彌陀堂。
行成大納言――藤原行成。道風、佐理とともに三蹟と云はれた能書家。
兼行――大和守藤原兼行。畫及び書をよくした。
○兼行がかける扉――吉澤本「扉など」。
23 白き糸の――淮南子說林訓に「墨子見ニ練絲一而泣レ之。爲ヤ其可ニ以黃一可ヤ以墨上」

第二十八段

諒闇の年ばかりあはれなることはあらじ。倚廬の御所のさまなど、板敷をさげ、葦の御簾をかけ、布の帽額あらあらしく、御調度どもおろそかに、皆人の裝束、太刀、平緒まで異樣なるぞゆゆしき。

第二十九段

しづかにおもへば、よろづ過ぎにしかたの戀しさのみぞせんかたなき。人しづまりて後、ながき夜のすさびに、何となき一足とりしたため、殘しおかじとおもふ反古など、やりすつるなかに、なき人の、手ならひ、畫かきすさびたる、見出でたるこそ、たゞその折のこゝちすれ。此頃ある人の文だに、久しくなりて、いかなるをり、いつの年なりけんと思ふは、あはれなるぞかし。手なれし具足なども、心もなく變らずひさしき、いとかなし。

路の巷の――同上
「楊子見ニ逵路一而哭レ之。爲ヤ其可ニ以南一可ヤ以北上」
堀川院の百首――「堀川院御時百首和歌」。權大納言公實の勸進。こゝに引いた歌は公實の詠。
27 劒――草薙劒。
璽――八坂瓊曲玉。
内侍所――神鏡の奉安所（第二十三段參照）。こゝでは、轉じて八咫鏡そのものをさしてゐる。
○おりゐさせ――嵯峨本、吉澤本「おりさせ」。
新院――花園院をさし奉るか。從つて後の「今の世」は後醍醐天皇の御代。
○ならはぬ――嵯峨本、吉澤本「な」の字なし。

第三十段

人のなきあとばかりかなしきはなし。
中陰のほど、山里などにうつろひて、便あしくせばき所にあまたあひゐて、後のわざどもいとなみあへる、心あわただし。日數のはやく過ぐるほどぞ、物にも似ぬ。果ての日は、いとなさけなう、たがひにいふこともなく、われかしこげに物ひきしたゝめ、ちりぢりに行きあかれぬ。もとのすみかに歸りてぞ、さらに悲しきことはおほかるべき。
「しかじかの事はあなかしこ、跡のためいむなることぞ」などいへるこそかばかりのなかに何かはと、人の心はなほうたておぼゆれ。
年月へても、露わするゝにはあらねど、去る者は日々に疎しといへることなれば、さはいへど、そのきはばかりはおぼえぬにや、よしなしごといひてうちもわらひぬ。
からはけうとき山の中にをさめて、さるべき日ばかりまうでつつ見れば

○人のこころも――吉澤本「人のこころは」。

28 倚廬――諒闇の間御寵居になる假り御所。

29 ○思ふは――吉澤本「思へば」。

○具足なども――吉澤本「などの」。

○心もなく――吉澤本、嵯峨本「心もなくて」

30 ○歸りてぞ――吉澤本「たち歸りてぞ」。

○わするゝ――嵯峨本「わすらるゝ」。

○うちもわらひぬ――吉澤本「うちわらひぬ」。

○夜の月のみぞ――吉澤本「のみ」の二字なし。

薪はくだかれ――文選二十九、古詩に「出ニ郭門一直視、但見ニ丘與レ墳、古墓犂レ田松柏摧レ爲レ薪。」とある。

○雪の事は――嵯峨本その他諸本には「は」の字なし。

○かへすがへすも――嵯峨本その他諸本には「も」の字なし。

32 ○うちかたりて――吉澤本「うちのぼりて」。

○ことざま優に――嵯峨本その他諸本に「ことざまの優に」とある。

○かやうのことは――吉澤本「は」の字なし。

程なく卒都婆も苔むし、木の葉ふり埋みて、夕の嵐、夜の月のみぞ、ことゝふよすがなりける。

おもひいでてしのぶ人あらんほどこそあらめ、そも又ほどなくうせて、聞きつたふるばかりの末々は、あはれとやはおもふ。さるはあとゝふわざもたえぬれば、いづれの人と名をだにしらず、年々の春の草のみぞ、心あらん人はあはれと見るべきを、はては嵐にむせびし松も、千年をまたで薪にくだかれ、古墳はすかれて田となりぬ。そのかただになくなりぬるぞかなしき。

第三十一段

雪のおもしろう降りたりし朝、人のがりいふべき事ありて、文をやるとて、雪のことは何ともいはざりし返事に、「この雪いかゞ見ると、一筆のたまはせぬ程の、ひがひがしからん人の仰せらるゝこと、聞き入るべきかは。かへすがへすもくちをしき御心なり」といひたりしこそ、をかしかりしか。今はなき人なれば、かばかりのことも忘れがたし。

第三十二段

九月二十日のころ、ある人にさそはれ奉りて、明くるまで月見ありくこと侍りしに、おぼし出づる所ありて、案内せさせて入り給ひぬ。あれたる庭の露しげきに、わざとならぬ匂ひしめやかにうちかをりて、忍びたる氣はひ、いと物あはれなり。よき程にて出で給ひぬれど、なほことざま優におぼえて、ものゝかくれよりしばし見ゐたるに、妻戸を今すこしおしあけて、月見るけしきなり。やがてかけこもらましかば、くちをしからまし。跡まで見る人ありとはいかでか知らん。かやうのことは、たゞ朝夕の心づかひによるべし。その人ほどなくうせにけりと聞き侍りし。

第三十三段

今の内裏つくり出されて、有識の人々に見せられけるに、いづくも難な

33 玄輝門院――伏見天皇の母后、洞院左大臣藤原實雄の女。閑院殿――京都二條の南、西洞院の西、一町四方を占めた邸。藤原冬嗣の居第であつた。後嵯々皇居となり、殊に後鳥羽帝より龜山帝まで八代七十年間の皇居であつた。

○是は葉の入りて――吉澤本「是は」の二字なし。

34 金澤――武藏國久良岐郡。金澤文庫のある所。

しとて、すでに遷幸のはちかくなりけるに、玄輝門院御覽じて、「閑院殿のくしがたの穴は、まろくふちもなくてぞありし」と、仰せられける、いみじかりけり。

是は葉の入りて、木にてふちをしたりければ、あやまりにて、なほされにけり。

第三十四段

甲香はほら貝のやうなるが、ちひさくて、口のほどのほそながにして出でたる貝のふたなり。武藏の國金澤といふ浦にありしを、所の者は、「へなたり」と申し侍るとぞいひし。

第三十五段

手のわろき人の、はばからず文かきちらすはよし。見ぐるしとて、人に書かするはうるさし。

37 ○ともある時に――嵯峨本その他の諸本「に」の字なし。

第三十六段

久しくおとづれぬ頃、いかばかりうらむらんと、わがおこたり思ひしられて、言葉なきこゝちするに、女のかたより、「仕丁やある、ひとり」などいひおこせたるこそ、ありがたくうれしけれ。さる心ざましたる人ぞよきと人の申し侍りし、さもあるべきことなり。

第三十七段

朝夕へだてなくなれたる人の、ともある時に、われに心おき、ひきつくろへるさまにみゆるこそ、今更かくやはなどいふ人もありぬべけれど、なほげにげにしく、よき人かなとぞおぼゆる。

第三十八段

うとき人のうちとけたる事などいひたる、またよしと思ひつきぬべし。

8 身の後には――白氏文集巻二十一に「身後堆金拄ニ北斗一、不如ニ生前一樽酒一」とある。
○よろこばしむるたのしみ――吉澤本「よろこばしむるたのみ」。
金は山にすて――文選巻一「賤ニ奇麗一而不珍、捐ニ金於山一、沈ニ珠於淵一云々」。
○やんごとなきをしも――吉澤本「やんごとなき人をしも」。
○高き にのぼり――吉澤本「高き位にいたり」。

名利につかはれて、しづかなるいとまなく、一生をくるしむるこそおろかなれ。

財おほければ身を守るにまどし。害をかひ、わづらひをまねくなかだちなり。身の後には、金をして北斗をさゝふとも、人のためにぞわづらはるべき。愚なる人の目をよろこばしむるたのしみ、またあぢきなし。大なる車、肥えたる馬、金玉のかざりも、こゝろあらん人は、うたておろかなりとぞ見るべき。金は山にすて、玉は淵になぐべし。利にまどふはすぐれておろかなる人なり。

うづもれぬ名をながき世に残さんこそあらまほしかるべけれ。位たかくやんごとなきをしも、すぐれたる人とやはいふべき。おろかにつたなき人も、家に生れ時にあへば、高き位にのぼり、おごりをきはむるもあり。いみじかりし賢人、聖人、みづからいやしき位にをり、時にあはずしてやみぬる、またおほし。ひとへにたかきつかさ位をのぞむも、次におろかなり。

○智惠と心こそ――嵯峨本その他諸本に「智惠と心とこそ」。
○願はんや――嵯峨本その他諸本「や」の字なし。
○智惠出でては――嵯峨本「智惠ひいでては」。
○學びてしるは――吉澤本「ならひてしるは」
○愚をまもるに――嵯峨本その他の諸本に「愚をまもるには」とある。

智惠と心こそ、世にすぐれたる譽も殘さまほしきを、つらつらおもへばほまれを愛するは人の聞きをよろこぶなり。ほむる人、そしる人、ともに世にとどまらず。傳へきかん人、またまたすみやかに去るべし。誰をかはぢ、誰にか知られんことを願はんや。譽はまた毀の本なり。身の後の名殘りて更に益なし。これを願ふも次におろかなり。

たゞし、しひて智をもとめ、賢をねがふ人のためにいはば、智惠出ては偽あり、才能は煩惱の增長せるなり。

つたへて聞き、學びてしるは、まことの智にあらず。いかなるをか智といふべき。可不可は一條なり。いかなるをか善といふ。眞の人は智もなく、德もなく、功もなく、名もなし。誰か知り、誰か傳へん。是れ德をかくし、愚をまもるにあらず。本より賢愚得失のさかひに居らざればなり。

まよひの心をもちて、名利の要をもとむるに、かくのごとし。萬事はみな非なり。いふにたらず、ねがふにたらず。

39 法然上人――浄土宗の開祖、美作の人、名は源空、建暦二年入寂。圓光大師と諡せられた。
○このさはり――吉澤本「このさはかり」

第三十九段

ある人、法然上人に、「念佛の時、睡におかされて、行をおこたり侍ること、いかゞしてこのさはりをやめ侍らん」と申しければ、「目のさめたらんほど、念佛し給へ」と答へられたりける、いと尊かりけり。また「往生は一定とおもへば一定、不定とおもへば不定なり」といはれけり。是も尊し。また「うたがひながらも念佛すれば往生す」ともいはれけり。これもまた尊し。

第四十段

因幡國に、何の入道とかやいふ者の娘、かたちよしと聞きて、人あまたいひわたりけれども、このむすめ、たゞ栗をのみ食ひて、さらに米のたぐひをくはざりければ、かゝることやうの者、人に見ゆべきにあらずとて、親ゆるさざりけり。

41 加茂のくらべ馬――上加茂神社で五月五日に催される競馬。
○たちへだてゝ――吉澤本「たちへだたりて」。
○よらざらんなれど

第四十一段

五月五日、加茂のくらべ馬を見侍りしに、車の前に雜人たちへだてゝ見えざりしかば、各おりて、埒のきはによりたれど、殊に人おほくたちこみて、わけ入りぬべきやうもなし。かゝる折に、むかひたる樗の木に、法師ののぼりて、木の股についゐて物みるあり。とりつきながら、いたうねぶりて、落ちぬべき時に目をさますこと度々なり。これを見る人、あざけりあざみて、「世のしれものかな。かくあやふき枝の上にて、やすき心ありて、ねぶるらんよ」といふに、わが心にふと思ひしまゝに、「われらが生死の到來、たゞ今にもやあらん。それを忘れて、もの見て日をくらす。愚なることは、なほまさりたるものを」といひたれば、前なる人ども、「まことにさにこそ候ひけれ。最もおろかに候」といひて、みなうしろを見かへりて、「こゝへいらせ給へ」とて、所をさりてよび入れ侍りにき。かほどのことわり、誰かは思ひよらざらんなれども、折からのおもひかけぬこゝち

も――吉澤本「も」の字なし。

42 唐橋中將――袋譜中將雅清。村上源氏で久我の庶流である。

○師する――吉澤本「師とする」。

○年のやうやう――吉澤本「年やうやう」

○顔のほど――嵯峨本その他諸本には「額のほど」とある。

○あることにこそ――嵯峨本吉澤本「あることにこそありけれ」。

して、胸にあたりけるにや。人木石にあらねば、時にとりて物に感ずることなきにあらず。

第四十二段

唐橋中將といふ人の子に、行雅僧都とて、教相の人の師なる僧ありけり。氣の上る病ありて、年のやうやうたくるほどに、鼻の中ふたがりて、息も出でがたかりければ、さまざまにつくろひけれど、わづらはしくなりて、目、眉、額などもはれまどひて、らちおほひければ、物も見えず、二の舞の面のやうに見えけるが、たゞおそろしく鬼の顔になりて、目はいただきのかたにつき、顔のほど鼻になりなどして、のちは坊のうちの人にも見えず、こもりゐて、年ひさしくありて、なほわづらはしくなりて、死にけり。かゝる病もあることにこそ。

第四十三段

春のくれつかた、のどやかに艶なる空に、いやしからぬ家の奥ふかく、木立ものふりて、庭にちりしをれたる花、見過しがたきを、さし入りて見れば、南面の格子皆おろして、さびしげなるに、東にむきて、妻戸のよきほどにあきたる、御簾の破れよりみれば、かたちきよげなる男の、年二十ばかりにて、打とけたれど、心にくゝのどやかなるさまして、机の上に文をくりひろげて見ゐたり。いかなる人なりけん、尋ねきかまほし。

第四十四段

あやしの竹のあみ戸のうちより、いとわかき男の、月影にいろあひさだかならねど、つやゝかなる狩衣に、濃き指貫、いとゆゑづきたるさまにて、さゝやかなる童ひとりをぐして、はるかなる田の中のほそ道を、稲葉の露にそぼちつつわけゆくほど、笛をえならず吹きすさびたる、あはれと聞き知るべき人もあらじと思ふに、ゆかんかた知らまほしくて、見おくりつゝ行けば、笛を吹きやみて、山の際に惣門のあるうちに入りぬ。

44 ○寢殿より廊に――嵯峨本その他諸本には「寢殿より御堂の廊に」とある。

公世の二位――從二位侍從藤原公世。箏の名手であつた。

○せうとに良覺僧正と聞えしは――吉澤本「せうとは、良覺僧正と聞えしが」。

榻にたてたる車の見ゆるも、都よりは目とまる心地して、下人にとへば、「しかじかの宮のおはしますころにて、御佛事などさぶらふにや」といふ。御堂のかたに法師どもまゐりたり。夜寒の風にさそはれくるそらだきものの、にほひも、身にしむここちす。寢殿より廊にかよふ女房の、おひ風用意など、人めなき山里ともいはず、心づかひしたり。

心のままにしげれる秋の野らは、おきあまる露にうづもれて、蟲の音かごとがましく、遣水の音のどやかなり。都の空よりは、雲の往來もはやきこゝちして、月のはれくもることさだめがたし。

第四十五段

公世の二位のせうとに、良覺僧正と聞えしは、きはめて腹あしき人なりけり。坊のかたはらにおほきなる榎の木のありければ、人、「榎木の僧正」とぞいひける。この名しかるべからずとて、かの木をきられにけり。その根のありければ、「きりくひの僧正」といひけり。いよいよ腹立ちて、きりくひをほりすてたりければ、その跡おほきなる堀にてありければ、「堀池僧正」といひける。

良覺僧正――叡山の大僧正、和歌をよくした。

○ほりすてたりければ――吉澤本「ければ」の三字なし。

○堀池僧正と――嵯峨本「堀池僧正とぞ」。

43 柳原――今の上京區室町邊か。

47 清水――洛東音羽山清水寺。

比叡山――京都市の東北、山上に延曆寺がある。

第四十六段

柳原の邊に、强盜法印と號する僧ありけり。たびたび强盜にあひたるゆゑに、この名をつけにけるとぞ。

第四十七段

ある人清水へまゐりけるに、老いたる尼の行きつれたりけるが、道すがら「くさめくさめ」といひもてゆきければ、「尼御前何事をかくはのたまふぞ」と問ひけれども、いらへもせず、なほいひやまざりけるを、たびたびとはれて、うち腹立ちて、「やゝ、はなひたるとき、かくまじなはねば死ぬるなりと申せば、やしなひ君の、比叡山におはしますが、たゞ今もやはなひ給はんと思へば、かく申すぞかし」といひけり。ありがたき志なりけ

○比叡山におはします――嵯峨本、吉澤寺「比叡山にぞにておはします」。

48 光親卿――正二位按察使權中納言藤原光親。才學すぐれた人であつた。

院――後鳥羽上皇だといふ。

最勝講――第二十二段參照。

○物くひちらしたる――嵯峨本その他諸本に「さてくひちらしたる」。

○罷りいでにける――嵯峨本はじめ諸本「罷りいでにけり」。

49 老來りて――寒山の詩に「莫下待ニ老來一方學ヒ道、古墳多是少年人」。

んかし。

第四十八段

光親卿、院の最勝講奉行してさぶらひけるを、御前へ召されて、供御を出されてくはせられけり。物くひちらしたる衝重を、御簾の中へさし入れて罷りいでにける。女房、「あなきたな、誰にとれとてか」など申しあはれければ、「有識のふるまひ、やんごとなきことなり」と、かへすがへす感ぜさせ給ひけるとぞ。

第四十九段

老來りてはじめて道を行ぜんと待つことなかれ。ふるき塚、おほくはこれ少年の人なり。

はからざるに病をうけて、忽ちにこの世をさらんとする時にこそ、はじめて過ぎぬるかたのあやまれることは知らるるなれ。あやまりといふは他の

○ふるき塚――吉澤本「ふるき塚は」。

○知らるなれ――吉澤本「知らるれ」。

○むかしありける――吉澤本「むかしある」。

○往生をとげけり――吉澤本「往生をとげにけり」。

禪林の十因――禪林寺の永觀律師の著、「往生十因」一卷。

心戒――平宗盛の子宗親、平家滅亡後出家し、後女那にわたる。

○うづくまりてのみぞありけり――嵯峨

事にあらず、速かにすべきことをゆるくし、ゆるくすべきことを急ぎて、過ぎにしことのくやしきなり。その時悔ゆともかひあらんや。

人はたゞ、無常の身にせまりぬることを、心にひしとかけて、つかのまも忘るまじきなり。さらば、などかこの世の濁りもうすく、佛道をつとむる心もまめやかならざらん。

むかしありけるひじりは、人來りて自他の要事をいふ時、答へていはく、「今、火急の事ありて、すでに朝夕にせまれり」とて、耳をふたぎて、念佛して、終に往生をとげけりと、禪林の十因に侍り。心戒といひける聖は、あまりにこの世のかりそめなることを思ひて、しづかについゐけることだになく、つねはうづくまりてのみぞありけり。

第五十段

應長のころ、伊勢國より、女の鬼になりたるをゐてのぼりたりといふ事ありて、その頃廿日ばかり、日ごとに京白川の人、鬼みにとていでまどふ。

本その他の諸本「ありけり」は「ありける」とある。
應長――花園天皇の年號。
50 白川――鴨川より東今の京都市左京區北白川、淨土寺のあたり迄をいふ。
西園寺――太政大臣實兼、又は西園寺左大臣公衡か。ともに當時勢盛であつた家である。
院――その頃後宇多、伏見、後伏見の三上皇がおはしたので、その何れを指し奉るか不明。
○見たりといふ人もなし――嵯峨本はじめ諸本「見たりといふ人もなく、そらごとといふ人もなし」。
東山――京都の東にある一帶の丘陵地をいふ。
安居院――洛北壺岩郡にあつた。叡山の東坊竹林院の里坊であつたが、後すたれた。
一條室町――一條通室町。
今出川――一條東洞院あたりを北から南に流れてゐた川。
院の御棧敷――一條大路にあつた。院が加茂祭を御覽になるためにたてられた御棧敷である。
51 龜山殿――洛西嵯峨龜山の麓にあつた。龜山上皇御隱居の山莊。
大井川――大堰川、桂川の上流で、源を丹波に發してゐる。宇治郡宇治、水車の名所

「昨日は西園寺にまゐりたりし、今日は院へまゐるべし、たゞ今はそこそこに」などいひあへり。まさしく見たりといふ人もなし。上下ただ鬼の事のみいひやまず。その頃、東山より安居院邊へまかり侍りしに、四條よりかみざまの人、皆北をさしてはしる。「一條室町に鬼あり」とのゝしりあへり。今出川の邊より見やれば、院の御棧敷のあたり、更にとほり得べうもあらず、たちこみたり。はやく跡なき事にはあらざめりとて、人をやりて見するに、おほかたあへる者なし。暮るるまでかく立ちさわぎて、はては鬪諍おこりて、あさましき事どもありけり。そのころおしなべて、二日三日人のわづらふ事侍りしをぞ、かの鬼の虛言は、このしるしをしめすなりけりといふ人も侍りし。

第五十一段

龜山殿の御池に、大井川の水をまかせられんとて、大井の土民におほせて、水車をつくらせられけり。多くの錢を給ひて、數日にいとなみ出して

かけたりけるに、大かためぐらざりければ、とかくなほしけれども、つひにまはらで、いたつらに立てりけり。さて、宇治の里人をめしてこしらへさせられければ、やすらかにゆひてまゐらせたりけるが、思ふやうにめぐりて、水をくみ入るゝ事めでたかりけり。よろづにその道をしれるものはやんごとなきものなり。

第五十二段

仁和寺にある法師、年よるまで石淸水をがまざりければ、心うく覺えて、ある時思ひたちて、たゞひとりかちよりまうでけり。極樂寺、高良などをがみて、かばかりと心得てかへりにけり。さてかたへの人にあひて、「年比思ひつることはたし侍りぬ。聞きしにも過ぎて、たふとくこそおはしけれ。そも參りたる人ごとに、山へのぼりしは何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へまゐるこそほいなれと思ひて、山までは見ず」とぞいひける。すこしの事にも、先達はあらまほしきことなり。

である。
52 仁和寺――京都市右京區御室、古義眞言宗の名刹である。
石清水――男山八幡宮、京都府綴喜郡八幡町にある。
○思ひたちて――吉澤本「思ひいでて」。
極樂寺――石清水八幡宮の境内にあつた末寺。男山の麓にある。
高良――男山の麓。高良明神。
○高良などをがみて――吉澤本「高良などをみて」。
53 ○たへがたかりければ――吉澤本「たへがたければ」。
○ゐて行きける――吉澤本「ゐて行きけり」、尙一本には「ゐて行きけるに」とある。

第五十三段

これも仁和寺の法師、童の法師にならんとする名殘とて、おのおのあそぶことありけるに、醉ひて興に入るあまり、かたはらなる足鼎をとりて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顏をさし入れて舞ひ出でたるに、滿座興に入ることかぎりなし。しばしかなでゝ後、ぬかんとするに大方ぬかれず。酒宴ことさめて、いかがはせんとまどひけり。とかくすれば、頸のまはりかけて、血たり、ただ腫れに腫れみちて、息もつまりければ、うちわらんとすれど、たやすくわれず、ひゞきてたへがたかりければ、かなはで、すべきやうなくて、三足なる角の上に、帷子をうちかけて、手をひき、杖をつかせて、京なる醫師のがり、ゐて行きける。道すがら人のあやしみることかぎりなし。醫師のもとにさし入りてむかひゐたりけんありさま、さこそ異樣なりけめ。物をいふも、くぐもり聲にひゞきて聞えず。「かゝる事は文にも見えず、傳へたる敎もなし」といへば、又仁和寺へかへりて、親しき者、老いたる母など、枕上によりゐて、泣きかなしめども、聞くらんともおぼえず。かゝるほどに、ある者の云ふやうは、「たとひ耳鼻こそきれ失すとも、命ばかりはなどか生きざらん。たゞ力をたてて引き給へ」とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねをへだてて頸もちぎるばかりひきたるに、耳鼻はかけうげながら、ぬけにけり。からき命まうけて久しく病みゐたりけり。

○老いたる母など――吉澤本「老いたる母と」。
○ある者の云ふやうは――嵯峨本その他諸本「は」の字なし。
○耳鼻は――嵯峨本その他諸本「は」の字なし。
54 御室――仁和寺のことである。
雙の岡――御室の南。
御所――仁和寺のこと。
○うれしく思ひて――

第五十四段

御室にいみじき兒のありけるを、いかでさそひ出して遊ばんとたくむ法師どもありて、能あるあそび法師どもなどかたらひて、風流のわりごやうのもの、ねんごろにいとなみ出でて、箱風情の物にしたゝめ入れて、雙の岡のたよりよき所にうづみおきて、紅葉ちらしかけなど、おもひよらぬさまにして、御所へ參りて、兒をそゝのかしいでにけり。うれしく思ひて、こゝかしこあそびめぐりて、ありつる苔のむしろに並みゐて、「いたうこそ

こうじにたれ。あはれ、紅葉をたかん人もがな。しるしあらん僧達祈りこころみられよ」などいひしろひて、うづみつる木のもとにむきて、數珠おしすり、印ことごとしくむすび出でなどして、いらなくふるまひて、木の葉をかきのけたれど、つやつや物も見えず。所のたがひたるにやとて、ほらぬ處もなく山をあされどもなかりけり。うづみけるを、人の見おきて、御所へ參りたる間にぬすめるなりけり。法師ども言葉なくて、聞きにくゝいさかひ、腹立ちてかへりにけり。あまりに興あらんとすることは、必ずあいなきものなり。

第五十五段

家の造りやうは夏をむねとすべし。冬はいかなる所にも住まる。あつき頃、わるき住居はたへがたきことなり。ふかき水は涼しげなし。淺くてながれたる、はるかに涼し。こまかなる物をみるに、遣戸は蔀の間よりも明かし。天井の高きは、冬さむく、燈くらし。「造作は用なき所をつくりた

—嵯峨本その他諸本「うれしと思ひて」。

○印ことごとしく—吉澤本「印こちたしく」。

○55 涼しげなし——吉澤本「すずしきけなし」

る、見るもおもしろく、よろづの用にもたちてよし」とぞ、人の定めあひ侍りし。

第五十六段

久しくへだゝりて逢ひたる人の、わが方にありつる事、かずかずにのこりなく、語りつづくるこそあいなけれ。へだてなくなれぬる人も、程へて見るはばづかしからぬかは。

次ざまの人は、あからさまにたち出でても、今日ありつる事とて、息もつきあへず、語り興ずるぞかし。よき人の物がたりするは、人あまたあれど、ひとりに向きていふを、おのづから人も聞くにこそあれ。よからぬひとは、誰ともなく、あまたのなかにうち出でて、見る事のやうに語りなせば、皆おなじくわらひのののしる、いとらうがはし。

をかしき事をいひてもいたく興ぜぬと、興なき事をいひてもよくわらふにぞ、品のほどはかられぬべき。

○[53]ざえある人は——吉澤本「ざえある人たば」。

○[58]といふは——吉澤本「といふも」。

○いさましからん——吉澤本「いまさらあらん」。

人のみざまのよしあし、ざえある人は、その事など定めあへるに、おのが身をひきかけていひ出でたる、いとわびし。

第五十七段

人のかたり出でたる歌物語の、歌のわろきこそほいたけれ。少しその道知らん人は、いみじと思ひてはかたらじ。すべて、いとも知らぬ道の物語したる、かたはらいたく、聞きにくし。

第五十八段

「道心あらばすむ所にしもよらじ。家にあり、人にまじはるとも、後世をねがはんにかたかるべきかは」といふは、さらに後世しらぬ人なり。

げにはこの世をはかなみ、必ず生死をいでんと思はんに、何の興ありてか、朝夕君につかへ、家をかへりみるいとなみのいさましからん。心は緣にひかれてうつるものなれば、しづかならでは道は行じがたし。

○その心はやく——吉澤本「その心はや」。

○ちかづく事——吉澤本「事」の字なし。

そのうつはもの、むかしの人に反ぼず、山林に入りても、餓をたすけ、嵐をふせぐよすがなくてはあられぬわざなれば、おのづから世をむさぼるに似たることも、たよりに觸れば、などかなからん。さればとて、「そむけるかひなし。さばかりならばなじかは捨てし」など云はんは、無下のことなり。さすがに一度道に入りて世をいとはん人、たとひ望ありとも、いきほひある人の貪欲おほきに似るべからず。紙のふすま、麻の衣、一鉢のまうけ、あかざの羹、いくばくか人のつひえをなさん。もとむる所はやすく、その心はやく足りぬべし。

かたちに恥づるところもあれば、さはいへど、惡にはうとく、善にはちかづく事のみぞおほき。人と生れたらんしるしには、いかにもして世をのがれんことこそあらまほしけれ。ひとへにむさぼる事をつとめて、菩提におもむかざらんは、よろづの畜類にかはる所あるまじくや。

第五十九段

大事を思ひたゝん人は、さりがたく、心にかからん事のほいをとげずして、さながら捨つべきなり。

しばしこのことはてて』『同じくはかの事沙汰しおきて』『しかじかの事、人の嘲やあらん。行末難なくしたゝめまうけて』『年ごろもあればこそあれ、その事またん程あらじ、物さわがしからぬやうに』など思はんには、えさらぬ事のみいとゞかさなりて、事のつくるかぎりもなく、思ひたつ日もあるべからず。

おほやう、人を見るに、少し心あるきはは、皆このあらましにてぞ一期は過ぐめる。

ちかき火などににぐる人は、しばしとやいふ。身をたすけんとすれば、恥をもかへりみず、財をもすててのがれさるぞかし。命は人を待つものかは。無常の來ることは、水火のせむるよりもすみやかに、のがれがたきものを、その時、老いたる親、いときなき子、君の恩、人のなさけ、捨てがたしとて捨てざらんや。

(6) 眞乘院——仁和寺の末寺。盛親僧都——傳不明。

第六十段

眞乘院に、盛親僧都とてやんごとなき智者ありけり。いもがしらといふものを好みて、おほくくひけり。談義の座にても、おほきなる鉢にうづだかくもりて、膝のもとに置きつつ、くひながら文をもよみけり。わづらふことあるには、七日二七日など、療治とてこもりゐて、思ふやうに、よきいもがしらを選びて、殊におほく食ひて、よろづの病をいやしけり。人にくはすることなし、ただひとりのみぞくひける。きはめて貧しかりけるに、師匠死にざまに、錢二百貫と、坊ひとつをゆづりたりけるを、坊を百貫にうりて、かれこれ三萬疋をいもがしらのあしとさだめて、京なる人にあづけおきて、十貫づつ取りよせて、いもがしらをともしからずめしけるほどに、又異用にもちふることなくて、そのあし皆になりにけり。「三百貫の物を、まづしき身にまうけて、かくはからひける、誠にありがたき道心者なり」とぞ人申しける。この僧都、ある法師を見て、しろうるりといふ名をつ

○つけたりけり——吉澤本「つけけり」。

○つい立ちてゆきけれ——嵯峨本その他諸本に「ついたちてゆきけり。」とある。

○德のいたれりけるにや——吉澤本「德のいたりけるにや」。

けたりけり。「とは何物ぞ」と人の問ひければ、「さる物を我もしらず。若しあらましかば、この僧の顏に似てん」とぞいひける。この僧都、みめよく、力つよく、大食にて、能書、學匠、辯說、人にすぐれて、宗の法燈なれば、寺中にもおもく思はれたりけれども、世をかろくおもひたるくせ者にて、よろづ自由にして、おほかた人にしたがふといふことなし。出仕して饗膳などにつく時も、みな人の前すゑわたすをまたず、わが前にすゑぬれば、やがてひとりうち食ひて、歸りたければ、ひとりつい立ちて行きけれ。時・非時も人にひとしく定めてくはず、わがくひたき時、夜なかにも曉にもくひて、ねぶたければ、晝もかけこもりて、いかなる大事あれども、人のいふこと聞き入れず。目さめぬれば、幾夜もいねず、心をすましてうそぶきありきなど、尋常ならぬさまなれども、人にいとはれず、よろづゆるされけり。德のいたれりけるにや。

第六十一段

[61] 大原の里——京都の北郊、愛宕郡。

[62] 延政門院——後嵯峨上皇の皇女、悅子內親王。

院——後嵯峨院の御所。

○人にことづてとて——嵯峨本、吉澤本「人に御ことづてとて」。

[63] 後七日——後七日の御修法、正月八日から十四日迄七日間、宮中眞言院で行はれ

御產のとき、甑おとすことは、さだまれることにはあらず。御胞衣とどこほるときのまじなひなり。とどこほらせたまはねば、この事なし。下ざまよりことおこりて、させる本說なし。大原の里のこしきをめすなり。ふるき寶藏の繪に、いやしき人の子うみたる所に、甑おとしたるを書きたり。

第六十二段

延政門院、いときなくおはしましける時、院へまゐる人にことづてとて申させ給ひける御歌、

ふたつもじ牛の角もじすぐなもじゆがみもじとぞ君はおぼゆる

こひしく思ひまゐらせ給ふとなり。

第六十三段

後七日の阿闍梨、武者をあつむること、いつとかや、盜人にあひにけるより、とのゐ人とてかくことごとしくなりにけり。一年の相は、この修中

る御修法。

[35] ○なりたるなりとぞある人仰せられし――嵯峨本、吉澤本「とぞある人仰せられし」の十字なし。

○今用ふるなり――吉澤本「今は用ふるなり」。

[36] 岡本關白殿――關白従一位左大臣藤原家平。岡本は家號である。

のありさまにこそ見ゆなれば、兵を用ひんこと、おだやかならぬことなり。

第六十四段

車の五緤は、必ず人によらず、ほどにつけて、きはむるつかさ位にいたりぬれば、乘るものなりとぞ、ある人仰せられし。

第六十五段

このごろの冠は、むかしよりは遙かにたかくなりたるなりとぞ、ある人仰せられし。古代の冠桶をもちたる人は、はたをつぎて今用ふるなり。

第六十六段

岡本關白殿、さかりなる紅梅の枝に、鳥一雙をそへて、この枝につけてまゐらすべき由、御鷹飼、下毛野の武勝におほせられたりけるに、「花に鳥

下毛野武勝――傳記不明。

○おほせられたりければ――吉澤本「おほせられければ」。

○つくる枝、踏まする枝――吉澤本「ふまする枝、つくる枝」。

○あまおひ――嵯峨本その他諸本「あまおほひ」。

つくるすべ、知りさぶらはず。一枝にふたつつくることも存じ候はず」と申しければ、膳部に尋ねられ、人々にとはせたまひて、また武勝に、「さらばおのれが思はんやうに、つけてまゐらせよ」と。おほせられたりければ、花もなき梅の枝に、ひとつをつけてまゐらせけり。武勝が申し侍りしは、「柴の枝、梅の枝、つぼみたると、ちりたるとにつく。五葉などにもつく。枝のながさ七尺、或は六尺、返し刀五分に切る。枝の半に鳥をつく。つくる枝、踏まする枝ありし。しゞら藤の割らぬにて、二ところ付くべし。藤のさきは、火うち豕のたけにくらべてきりて、牛の角のやうにたわむべし。初雪のあした、枝を肩にかけて、中門よりふるまひて參る。大みぎりの石をつたひて、雪に跡をつけず、雨おほひの毛をすこしかなぐりちらして、二棟の御所の高欄によせかく。祿をいださるれば、肩にかけて拜してしりぞく。初雪といへども、沓のはなのかくれぬほどの雪にはまゐらず。あまおひの毛を散らすことは、鷹はよわ腰をとることなれば、御鷹のとりたるよしなるべし」と申しき。花に鳥つけずとは、いかなる故にかありけ

伊勢物語――平安初期の歌物語。

37 加茂の岩本、橋本――共に洛北上加茂神社の末社。向つて右が岩本で業平を祭り左が橋本で實方を祭る。

業平――在五中將業平。阿保親王の御子で、有名な歌で人ある。

實方――右近中將藤原實方。これも歌を以て有名である。

○侍れば橋本やなほ水の――吉澤本「侍れど橋本も、なほ水の」とある。

吉水和尚――慈鎭和尚。法性寺開白忠通の　で、洛東東山吉水に住した。有名な歌人である。

○岩本の社とこそ――吉澤本「岩本の社とぞ」。

今出川の院近衛――今出川院は龜山天皇の中宮嬉子。近衛は中宮に仕へた女官で大納言伊平の女。歌人で續古今以後勅撰集に多く入歌してゐる。

○手向けられける――嵯峨本以下諸本には「手向けられけり」となつてゐる。

○まことに――吉澤本「に」の字なし。

筑紫――九州の總稱。

○いふやうなる者――

ん。長月ばかりに、梅のつくり枝に雉をつけて、「君がためにと折る花は、時しもわかぬ」といへること、伊勢物語に見えたり。つくり花は苦しからぬにや。

第六十七段

加茂の岩本、橋本は、業平、實方なり。人の常にいひまがへ侍れば、一年參りたりしに、老いたる宮司の過ぎしをよびとどめて尋ね侍りしに、「實方は御手洗に影のうつりける所と侍れば、橋本やなほ水のちかければとおぼえ侍る。吉水和尚、

月をめで花をながめしいにしへのやさしき人はこゝに在原

とよみ給ひけるは、岩本の社とこそうけたまはりおき侍れど、おのれらよりは、中々御存知などもこそさぶらはめ」と、いとうやうやしくいひたりしこそ、いみじくおぼえしか。今出川の院近衛とて、集どもにあまた入りたる人は、わかゝりける時、常に百首のうたをよみて、かの二つの社の御

前の水にて書きて、手向けられける。まことにやんごとなき譽ありて、人の口にある歌おほし。作文、詩序などいみじく書く人なり。

第六十八段

筑紫に、なにがしの押領使などいふやうなる者ありけるが、土おほねをよろづにいみじき藥とて、朝ごとに二つづつやきて食ひけること、年久しくなりぬ。ある時、館の内に人もなかりける隙をはかりて、敵おそひ來りて、かこみせめけるに、館の内につはもの二人いできて、命を惜しまず戰ひて、皆追ひかへしてけり。いと不思議に覺えて、「日頃こゝにものし給ふとも見ぬ人々の、たゝかひし給ふは、いかなる人ぞ」と問ひければ、「年來たのみて、朝な朝なめしつる、土おほねらにさぶらふ」といひてうせにけり。ふかく信をいたしぬれば、かゝる德もありけるにこそ。

第六十九段

書寫の上人は、法華讀誦の功つもりて、六根淨にかなへる人なりけり。旅のかりやにたちいられけるに、豆のからをたきて、豆を煮ける音の、つぶつぶとなるを聞き給ひければ、「疎からぬおのれらしも、うらめしくわれをば煮て、からきめをみするものかな」と云ひけり。たかるゝ豆がらのはらはらとなる音は、「わが心よりすることかは。燒かるゝは、いかばかり堪へがたけれども力なき事なり。かくな恨み給ひそ」とぞ聞えける。

第七十段

元應の淸暑堂の御遊に、玄上はうせにしころ、菊亭のおとど、牧馬を彈じ給ひけるに、座につきて、まづ柱をさぐられたりければ、ひとつおちにけり。御ふところに、續飯を持ち給ひたるにて、つけられにければ、神供のまゐるほどによく乾て、ことゆゑなかりけり。いかなる意趣かありけん、もの見けるきぬかづきの寄りて、はなちて、もとのやうにおきたりけ

—嵯峨本その他諸本「いふやうなる者の」。
○たゝかひし給ふ—嵯峨本その他諸本「かくたたかひし給ふ」。
書寫の上人——性空上人のこと。播磨國書寫山圓敎寺の開祖である。寛弘四年八十歳で入寂した。
六根淨——六根淸淨の略。六根は第九段「六塵」參照。
○聞き給ひければ—吉澤本「給ひ」の二字なし。
○たかるゝ豆がらの——吉澤本「たく豆のからの」。
○わが心よりすることかは——吉澤本「は」の字なし。
○かくな恨み給ひそ——吉澤本「かくな

恨み給ふ」。
70元應——後醍醐帝最初の年號。
淸暑堂の御遊——淸暑堂は宮中豐樂院の後房。大嘗會のときこゝで神樂があり、終つて群臣に宴を賜ひ催馬樂の御遊がある。
玄上——宮中の寶物の一つである琵琶。藤原卓敏が支那から傳へたものだといふ。
菊亭のおとど——藤原兼季。菊を愛し家に多くの菊を植ゑたので菊亭右大臣といふ。
牧馬——玄上と並稱された宮中寶物の琵琶の名器。
○さぐられたりければ——吉澤本「さぐられければ」。
○持ち給ひたるにて——吉澤本「持ち給

るとぞ。

第七十一段

名を聞くより、やがて面影はおしはからるるここちするを、見る時はまた、かねて思ひつるまゝの顏したる人こそなけれ。昔物語をきゝても、このごろの人の家の、そこほどにてぞありけんと覺え、人も、今見る人のなかに思ひよそへらるるは、誰もかくおぼゆるにや。又いかなる折ぞ、たゞいま人のいふ事も、目に見ゆるものも、わが心のうちも、かゝる事のいつぞやありしかと覺えて、いつとは思ひいでねども、まさしくありし心地のするは、我ばかりかく思ふにや。

第七十二段

いやしげなるもの。居たるあたりに調度のおほき、硯に筆のおほき、持佛堂に佛のおほき、前栽に石草木の多き、家の內に子孫のおほき、人にあ

ひて言葉のおほき、願文に作善おほく書きのせたる。多くて見ぐるしからぬは、文庫の文、塵塚のちり。

第七十三段

世にかたりつたふる事、まことはあいなきにや、おほくは皆そらごとなり。

あるにも過ぎて人は物をいひなすに、まして年月過ぎ、さかひもへだたりぬれば、云ひたきまゝに語りなして、筆にも書きとどめぬれば、やがて定りぬ。

道々の物の上手のいみじき事など、かたくななる人の、その道知らぬは、そゞろに神のごとくにいへども、道知れる人は、更に信もおこさず。おとにきくと見る時とは何事もかはるものなり。

かつあらはるゝをもかへりみず、口にまかせていひちらすは、やがてうきたることと聞ゆ。又われもまことしからずは思ひながら、人の云ひしま

「へるにて」。
○思ひよそへらるるは——吉澤本「思ひよそへらるる」。
○いつぞやありしか——吉澤本「いつぞやありしは」。
○文庫の文、塵塚のちり——吉澤本「塵つかのちり文匣の文」。
73
○やがて定りぬ——嵯峨本「やがてまた定りぬ」。
○神のごとくに——吉澤本「に」の字なし。
○うきたることと——吉澤本「うきたることく」。

○よろづたがふべからず——吉澤本「よろづはたがふべからず」。
○信ぜざるべきにも——吉澤本「信ぜざるべきには」。
○あざけるべからず——吉澤本「あざけるべからずと也」。

まに、鼻のほどをごめきていふは、その人のそら言にはあらず。げにげにしく所々うちおぼめき、よく知らぬよしして、さりながら、つまづまはせて語るそら言は、おそろしきことなり。わがため面目あるやうにいはれぬる虚言は、人いたくあらがはず。

皆人の興ずるそら言は、ひとり「さもなかりしものを」といはんも詮なくて、聞きゐたるほどに、證人にさへなされて、いとゞさだまりぬべし。とにもかくにも、虚言おほき世なり。たゞ常にある、めづらしからぬ事のまに心得たらん、よろづたがふべからず。

下ざまの人の物語は、耳おどろくことのみあり。よき人はあやしき事をかたらず。

かくはいへど、佛神の奇特、權者の傳記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。これは世俗の虚言を、ねんごろに信じたるもをこがましく、「よもあらじ」などいふもせんなければ、大かたはまことしくあひしらひて、ひとへに信ぜず、又うたがひあざけるべからず。

74 ○南北にはしる――嵯峨本「南北にわしる」。吉澤本「南北にはしる人」。○何事ぞや――吉澤本「や」の字なし。

第七十四段

蟻のごとくにあつまりて、東西にいそぎ、南北にはしる。高きあり、いやしきあり、老いたるあり、わかきあり、行くところあり、歸る家あり。ゆふべにいねて朝に起く。いとなむ所何事ぞや、生をむさぼり利をもとめてやむ時なし。

身をやしなひて何事をかまつ。期する所、たゞ老と死とにあり。その來ることすみやかにして、念々の間にとゞまらず。これを待つ間、何の樂かあらん。

まどへるものはこれをおそれず。名利におぼれて、先途のちかき事をかへりみねばなり。愚なる人は、またこれをかなしぶ。常住ならんことを思ひて、變化の理をしらねばなり。

第七十五段

75 摩訶止觀――隋の天台智者大師の口述を弟子の章安が筆錄、編した書。十卷、天台三大部の一である。

つれづれわぶる人は、いかなる心ならん。まぎるゝかたなく、たゞひとりあるのみこそよけれ。

世にしたがへば、心、外の塵にうばはれてまどひやすく、人にまじはれば、言葉、よその聞にしたがひて、さながら心にあらず。人にたはぶれ、物にあらそひ、一度はうらみ、一度はよろこぶ。そのことさだまれる事なし。分別みだりにおこりて、得失やむ時なし。まどひの上に醉へり、醉のうちに夢をなす。はしりていそがはしく、ほれてわすれたる事、人皆かくのごとし。

いまだまことの道をしらずとも、緣をはなれて身を閑にし、事にあづからずして心をやすくせんこそ、しばらくたのしむともいひつべけれ。「生活、人事、伎能、學問等の諸緣をやめよ」とこそ、摩訶止觀にも侍れ。

第七十六段

世のおぼえはなやかなるあたりに、なげきもよろこびもありて　人おほ

78 ○いまさらの人なンど——吉澤本「いまさらの」の五字なし。

く行きとぶらふ中に、聖法師のまじりて、いひ入れ、たたずみたるこそ、さらずともと見ゆれ。さるべきゆゑありども、法師は人にうとくてありなん。

第七十七段

世の中に、その頃人のもてあつかひぐさにいひあへる事、いろふべきにはあらぬ人の、よく案内しりて、人にもかたり聞かせ、問ひ聞きたるこそうけられね。殊にかたほとりなるひじり法師などぞ、世の人の上はわがごとく尋ね聞き、いかでかばかりは知りけんと覺ゆるまでぞいひちらすめる。

第七十八段

今やうの事どものめづらしきを、いひひろめもてなすこそ、又うけられね。世にことふりたるまで知らぬ人は心にくし。いまさらの人などのある

79 ○しり顔にやはいふ——吉澤本「したり顔にやいふ」。○かた田舍より出でたる——嵯峨本、吉澤本その他諸本「かた田舍よりさし出でたる」。○こゝもとにいひつけたる——吉澤本「こゝもとにいまさらにいひつけたる」。

時、こゝもとにいひつけたることぐさ、物の名など、心得たるどち、かたはしいひかはし、目見あはせ、笑ひなどして、心しらぬ人に、心得ずおもはすること、世なれず、よからぬ人のかならずあることなり。

第七十九段

何事も入りたゝぬさましたるぞよき。よき人は、知りたる事とて、さのみしり顔にやはいふ。かた田舍より出でたる人こそ、よろづの道に心得たるよしのさしいらへはすれ。されば、世にはづかしきかたもあれど、みづからもいみじと思へるけしき、かたくなり。よくわきまへたる道には、必ず口おもく、問はぬかぎりはいはぬこそいみじけれ。

第八十段

人ごとに、わが身にうとき事をのみぞこのめる。法師は兵の道をたて、夷は弓ひくすべ知らず、佛法しりたる氣色し、

8) ○おのれが道より――嵯峨本、吉澤本その他諸本「おのれが道よりは」。
○法師のみにかぎらず――吉澤本、嵯峨本「法師のみにもあらず」。
上達部――位三位、參議以上のもの。
殿上人――清涼殿に昇るのを許された人。四位、五位の人及び六位の藏人。

連歌し、管絃をたしなみあへり。されど愚なるおのれが道より、なほ人に思ひ侮られぬべし。法師のみにかぎらず、上達部、殿上人、かみざまで、おしなべて武をこのむ人おほかり。

百度戰ひて百度勝つとも、いまだ武勇の名を定めがたし。その故は、運に乘じて仇をくだく時、勇者にあらずと云ふ人なし。兵つき、矢きはまりて、つひに敵にくだらず、死をやすくして後、はじめて名をあらはすべき道なり。生けらん程は、武にほこるべからず。

人倫に遠く、禽獸にちかきふるまひ、その家にあらずば、好みて益なきことなり。

第八十一段

屏風、障子などの繪も文字も、かたくななる筆やうして書きたるが見にくきよりも、宿のあるじのつたなくおぼゆるなり。大方、持てる調度にても、心おとりせらるゝ事はありぬべし。さのみよき物をもつべしとにもあ

81 ○しななく見にくき――吉澤本「しなたくみ、にくき」。

82 頓阿――兼好と同時代の僧。慶雲、淨辨、兼好と共に和歌四天王と稱せられた。井蛙抄、草庵集の著者。
○一部とある草子――吉澤本「一部もある草子、卷物」。
弘融僧都――兼好と同時代の歌人。權少僧都、伊賀の國佛性寺遍照庵に住した。

らず。損ぜざらんためとて、しななく、見にくきさまにしなし、めづらしからんとて、用なき事どもしそへ、わづらはしくこのみなせるをいふなり。古めかしきやうにて、いたくことごとしからず、費もなくて、物がらのよきがよきなり。

第八十二段

「うすものゝ表紙は、とく損ずるがわびしき」と人のいひしに、頓阿が、「羅はかみしもはづれ、螺鈿の軸は貝おちて後こそいみじけれ」と申し侍りしこそ、心まさりておぼえしか。一部とある草子などの、同じやうにもあらぬを見にくしといへど、弘融僧都が、「物をかならず一具にととのへんとするは、つたなき者のすることなり。不具なるこそよけれ」といひしも、いみじくおぼえしなり。すべて何も皆、事のととのほりたるはあしき事なり。しのこしたるをさてうち置きたるは、おもしろく、生きのぶるわざなり。「内裏つくらるゝにも、必ず作りはてぬ所を殘すことなり」と、ある人

○ことのみぞ侍る――嵯峨本その他諸本「ことのみこそ侍れ」。

83 竹林院入道左大臣――西園寺公衡。竹林院左府と號した。正和四年薨ず。一の上――左大臣の異稱。洞院左大臣――左大臣藤原實泰、嘉歴二年薨ず。

○物盛にして――嵯峨本その他諸本「物さかりにしては」。

84 法顯三藏――晉の高僧、經律を求むるため印度に留學すること六年、多くの佛書類を持ちかへつた。

申し侍りしなり。先賢のつくれる內外の文にも、章段のかけたることのみぞ侍る。

第八十三段

竹林院入道左大臣殿、太政大臣にあがり給はんに、何のとどこほりかおばせんなれども、「めづらしげなし、一の上にてやみなん」とて出家したまひにけり。洞院左大臣殿、この事を甘心し給ひて、相國の望おはせざりけり。

亢龍の悔ありとかやいふこと侍るなり。月みちてはかけ、物盛にしておとろふ。萬のこと、さきのつまりたるはやぶれにちかき道なり。

第八十四段

法顯三藏の天竺にわたりて、故鄕の扇を見てはかなしみ、疾にふしては漢の食をねがひ給へる事をききて、「さばかりの人の、無下にこそ、心よわ

三藏は經、律、論の三つを藏めた人をいふ。

天竺――印度。

○ねがひ給へる事をききて――宇澤本「ねがひ給ひけゝ事をききて」。

○人のいひしに――吉澤本「人のいひたりしに」。

弘融僧都――第八十二段の註參照。

85 ○されど――嵯峨本、吉澤本その他諸本「されども」。

○おのれが心に――吉澤本「おれが心に」。

○かりにも愚を――嵯峨本「かりにも賢を」。

きけしきを、ひとの國にて見え給ひけれ」と、人のいひしに、弘融僧都、「優に情ありける三藏かな」といひたりしこそ、法師のやうにもあらず、心にくゝおぼえしか。

第八十五段

人のこゝろすなほならねば、僞なきにしもあらず。されど、おのづから正直の人などかなからん。おのれすなほならねど、人の賢を見てうらやむは世のつねなり。

いたりて愚なる人は、たまたま賢なる人を見てこれをにくむ。「おほきなる利を得んがために、少しきの利をうけず、僞りかざりて名をたてんとす」とそしる。おのれが心にたがへるによりて、この嘲をなすにてしりぬ。この人は下愚の性、うつるべからず、僞りて小利をも辭すべからず。

かりにも愚を學ぶべからず。狂人のまねとて大路をはしらば則ち狂人なり。惡人の眞似とて人をころさば惡人なり。驥をまなぶは驥のたぐひ、舜

86 惟繼中納言――平氏元德二年權中納言、建武二年文章博士、暦應五年出家した。葉集以下の歌人である。
圓伊僧正――大納言藤原伊平の孫。歌人玉あり、また書をよくした。
文保――花園天皇の年號、三井寺燃上は同元年四月。
87 ○宇治に住みける男――嵯峨本、吉澤本「宇治に住み侍りける男」。
具覺坊――傳不明。
○かひがひしければ――吉澤本「かひがひしげなれば」。

を學ぶは舜の徒なり。いつはりても賢をまなばんを賢といふべし。

第八十六段

惟繼中納言は、風月の才にとめる人なり。一生精進にて、讀經うちして、寺法師の圓伊僧正と同宿して侍りけるに、文保に、三井寺やかれし時、坊主にあひて、「御坊をば寺法師とこそ申しつれど、寺はなければ、今よりは法師とこそ申さめ」といはれけり。いみじき秀句なりけり。

第八十七段

下部に酒のまする事は心すべきことなり。宇治に住みける男、京に、具覺坊とて、なまめきたる遁世の僧を、小舅なりければ、常に申しむつびけり。ある時、迎に馬をつかはしたりければ、はるかなる程なり、口つきの男に、「まづ一度せさせよ」とて、酒を出したれば、さしうけさしうけよよとのみぬ。大刀うちはきて、かひがひしければ、たのもしく覺えて、召

木幡――京都府宇治郡。宇治の西北。
○たちむかひて――吉澤本「たち」の二字なし。
○日暮にたる――吉澤本「日暮ににたる」。
○はしり入りたり。あさましくて――吉澤本「はしり入りたるに」。
くちなし原――固有名詞ではない。山梔の多い原である。木

し具してゆく程に、木幡のほどにて、奈良法師の兵士あまた具して逢ひたるに、この男たちむかひて、「日暮れにたる山中に、あやしきぞ、とまり候へ」といひて、太刀をひきぬきければ、人も皆太刀ぬき、矢はげなどしけるを、具覺坊手をすりて、「うつし心なく醉ひたる者に候。まげてゆるし給はらん」といひければ、おのおのあざけりて過ぎぬ。この男、具覺坊にあひて、「御坊はくちをしき事したまひつるものかな。おのれ醉ひたることと侍らず。高名つかまつらんとするを、ぬける太刀むなしくなし給ひつることと」と怒りて、ひたぎりにきりおとしつ。さて「山賊あり」とののしりければ、里人おこりて出であへば、「われこそ山だちよ」といひて、はしりかゝりつゝ、斬りまはりけるを、あまたして手おはせ、うちふせてしばりけり。馬は血つきて、宇治大路の家にはしり入りたり。あさましくて、男どもあまた走らかしたれば、具覺坊は、くちなし原によひふしたるを、もとめ出でて、かきもてきつ。からき命生きたれど、腰きり損ぜられて、かたはになりにけり。

幡邊に山梔の多かつた事は歌に見えてゐる。
○よひふしたる――嵯峨本「によびふしたる」。
○小野道風の――吉澤本「小野」なし。
小野道風――書道の名人で、三蹟の一人である。康和三年、七十一歳で卒した。
和漢朗詠集――和漢の詩及び和歌の朗詠されてゐたものを輯めた書。
四條大納言――藤原公任、四條に家があつた。詩歌管弦などすぐれてゐて、三船の名がある。
○あなるものを――吉澤本「あるものを」。
何阿彌陀佛――阿彌陀佛を下につける名譬へば世阿彌陀佛、默阿彌陀佛など。こんな名をつけることが當時遲歌僧の間に流行した。
行願寺――一條革堂の寺號。京都一條の北、小川にあつた。今は寺町丸太町にある。
○思ひけるころしもある所――吉澤本「思ひけるころ、下なる所」。
小川――行願寺の近くにあつた小川。
○足のもとへ――嵯峨本、吉澤本その他諸本「の」の字なし。
○松どもともして――吉澤本「松どもいだして」。
○持ちたるも――嵯峨本、吉澤本その他諸本「もたりける

第八十八段

ある者、小野道風の書ける和漢朗詠集とて持ちたりけるを、ある人、「御相傳うける事には侍らじなれども、四條大納言撰ばれたる物を、道風書かんこと、時代やたがひ侍らん、おぼつかなくこそ」といひければ、「さ候へばこそ、世にありがたき物には侍りけれ」とていよいよ祕藏しけり。

第八十九段

「奥山に、猫またといふものありて、人をくらふなる」と、人のいひけるに、「山ならねども、これらにも猫のへあがりて、猫またになりて、人とることはあなるものを」といふ者ありけるを、何阿彌陀佛とかや、連歌しける法師の、行願寺のほとりにありけるが聞きて、ひとりありかん身は、心すべきことにこそと思ひけるころしも、ある所にて、夜更くるまで連歌して、ただひとり歸りけるに、小川のはたにて、音に聞きし猫また、あや

またず、足のもとへふとより來て、やがてかきつくまゝに、頸のほどをくはんとす。肝心もうせて、ふせがんとするに力もなく、足もたたず、小川へころび入りて、「たすけよや、猫また、よやよや」とさけべば、家々より松どもともして、走りよりて見れば、このわたりにしれる僧なり。「こはいかに」とて、川の中より抱きおこしたれば、連歌の賭とりて、扇、小箱などふところに持ちたるも、水に入りぬ。希有にしてたすかりたるさまにて、はふはふ家に入りにけり。かひげる犬の、暗けれどぬしを知りて、飛びつきたりけるとぞ。

第九十段

大納言法印のめしつかひし乙鶴丸、やすら殿といふ者を知りて、常に行きかよひしに、ある時出でて歸りきたるを、法印、「いづくへゆきつるぞ」と問ひしかば、「やすら殿のがり罷りて候」といふ。「そのやすら殿は男か法師か」と又問はれて、袖かきあはせて、「いかゞ候らん、頭をば見候はず」

と答へ申しき。などかかしらばかりの見えざりけん。

第九十一段

赤舌日といふこと、陰陽道には沙汰なきことなり。むかしの人これを忌まず。このころなにものゝいひ出でて、忌みはじめけるにか、この日ある事、末とほらずといひて、その日いひたりし事、したりし事かなはず、得たりし物はうしなひ、企てたりし事ならずといふ、愚なり。吉日を選びてなしたるわざの、すゑとほらぬを數へてみんも、又ひとしかるべし。その故は、無常變易のさかひ、ありと見るものも存せず、始ある事も終なし。志はとげず、望はたえず。人の心不定なり。物みな幻化なり。何事かしばらくも住する。この理をしらざるなり。吉日に惡をなすに必ず凶なり。惡日に善をおこなふに、必ず吉なりと云へり。吉凶は人によりて日によらず。

第九十二段

90 大納言法印――大納言、或はその子の法印となつたもの。誰であるかは不明である。

乙鶴丸――稚兒の名。

やすら殿――僚不明。

91 赤舌日――赤舌神の司るといふ惡日。この忌日は毎月五日づつある。

陰陽道――天文、曆數、風雲、氣色などを判ずる道である。

○うしなひ――嵯峨本、吉澤本「うしなひつ」。

○この理をしらざるなり――吉澤本「この理をしらざらん」。

ある人弓いる事をならふに、もろ矢をたばさみて的にむかふ。師のいはく、「初心の人、ふたつの矢をもつことなかれ。後の矢をたのみて、はじめの矢になほざりのこころあり。毎度たゞ得失なく、この一箭にさだむべしと思へ」といふ。わづかに二つの矢、師の前にてひとつをおろかにせんと思はんや。懈怠の心、みづから知らずといへども、師これをしる。このいましめ萬事にわたるべし。

道を學する人、ゆふべには朝あらんことをおもひ、あしたには夕あらんことを思ひて、かさねてねんごろに修せんことを期す。況んや一刹那のうちにおいて、懈怠の心あることを知らんや。なんぞたゞいまの一念において、たゞちにすることのはなはだ難き。

第九十三段

「牛を賣る者あり。買ふ人、明日その價をやりて牛をとらんといふ。夜の間に牛死にぬ。買はんとする人に利あり、賣らんとする人に損あり」と語

92 ○さだむべし――吉澤本「定まるべし」。

る人あり。

これを聞きて、かたへなる者のいはく、「牛の主、まことに損ありといへども、又大なる利あり。その故は、生あるもの死のちかきことを知らざる事、牛すでにしかなり。人また同じ。はからざるに牛は死し、はからざるにぬしは存せり。一日の命、萬金よりもおもし。牛のあたひ鵝毛よりも輕し。萬金を得て、一錢をうしなはん人、損ありといふべからず」といふに、皆人嘲りて、「その理は牛の主にかぎるべからず」といふ。

又いはく、「人、死をにくまば、生を愛すべし。存命のよろこび、日々にたのしまざらんや。おろかなる人、この樂を忘れて、いたづがはしく、外の樂を求め、この財をわすれて、あやうく、他の財をむさぼるには、こころざし滿つ事なし。いける間、生をたのしまずして、死に臨みて死をおそれば、この理あるべからず。人みな生をたのしまざるは、死を恐れざるゆゑなり。死をおそれざるにはあらず、死のちかきことを忘るるなり。もし又生死の相にあづからずといはゞ、實の理を得たりといふべし」といふに、人いよいよあざける。

93 ○又いはく、人死を——嵯峨本その他諸本「又いはく、されば人死を」。
○むさぼるには——吉澤本「は」の字なに。
○あづからずといはゞ——吉澤本「あづからずば」。

第九十四段

常盤井相國、出仕し給ひけるに、勅書をもちたる北面あひ奉りて、馬よりおりたりけるを、相國後に、「北面なにがしは、勅書を持ちながら、下馬し侍りし者なり。かほどの者、いかでか君につかうまつり候べき」と申されければ、北面をはなたれにけり。勅書を馬の上ながらさゝげて見せ奉るべし。下るべからずとぞ。

第九十五段

「箱のくりかたに、緒をつくること、いづかたにつけ侍るべきぞ」と、ある有職の人に尋ね申し侍りしかば、「軸につけ、表紙につくること、兩說なればいづれも難なし。文の箱は、おほくは右につく。手箱には、軸につくるも常のことなり」とおほせられき。

94 常盤井相國——太政大臣西園寺(藤原)實氏。京都京極常盤井第にゐた。文永六年薨ず。
北面——北面の武士の略。院の御所を守護する武官。

95 ○常のことなり——吉澤本「なり」の二字なし。

98 一言芳談――淨土宗の名僧の佳言を輯めたもの。編者不明。續群書類從八百四十に收められてゐる。
○おほやうせぬは――

第九十六段

めなもみといふ草あり。くちばみにさゝれたる人、かの草をもみてつけぬれば、すなはち癒ゆとなん。見しりておくべし。

第九十七段

その物につきて、その物を費しそこなふもの、數をしらずあり。身に虱あり、家に鼠あり、國に賊あり、小人に財あり、君子に仁義あり、僧に法あり。

第九十八段

たふとき聖のいひおきけることを書きつけて、一言芳談とかや名づけたる草紙を見侍りしに、心にあひておぼえしことども、

一　しやせまし、せずやあらましとおもふ事は、おほやうせぬはよきなり。

―嵯峨本「おほやうはせぬは」、吉澤本「おほやうせぬが」。
○もつまじきことなり――吉澤本「こと」の二字なし。
○世の事――嵯峨本「世の事を」、吉澤本「世中を」。

99 堀川相國――久我太政大臣源基具。岩倉内大臣具實の子である。

一　後世を思はん者は、糂汰瓶ひとつももつまじきことなり。持經、本尊にいたるまで、よきものをもつ、よしなきことなり。

一　遁世者は、なきに事かけぬやうをはからひて過ぐる、最上のやうにてあるなり。

一　上臈は下臈になり、智者は愚者になり、德人は貧になり、能ある人は無能になるべきなり。

一　佛道をねがふといふは別の事なし。いとまある身になりて、世の事心にかけぬを第一の道とす。

この外もありし事どもおぼえず。

第九十九段

堀川相國は、美男のたのしき人にて、そのこととなく、過差をこのみ給ひけり。御子基俊卿を大理になして、廳務をおこなはれけるに、廳屋の唐

○そのこととなく――吉澤本「そのことくなる」。
大理――檢非違使別當の唐名。
○廳務を――嵯峨本、吉澤本その他諸本「を」の字なし。

100 久我相國――從一位太政大臣源雅實。鳥羽、崇德兩帝の頃の人。又ずつと後の通光であらうとも云はれてゐる。
主殿司――主殿寮の官人。二十二段參照。
101 內辨――節會の奉行である。
內記――中務省の役人、詔勅宣命のことを司る。
○六位內記康綱――

櫃見ぐるしとて、めでたく作りあらためらるべきよし、仰せられけるに、この唐櫃は、上古よりつたはりて、そのはじめを知らず、數百年をへたり。累代の公物、古弊を以て規模とす。たやすくあらためられがたきよし、故實の諸官等申しければ、その事やみにけり。

第百段

久我相國は、殿上にて水をめしけるに、主殿司、土器をたてまつりければ、「まがりをまゐらせよ」とて、まがりしてぞめしける。

第百一段

ある人、任大臣の節會の內辨をつとめられけるに、內記のもちたる宣命をとらずして、堂上せられにけり。きはまりなき失禮なれども、たち歸りとるべきにもあらず。思ひわづらはれけるに、六位內記康綱、きぬかづきの女房をかたらひて、かの宣命をもたせて、忍びやかに奉らせけり。いみ

吉澤本「六位外記康綱」とある。
康綱――正六位上、權大外記中原康綱。外記なれば、太政官の主典である。
○奉らせけり――「奉らせける」と吉澤本にある。
102 ○尹大納言――吉澤本「平大納言」。
尹大納言光忠入道――源光忠、後出家して賢忠と號した。尹大納言は大納言にして彈正尹をかねたもの。
追儺――十九段頭註參照。
洞院右大臣――八十三段に左大臣として出てゐる。藤原實泰。
衞士――衞門府、兵衞府の小役人。

じかりけり。

第百二段

尹大納言光忠入道、追儺の上卿をつとめられけるに、洞院右大臣殿に次第を申し請けられければ、「又五郎男を師とするより外の才覺候はじ」とぞのたまひける。かの又五郎は老いたる衞士の、よく公事になれたる者にてぞありける。近衞殿、着陣したまひける時、ひざつきを忘れて、外記をめされければ、火たきて候ひけるが、「まづひざつきをめさるべくや候らん」と、しのびやかにつぶやきける、いとをかしかりけり。

第百三段

大覺寺殿にて、近習の人ども、なぞなぞをつくりて解かれける處へ、くすし忠守參りたりけるに、侍從大納言公明卿、「わが朝のものとも見えぬ忠守かな」と、なぞなぞにせられけるを、「唐瓶子」と解きてわらひあはれ

○よく公事に――吉澤本「公事によく」。近衛殿――何人か不明。

1 大覺寺殿――後宇多院の御所。洛西嵯峨に御隱居遊したのでかく申しあげる。但しこゝは内裏の意であらう。

くすし忠守――丹家康頼十一世の孫。典藥頭で歌人でもあつた。

侍從大納言公明卿――藤原仲實の子、歌をよくした。侍從大納言は大納言で侍從(中務省の屬官)を兼ねてゐるもの。

○せられけるを――嵯峨本「せられにけるを」、吉澤本「せられけり」。

ければ、腹立ちて退出にけり。

第百四段

荒れたる宿の人めなきに、女のはばかる事ある頃にて、つれづれと籠りゐたるを、ある人とぶらひ給はんとて、夕月夜のおぼつかなきほどに、忍びて尋ねおはしたるに、犬のことごとしくとがむれば、げす女の出でゝ、「いづくよりぞ」といふに、やがて案内させて入り給ひぬ。心ぼそげなるありさま、いかで過すらんと、いと心ぐるし。あやしき板敷に、しばし立ち給へるを、もてしづめたるけはひのわかやかなるして、「こなた」といふ人あれば、たてあけ取せげなる遣戸よりぞ入りたまひぬる。内のさまはいたくすさまじからず。心にくく、火はあなたにほのかなれど、物のきらなど見えて、俄にしもあらぬにほひ、いとなつかしう住みなしたり。「門よくさしてよ。雨もぞふる。御車は門のしたに。御供の人はそこそこに」といへば、「今宵ぞやすきいは寝べかめる」とうちさざめくも、忍びたれど、ほ

○104 案内させて――嵯峨本吉澤本その他諸本「案内させて」。

どなければほのきこゆ。さてこの程の事ども、こまやかに聞え給ふに、夜ぶかき雞もなきぬ。こしかたゆくすゑかけて、まめやかなる御物語に、このたびは、雞もはなやかなる聲にうちしきれば、明けはなるゝにやと聞き給へど、夜ふかくいそぐべき所のさまにもあらねば、すこしたゆみたまへるに、ひましろくなれば、忘れがたき事などいひて、たち出でたまふに、梢も庭もめづらしく青みわたりたる卯月ばかりのあけぼの、艶にをかしかりしをおぼし出でて、桂の木のおほきなるがかくるゝまで、今も見送り給ふとぞ。

第百五段

北の屋かげに消え殘りたる雪の、いたう氷りたるに、さしよせたる車の轅も、霜いたくきらめきて、有明の月さやかなれども、くまなくはあらぬに、人ばなれたる御堂の廊に、なみなみにはあらずと見ゆる男、女となげしに尻かけて、物がたりするさまこそ、何事にかあらん、つきすまじけれ。

かぶし、かたちなどいとよしと見えて、えもいはぬにほひの、さとかをりたるこそをかしけれ。けはひなど、はつれはつれ聞えたるもゆかし。

第百六段

高野の證空上人、京都へのぼりけるに、ほそ道にて、馬に乘りたる女のゆきあひけるが、口ひける男、あしくひきて、ひじりの馬を堀へおとしてけり。聖いと腹あしくとがめて、「こは希有の狼藉かな。四部の弟子はよな、比丘よりは比丘尼はおとり、比丘尼より優婆塞はおとり、優婆塞より優婆夷はおとれり。かくうばいなどの身にて、比丘を堀へ蹴入れさする、未曾有の惡行なり」といはれければ、口ひきの男、「いかにおほせらるゝやらん。えこそ聞き知らね」といふに、上人なほいきまきて、「何といふぞ、非修非學の男」とあららかにいひて、きはまりなき放言しつと思ひける氣色にて、馬ひきかへして逃げられけり。たふとかりけるいさかひなるべし。

105 ○さとかをりたるー—吉澤本「さとのぼりたる」。

106 證空上人——三井寺西山に同名の僧があつて誰とも定めがたい。

○京都へ——嵯峨本吉澤本その他諸本「都」の字なし。

○ゆきあひけるがー—嵯峨本、吉澤本その他諸本「ゆきあひたりけるが」。

○かくうばいなンど——嵯峨本「かくのごとくのうばいなンど」、吉澤本「かくのごとくうばいなど」。

○逃げられけりー—嵯峨本、吉澤本その他諸本「逃げられにけり」。

第百七段

女の物いひかけたる返事、とりあへずよき程にする男はありがたきものぞとて、龜山院の御時、しれたる女房ども、わかき男達のまゐらるゝ毎に、「時鳥や聞きたまへる」と問ひて、こころみられけるに、なにがしの大納言とかやは、「數ならぬ身はえ聞き候はず」と答へられけり。堀川内大臣殿は、「岩倉にて聞きて候ひしやらん」と、仰せられたりけるを、「これは難なし。數ならぬ身むつかし」などさだめあはれけり。

すべて男をば、女にわらはれぬやうにおほしたつべしとぞ。「淨土寺前關白殿は、をさなくて、安嘉門院のよくをしへまゐらせさせ給ひける故に御ことばなどのよきぞ」と、人の仰せられけるとかや。山階左大臣殿は、「あやしの下女の見奉るも、いとはづかしく、心づかひせらるゝ」とこそ仰せられけれ。女のなき世なりせば、衣紋も冠もいかにもあれ、引きつくらふ人も侍らじ。

107 ○え聞き候はずー—吉澤本「えこそ聞き候はず」。

堀川内大臣——源具守。堀川、又後に岩倉と號した。

岩倉——堀川内大臣の居た所。今の京都府愛宕郡岩倉村。

○淨土寺前關白殿ー—吉澤本「前」なし。淨土寺前關白——九條師教、淨土寺に住んだのでいふ。元應二年に薨ず。

安嘉門院——後堀川

帝の皇后藤原有子、後潯土寺に住まれた。
山階左大臣――洞院左大臣藤原實雄。文永十年薨ず。

○こゝろうかるべし――吉澤本「こゝろ」なし。

かく人に恥ぢらるゝ女、いかばかりいみじきものぞと思ふに、女の性はみなひがめり。人我の相ふかく、貪欲はなはだしく、物の理をしらず。たゞまよひの方に心もはやくうつり、言葉もたくみに、苦しからぬことをも、問ふ時はいはず、用意あるかと見れば、又あさましきことまで問はずがたりにいひ出す。ふかくたばかりかざれる事は、男の智惠にもまさりたるかとおもへば、その事あとよりあらはるゝをしらず。すなほならずしてつたなきものは女なり。その心にしたがひて、よく思はれんことはこゝろうかるべし。

されば、何かは女のはづかしからん。もし賢女あらば、それも物うとくすさまじかりなん。只まよひをあるじとして、彼にしたがふ時、やさしくもおもしろくも覺ゆべきことなり。

第百八段

寸陰をしむ人なし。これよく知れるか。おろかなるか。

108 ○富める人となず――吉澤本「富める人とす」。
○心切なり――吉澤本「心ねむごろなり」。

謝靈運――支那六朝時代の詞人、宋の元嘉中、永嘉の大守と

愚にしておこたる人の爲にいはゞ、一錢かろしといへども、これをかさぬれば貧しき人を富める人となす。されば、商人の一錢ををしむ心切なり。刹那おぼえずといへども、これを運びてやまざれば、命を終ふる期、忽ちにいたる。されば道人は、とほく月日を惜しむべからず、只今の一念空しく過ぐることを惜しむべし。

もし人來りて、わが命明日は必ずうしなはるべしと告げ知らせたらんに、けふの暮るる間、何事をか頼み、何事をかいとなまん。われらが生けるけふの日、なんぞその時節にことならん。

一日のうちに、飯食、便利、睡眠、言語、行歩、やむことを得ずしてほくの時をうしなふ。そのあまりの暇、いくばくならぬうちに、無益の事をなし、無益の事をいひ、無益のことを思惟して時をうつすのみならず、日を消し、月を亙りて、一生を送る、尤もおろかなり。

謝靈運は、法華の筆授なりしかども、こころ、常に風雲の思ひを觀ぜしかば、惠遠、白蓮のまじはりをゆるさざりき。

なる。
法華の筆授――法華は法華經、筆授は經典を梵語より漢字に譯して筆寫すること及び筆寫する人。
惠遠――晉の人、廬山虎溪東林寺の僧。白蓮のまじはり――惠遠、その寺の池に白蓮を植ゑ、賢人高士を招いて白蓮社と號した。これは阿彌陀佛の前に誓をたて專念往生を願ふ集りであ[illegible]た。
○外に世事――吉澤本「外には政事」。

しばらくもこれなき時は死人におなじ。光陰なにのために惜しむとならば、内に思慮なく、外に世事なくして、やまん人は止み、修せん人は修せよとなり。

第百九段

高名の木のぼりといひし男、人を掟てて、たかき木にのぼせて、梢をきらせしに、いとあやうく見えし程はいふこともなくて、おるゝ時に、軒たけばかりになりて、「あやまちすな。心しておりよ」と、言葉をかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛びおるるともおりなん。いかにかくいふぞ」と申し侍りしかば、「その事に候。目くるめき、枝あやうき程は、おのれがおそれ侍れば申さず。あやまちは、やすき所になりて、かならず仕る事に候」といふ。あやしき下臈なれども、聖人のいましめにかなへり。鞠もかたき所を蹴出してのち、やすく思へば、かならず落つと侍るやらん。

110 ○又しかなり――吉澤本「又」なし。
111 ○いみじく覺え侍る――吉澤本「いみじく覺え侍り」。
112 ○遠國――吉澤本「遠き國」。

第百十段

雙六の上手といひし人に、そのてだてを問ひ侍りしかば、「勝たんとうつべからず、負けじとうつべきなり。いづれの手か、とく負けぬべきと案じて、その手をつかはずして、一めなりともおそくまくべき手につくべし」といふ。道を知れる敎、身を治め、國をたもたん道も又しかなり。

第百十一段

「圍碁、雙六このみてあかしくらす人は、四重五逆にもまされる惡事とぞおもふ」と、ある聖の申し事、耳にとゞまりて、いみじく覺え侍る。

第百十二段

明日は遠國へおもむくべしと聞かん人に、心閑になすべからんわざをば、人いひかけてんや。俄の大事をもいとなみ、切になげく事もある人は、他

○他の事――嵯峨本吉澤本、その他諸本「他の事を」。
○人の愁、喜――吉澤本「愁悅」。
○のがれたらん人――吉澤本「のがれん人」。
○さへられて――吉澤本「まつはれて」。日暮れ途遠し――白樂天の詩に「日暮而途遠、吾生已蹉跎」。
○この心を持たざらん人――嵯峨本、吉澤本「この心をもえざらん人」。

113
○いかゞはせん――吉澤本「いかゞせん」。

の事聞き入れず、人の愁、喜をもとはず。とはずとてなどやと恨むる人もなし。されば、年もやうやうたけ、病にもまつはれ、いはんや世をものがれたらん人、又これにおなじかるべし。

人間の儀式、いづれの事か去りがたからぬ。世俗のもだしがたきに隨ひて、これを必ずとせば、ねがひもおほく、身もくるしく、心のいとまもなく、一生は雜事の小節にさへられて、空しく暮れなん。

日暮れ途遠し、吾が生既に蹉跎たり、諸縁を放下すべき時なり。信をも守らじ、禮儀をも思はじ。この心を持たざらん人は、物ぐるひともいへ、うつゝなし、なさけなしともおもへ。そしるともくるしまじ、譽むるともきゝ入れじ。

第百十三段

四十にもあまりぬる人の、色めきたるかた、おのづから忍びてあらんはいかゞはせん。ことにうち出でて、男女のこと、人のうへをもいひたはる

○いひたはるゝ――嵯峨本、吉澤本「いひたはぶるゝ」。

114
今出川のおほい殿――第七十段註參照。菊亭左大臣に同じ。
嵯峨――今、京都市右京區嵯峨。
有栖川――齋宮の野々宮の傍にあるともいひ、太秦から法輪へゆく道にあるともいふ。今は明でない。
さい王丸――牛飼童の名、年長者でも牛飼は髮衣など童子風にしてゐた。

ること、にげなく見ぐるしけれ。

大かた聞きにくゝ、見ぐるしきこと、老人のわかき人にまじはりて、興あらんと物いひゐたる、數ならぬ身にて、世の覺えある人をへだてなきさまにいひたる、貧しき所に酒宴このみ、客人に饗應せんときらめきたる。

第百十四段

今出川のおほい殿、嵯峨へおはしけるに、有栖川のわたりに、水のながれたる所にて、さい王丸、御牛を追ひたりければ、あがきの水、前板までざゞとかゝりけるを、爲則、御車のしりに候ひけるが、「希有の童かな。かかる所にて御車をばおふものか」といひたりければ、おほい殿、御氣色あしくなりて、「おのれ車やらんこと、さい王丸にまさりてえ知らじ。希有の男なり」とて、御車にかしらを打ちあてられにけり。この高名のさい王丸は、太秦どのの男、料の御牛飼ぞかし。この太秦殿に侍りける女房の名ども、一人はひざさち、一人はことづち、ひとりははうはら、一人はお

○御牛を――吉澤本「御車を」。爲則――從者の名であらう。
○御車をば――嵯峨本、吉澤本その他諸本「御牛をば」。太秦どの――内大臣藤原信清。建保四年薨。
○ひとりははうはら――嵯峨本、吉澤本「ひとりははふはら」。
115宿河原――攝津の國、又は武藏の國といふ。
九品の念佛――九品は極樂往生の階級で九つあるといふ。九品の念佛は參考抄に「九品往生の階級にかたどりて、九度調子をちがへて念佛する事にては有るまじくや」とある。

とうし、とつけられけり。

第百十五段

宿河原といふ所にて、ぼろぼろおほく聚りて、九品の念佛を申しけるに、外より入り來るぼろぼろの、「もしこの中に、いろおし坊と申すぼろやおはします」とたづねければ、その中より、「いろおし、こゝに候。かくのたまふは誰ぞ」と答ふれば、「しら梵字と申すものなり。おのれが師、なにがしと申しゝ人、東國にていろおしと申すぼろに殺されけりとうけたまはりしかば、その人にあひ奉りて、うらみ申さばやと思ひて、尋ね申すなり」といふ。いろおし、「ゆゝしくも尋ねおはしたり。さる事侍りき。ここにて對面し奉らば、道場をけがし侍るべし。前の川原へ參りあはん。あなかしこ、わきざしたち、いづかたをも見つぎ給ふな。あまたのわづらひにならば、佛事のさまたげに侍るべし」といひ定めて、二人川原へ出であひて、心ゆくばかりにつらぬきあひて、ともに死ににけり。ぼろぼろとい

○もしこの中に――嵯峨本、吉澤本「もしこの御中に」。
○いろおし――嵯峨本、吉澤本「いろをし」。
○わきざしたち――吉澤本「わざさしたち」。
○ありさまなれども――吉澤本「も」の字なし。
○すこしもなづまざる――吉澤本「すこしも」の四字なし。
116○つけけるなり――吉澤本「つけたるなり」。
○つかんとする――吉澤本「る」の字なし。

ふもの、昔はなかりけるにや。近き世に、梵論字、梵字、漢字などいひける者、そのはじめなりけるとかや。世をすてたるに似て、我執ふかく、佛道をねがふに似て、鬪諍を事とす。放逸無慚のありさまなれども、死を輕くして、すこしもなづまざるかたのいさぎよく覺えて、人のかたりしまゝに書き付けはんべるなり。

第百十六段

寺院の號、さらぬよろづの物にも、名をつくる事、昔の人は少しももとめず、たゞありのまゝにやすくつけけるなり。この比はふかく案じ、才覺をあらはさんとしたるやうに聞ゆる、いとむづかし。人の名も、めなれぬ文字をつかんとする、益なき事なり。何事もめづらしき事をもとめ、異說をこのむは、淺才の人のかならずある事なりとぞ。

第百十七段

118 中宮――後深草天皇の中宮、東二條院。北山入道――西園寺實氏、常盤井相國と號した人。中宮の御

友とするにわろきもの七あり。一には高くやんごとなき人、二にはわかき人、三には病なく身つよき人、四には酒を好む人、五にはたけく勇める兵、六には虚言する人、七には欲ふかき人。よき友三あり。一には物くるゝ友、二にはくすし、三には智惠ある友。

第百十八段

鯉のあつもの食ひたる日は鬢そゝけずとなん。膠にもつくるものなればばかりこそ、御前にてもきらるゝ物なれば、やんごとなき魚なり。鳥には雉、さうなき物なり。雉、松茸などは、御湯殿の上にかかりたるもくるしからず。その外は心うき事なり。

中宮の御方の御湯殿の上のくろみ棚に、雁の見えつるを、北山入道殿御覽じて、歸らせ給ひて、やがて御文にて、「かやうの物、さながらその姿にて、御棚にゐて候ひしこと、見ならはず、さまあしき事なり。はかばか

父である。九十四段にも出てゐる。○北山入道殿御覽じて――嵯峨本、吉澤本その他諸本「北山入道殿の御覽じて」。

119 鎌倉の海――鰹の名産地。「鎌倉を生きて出でけん初鰹」といふ芭蕉の句がある。○かやうのものも――吉澤本「かやうの物の」。

120 遠き物を――尚書卷

しき人のさぶらはぬゆゑにこそ」など申されたりけり。

第百十九段

鎌倉の海に、かつをといふ魚は、かの境にはさうなき物にて、この比もてなすものなり。それも、かまくらの年寄の申し侍りしは、「この魚、おのれらわかゝりし世までは、はかばかしき人の前へ出る事侍らざりき。頭は下部もくはず、切りて捨て侍りしものなり」と申しき。かやうの物も、世の末になれば、上ざままでも入りたつわざにこそ侍れ。

第百二十段

唐の物は、藥の外は、なくとも事かくまじ。書どもは、この國におほくひろまりぬれば、かきもうつしてん。もろこし船のたやすからぬ道に、無用のものどものみとりつみて、所せくわたしもてくる、いとおろかなり。「遠き物をたからとせず」とも、又「得がたき寶をたふとまず」とも、文にも

七「不レ寶二遠物一ヲ、則遠人格」。
得がたき寶――老子卷一「不レ貴二難レ得之貨一ヲ、使二民不レ爲レ盜」。
○たふとまずとも――嵯峨本、吉澤本「たふとまずともと」。

121 桀紂――夏の桀王、殷の紂王、ともに殘忍無道の暴君である。
王子猷――晉の王徽之、王羲之の子で風流を以て聞えた。

侍るとかや。

第百二十一段

やしなひ飼ふものには、馬、牛。つなぎくるしむるこそいたましけれど、なくてかなはぬものなれば、いかゞはせん。犬は守りふせぐつとめ、人にもまさりたれば、必ずあるべし。されど家毎にある物なれば、ことさらに求め飼はずともありなん。

その外の鳥獸、すべて用なきものなり。走る獸は檻にこめ、くさりをさされ、飛ぶ鳥は翅をきり、籠に入れられて、雲をこひ、野山をおもふ愁やむ時なし。そのおもひ、我が身にあたりて忍びがたくば、心あらん人、是をたのしまんや。生を苦しめて、目をよろこばしむるは桀紂が心なり。

王子猷が鳥を愛せし、林にたのしぶを見て逍遙の友としき。とらへくるしめたるにあらず。凡そ「めづらしき禽、あやしき獸、國に育はず」とこそ文にも侍るなれ。

○たのしぶを見て――吉澤本「たのしむを見て」。
めづらしき鳥――尙書卷七「犬馬非二其土性一不畜、珍禽奇獸不レ育二于國一」。
122 ○人をたすけ――吉澤本「身をたすけ」。
○人の天なり――嵯峨本「人の命なり」。
○萬の要おほし――嵯峨本、吉澤本「萬に要おほし」。
○鐵の益おはきに――吉澤本「鐵の益には、おほきに」。

第百二十二段

人の才能は、文あきらかにして、聖の教を知れるを第一とす。次には手かく事、むねとすることはなくとも、是を習ふべし。學問に便あらんためなり。次に醫術を習ふべし。身を養ひ、人をたすけ、忠孝のつとめも、醫にあらずば有るべからず。次に弓射、馬に乘ること、六藝に出せり。必ずこれを學ばんをばいたづらなる人といふべからず。次に食は人の天なり。よく味を調へしれる人、大なる德とすべし。次に細工、萬の要おほし。この外の事ども、多能は君子の恥づるところなり。詩歌にたくみに、絲竹に妙なるは幽玄の道、君臣これをおもくすといへども、今の世にはこれをもちて世を治むる事、漸くおろかなるに似たり。金はすぐれたれども、鐵の益おほきにしかざるがごとし。

123 ○君のため――嵯峨本「君のために」。

○この三つにすぎず――嵯峨本、吉澤本その他諸本には「この三つにはすぎず」。

第百二十三段

無益の事をなして時をうつすを、おろかなる人とも、僻事する人ともいふべし。國のため君のため、止むことを得ずしてなすべき事おほし。そのあまりのいとま、幾ならずおもふべし。

人の身に止むことをえずしていとなむ所、第一に食物、第二にきる物、第三に居る所なり。人間の大事、この三つにすぎず。飢ゑず、寒からず、風雨におかされずして、閑に過すを樂とす。たゞし人皆病あり。病におかされぬればその愁しのび難し。醫療をわするべからず。藥をくはへて四つの事、もとめ得ざるをまづしとす。この四つかけざるを富めりとす。この四つの外をもとめいとなむを驕とす。四つの事儉約ならば、誰の人か足らずとせん。

第百二十四段

124 是法法師――念阿上人の弟子で、内外の學に通じ、兼好と交りがあつた。歌人である。

125 ○人をきらんとす――吉澤本「を」の字なし。

○先づ我が頭――吉澤本「先づ」なし。

○人はよもめさじ――

是法法師は、淨土宗にはぢずといへども、學匠をたてず、たゞ明暮念佛して、やすらかに世を過すありさま、いとあらまほし。

第百二十五段

人におくれて、四十九日の佛事に、ある聖を請じ侍りしに、說法いみじくして、皆人涙をながしけり。導師歸りて後、聽聞の人ども、「いつよりも、ことにけふは尊くおぼえ侍りつる」と感じあへりし返事に、ある者の云はく、「何とも候へ、あれほど唐の狗に似候ひなんうへは」といひたりしに、あはれもさめて、をかしかりけり。さる導師のほめやうやはあるべき。また、「人に酒すすむるとて、おのれまづたべて、人に强ひ奉らんとするは、劍にて人をきらんとするに似たる事なり。二方に刃つきたる物なれば、もたぐる時、先づ我が頭をきる故に、人をばえきらぬなり。おのれまづ醉ひてふしなば、人はよもめさじ」と申しき。劍にてきりこゝろみたりけるにや。いとをかしかりき。

—吉澤本「人はよめさめじ」。
○いとたかしかりき——吉澤本「かりき」の三字なし。

128 雅房大納言——正二位源雅房。後土御門と號した。乾元元年薨。
院——後宇多上皇であらう。

第百二十六段

「ばくちの負きはまりて、殘りなくうちいれんとせんに、あひてはうつべからず。たちかへり、つづけて勝つべき時のいたれるとしるべし。その時をしるをよきばくちといふなり」とある者申しき。

第百二十七段

あらためて益なきことは、あらためぬをよしとするなり。

第百二十八段

雅房大納言は、才かしこく、よき人にて、大將にもなさばやとおぼしけるころ、院の近習なる人、「たゞいまあさましき事を見侍りつ」と申されければ、「何事ぞ」ととはせ給ひけるに、「雅房卿、鷹に飼はんとて、いきたる犬の足をきり侍りつるを、中垣の穴より見侍りつ」と申されけるに、

○心をとめて——吉澤本「心をとどめて」。
○欲おほく——吉澤本「欲のおほき」。

129 顏回——孔子の高弟で、亞聖と稱せられた高德の士である。

うとましく、にくくおぼしめして、日來の御氣色もたがひ、昇進もし給はざりけり。

さばかりの人、鷹をもたれたりけるは思はずなれど、犬の足は跡なきことなり。虛言は不便なれども、かゝる事を聞かせ給ひて、にくませ給ひける君の御心は、いとたふときことなり。

大かた生けるものをころし、いためたゝかはしめて、遊び樂しまん人は、畜生殘害の類なり。萬の鳥獸、ちひさき蟲までも、心をとめてありさまを見るに、子を思ひ、親をなつかしくし、夫婦をともなひ、ねたみ、いかり、欲おほく、身を愛し、命ををしめる事、ひとへに愚癡なる故に、人よりもまさりて甚し。彼にくるしみを與へ、命をうばはんこと、いかでかいたましからざらん。すべて一切の有情を見て、慈悲の心なからんは、人倫にあらず。

第百二十九段

顏回は、志、人に勞をほどこさじとなり。すべて人をくるしめ、物を虐

○事にもあらず思へど――吉澤本「事にもあらずと思へど」。

○心よりうく――吉澤本「心よりうくるなり」。

○知るべし――吉澤本「知りぬべし」。

凌雲の額――魏の能書家韋誕は二十五丈の高さである凌雲臺の額を書かされた。書き終つておりて來た時、恐しさのために鬚髮ともに白かつたといふ。

ぐること、賤しき民の志をも奪ふべからず。

またいときなき子をすかしおどし、いひはづかしめて興ずることあり。大人しき人は、まことならねば、事にもあらず思へど、をさなき心には、身にしみて、おそろしく、はづかしく　あさましき思ひ、誠に切なるべし。是をなやまして興ずること、慈悲の心にあらず。

大人しき人のよろこび、いかり、かなしび、たのしむも、皆虛妄なれども、誰か實有の相に著せざる。身をやぶるよりも、心をいたましむるは、人をそこなふ事なほ甚し。

病をうくることも、おほくは心よりうく。外より來るやまひはすくなし。藥を飲みて汗をもとむるには、しるしなきことあれども、一旦恥ぢおそるゝ事あれば、必ず汗を流すは、心のしわざなりといふ事を知るべし。凌雲の額を書きて、白頭の人となりしためしなきにあらず。

第百三十段

○よろこぶは負けて興なく――嵯峨本、吉澤本その他諸本「よろこぶ、されば負けて興なく」とある。

○なぐさまんこと――吉澤本「なぐさめんこと」。

○はかりあざむきて――吉澤本「はかりあざけりて」。

物にあらそはず、己を枉げて人にしたがひ、我が身を後にして、人を先にするにはしかず。

萬の遊びにも、勝負を好む人は、勝ちて興あらんためなり。おのれが藝のまさりたることをよろこぶは、負けて興なくおぼゆべき事、また知られたり。我負けて人をよろこばしめんと思はば、更にあそびの興なかるべし。人にほいなく思はせて、我が心をなぐさまんこと、德に背けり。

むつましき中にたはぶるゝも、人をはかりあざむきて、おのれが智のまさりたることを興とす。是又禮にあらず。

さればはじめ興宴よりおこりて、ながきうらみをむすぶ類おほし。是皆あらそひを好む失なり。

人に勝らん事を思はゞ、ただ學問して、その智を人にまさらんと思ふべし。道を學ぶとならば、善にほこらず、ともがらにあらそふべからずといふ事を知るべき故なり。大なる職をも辭し、利をもすつるは、たゞ學問の力なり。

132 鳥羽の作道――京の九條より鳥羽に通ずる大路。作道は新道のことである。鳥羽殿――白河上皇の御創營で、鳥羽天皇が御增修になつ

第百三十一段

貧しきものは財をもて禮とし、老いたる者は力をもて禮とす。

おのが分をしりて及ばざる時は、すみやかにやむを智といふべし。ゆるさざらんは人のあやまりなり。分をしらずして、しひてはげむはおのれが誤りなり。

まづしくて分をしらざれば盗み、力おとろへて分をしらざれば病をうく。

第百三十二段

鳥羽の作道は、鳥羽殿たてられて後の號にはあらず。むかしよりの名なり。元良親王、元日奏賀の聲、甚だ殊勝にして、大極殿より鳥羽の作道まで聞えけるよし、李部王の記に侍るとかや。

た。元良親王――陽成天皇の第一皇子。和歌をよくせられた。大極殿――八省院の中央で、天子の政を聞し召し、國儀大禮を行はせられる所。李部王の記――醍醐天皇の第四王子式部卿重明親王の筆錄された日記。

133 夜のおとど――天皇の御寢所。○又伊勢は――吉澤本「又」の字なし。

134 高倉院の法華堂――洛東清閑寺に高倉天皇の御陵がある。それに附屬してゐた法華堂。法華堂は法華三味を行ふ堂をいふ。○聞き傳へしこそ――嵯峨本、吉澤本そ

第百三十三段

夜のおとどは東御枕なり。おほかた東を枕として、陽氣をうくべき故に、孔子も東首し給へり。寢殿のしつらひ、或は南枕、常のことなり。白河院は北首に御寢なりけり。「北は忌む事なり。又伊勢は南なり。太神宮の御方を御跡にせさせ給ふといかゞ」と人申しけり。但し、太神宮の遙拜は巽にむかはせ給ふ、南にはあらず。

第百三十四段

高倉院の法華堂の三昧僧、なにがしの律師とかやいふもの、ある時、鏡をとりて、顏をつくづくと見て、わがかたちの見にくく淺ましきことを、餘りに心うく覺えて、鏡さへうとましきここちしければ、そののちながく鏡をおそれて、手にだにとらず、さらに人にまじはることなし。御堂のつとめばかりにあひて、籠り居たりと聞き傳へしこそ、有難くおぼえしか。

の他諸本「聞き侍りしこそ」。

○藝のつたなきも――嵯峨本、吉澤本その他諸本「藝のつたなきをも」。
○身の數ならぬ――嵯峨本「身の」の二字なし。
○年の老いぬる――吉澤本「年の」の二字なし。
○死のちかきことをも――吉澤本「こと」の字なし。
○老いぬとしらば――吉澤本「老いぬるをしらば」。
○しづかに身を――吉澤本「しづかにて身を」。

かしこげなる人も、ひとの上をのみはかりて、おのれをば知らざるなり。我をしらずして、外をしるといふことわりあるべからず。されば、おのれをしるを物しれる人といふべし。

かたちみにくけれども知らず、心のおろかなるをもしらず、藝のつたなきもしらず、身の數ならぬをもしらず、年の老いぬるをも知らず、病のおかすをもしらず、死のちかきことをも知らず、おこなふ道の至らざるをも知らず、身の上の非をしらねば、まして外のそしりをしらず。

但し、かたちは鏡に見ゆ、年はかぞへてしる。我が身のことしらぬにはあらねど、すべきかたのなければ、しらぬに似たりとぞいはまし。かたちをあらため、よはひを若くせよとにはあらず。拙きをしらば、なんぞやがてしりぞかざる。老いぬとしらば、なんぞしづかに身をやすくせざる。行愚なりとしらば、何ぞ茲をおもふこと茲にあらざる。

すべて人に愛樂せられずして、衆にまじはるは恥なり。かたちみにくく心おくれにして出で仕へ、無智にして大才に交り、不堪の藝をもちて堪能

135 資季大納言入道――正二位權大納言藤原資季。後出家して了心と云つた。
具氏宰相中將――從三位參議中將源具氏。宰相は參議の唐名である。
○おぼつかなき事こそ――嵯峨本、吉澤

○人に媚ぶるは――吉澤本「人に」の二字なし。

の座につらなり、雪の頭をいただきてさかりなる人にならび、いはんや及ばざる事をのぞみ、かなはぬことをうれへ、來らざることを待ち、人に恐れ、人に媚ぶるは、人のあたふる恥にあらず。むさぼる心にひかれて、みづから身をはづかしむるなり。

貪る事のやまざるは、命を終ふる大事、今こゝに來れりと、たしかに知らざればなり。

第百三十五段

資季大納言入道とかや聞えける人、具氏宰相中將にあひて、「わぬしの問はれん程の事、何事なりとも答へ申さざらんや」といはれければ、具氏、「いかゞ侍らん」と申されけるを、「さらばあらがひ給へ」といはれて、「はかばかしき事は、かたはしもまねびしり侍らねば、尋ね申すまでもなし。何となきそぞろごとの中に、おぼつかなき事こそ問ひ奉らめ」と申されけり。「まして爰許のあさき事は、何事なりともあきらめ申さん」とい

本その他諸本「おぼつかなき事をこそ」。○あさき事――吉澤本「あさ事」。

○その心をしらぬ――嵯峨本、吉澤本その他諸本「を」の字なし。

○せられたりけるとぞ――吉澤本「せられけるとぞ」。

136 醫師あつしげ――傳不明。故法皇――花園院であらうと云はれてゐる。尙、最近後宇多院説もある。

はれければ、近習の人々、女房なども、「興あるあらがひなり、同じくは御前にて諍はるべし。負けたらん人は供御をまうけらるべし」とさだめて、御前にてめしあはせられたりけるに、具氏「をさなくより聞きならひ侍れど、その心をしらぬこと侍り。『馬のきつりやうきつにのをか、なかくぼれいりくれんどう』と申す事は、いかなる心にか侍らん。承らん」と申されけるに、大納言入道、はたとつまりて、「これはそゞろごとなれば、いふにも足らず」といはれけるを、「もとよりふかき道はしり侍らず、そぞろごとを尋ね奉らんと定め申しつ」と申されければ、大納言入道負になりて、所課いかめしくせられたりけるとぞ。

第百三十六段

醫師あつしげ、故法皇の御前にさぶらひて、供御のまゐりけるに、「今まゐり侍る供御の色々を、文字も功能も尋ね下されて、そらに申し侍らば、本草に御覽じあはせられ侍れかし。ひとつも申しあやまり侍らじ」と申し

六條の故内府――内大臣源有房。歌及び書をよくした。元應元年七月薨。

○いづれの偏にか――吉澤本「か」の字なし。

○問はれたりければ――吉澤本「問はれければ」。

○あらはれにたり――吉澤本「あらはれにけり」。

137 ○春の行衞――吉澤本「春のゆくすゑ」。

○はやく散り過ぎ――吉澤本「はや散り過ぎ」。

○さる事なれど――

ける時しも、六條の故内府まゐり給ひて、「有房ついでに物習ひ侍らん」とて、「まづしほといふ文字はいづれの偏にか侍らん」と問はれたりけるに、「土偏に候」と申したりければ、「才の程すでにあらはれにたり。今はさばかりにて候へ、床しき所なし」と申されけるに、とよみになりて、まかり出でにけり。

第百三十七段

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。

雨にむかひて月を戀ひ、たれこめて春の行衞しらぬも、猶あはれになさけふかし。咲きぬべき程の梢、散りしをれたる庭なンどこそ、見所おほけれ。歌の言葉がきにも、「花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければ」とも、「さはる事ありてまからで」なども書けるは、「花を見て」といへるにおとれる事かは。花の散り、月のかたぶくをしたふならひは、さる事なれど、ことにかたくなる人ぞ、「この枝かの枝ちりにけり、今は

吉澤木「さるべき事なれど」。
○萬の事は――吉澤木「萬の事も」。
○待ち出でたる――嵯峨木、吉澤本その他諸木「待ち出でたるが」。
○木の間の影うちしぐれたる――吉澤本「木の間の影より、しぐれたる」。
○興ずるさまも――吉澤木「興ずるさまに」。
○花のもとには――吉澤木「は」の字なし。
○手足さしひたして――吉澤木「て」の字なし。
○あらそひ走りのぼりて――吉澤木「あらそひ走りてのぼりぬ」。
○落ちぬべきまで――吉澤木「落ちぬべきほどまで」。
○まもりて――嵯峨木「まほりて」。
○さぶらふは――吉澤木「さぶらへど」。
○見知れるもあり――

見所なし」などはいふめる。

萬の事は、始終こそをかしけれ。男女の情も、ひとへに逢ひ見るをばいふものかは。あはで止みにし憂さをおもひ、あだなる契をかこち、ながき夜をひとりあかし、遠き雲井をおもひやり、淺茅が宿に昔をしのぶこそ、色このむとはいはめ。

望月のくまなきを、千里の外までながめたるよりも、曉ちかくなりて待ち出でたる、いと心ふかう、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、うちしぐれたる村雲がくれの程、又なくあはれなり。椎、柴、白樫などの、ぬれたるやうなる葉のうへに、きらめきたるこそ、身にしみて、心あらん友もがなと、都こひしうおぼゆれ。

すべて月花をば、さのみ目にて見る物かは。春は家を立ちさらでも、月の夜は閨のうちながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。

よき人は、ひとへにすけるさまにも見えず、興ずるさまも等閑なり。かた田舍の人こそ、色こく、萬はもて興ずれ。花のもとにはねぢより、立ち

より、あからめもせずまもりて、酒のみ、連歌して、はては大なる枝、心なく折りとりぬ。泉には手足さしひたして、雪にはおり立ちて跡つけなど、萬のものよそながら見る事なし。さやうの人の祭見しさま、いとめづらかなりき。「見ごといとおそし、その程は棧敷不用なり」とて、奥なる屋にて、酒のみ、物くひ、圍碁双六などあそびて、棧敷には人をおきたれば、「わたりさふらふ」といふ時に、各、肝つぶるゝやうに、あらそひ走りのぼりて、落ちぬべきまで簾はり出でて、おしあひつゝ、一事も見もらさじとまもりて、とありかゝりと、物ごとにいひて、わたり過ぎぬれば、「又わたらんまで」といひておりぬ。只物をのみ見んとするなるべし。都の人のゆゝしげなるは、ねぶりていとも見ず。わかく末々なるは、宮づかへに立ち居、人のうしろにさぶらふは、さまあしくも及びかゝらず、わりなく見んとする人もなし。

何となく葵かけわたして、なまめかしきに、あけはなれぬほど、忍びてよする車どものゆかしきを、それかかれかなどおもひよすれば、牛飼、下

部なンどの見知れるもあり。をかしくも、きらきらしくも、さまざまに行きかふ、見るもつれづれならず。暮るるほどには、立てならべつる車ども、所なくなみゐつる人も、いづかたへか行きつらん、ほどなくまれになりて、車どものらうがはしさもすみぬれば、簾、疊もとりはらひ、目の前にさびしげになりゆくこそ、世のためしも思ひしられて、あはれなれ。大路みたるこそ祭見たるにてはあれ。彼の棧敷の前をこゝらゆきかふ人の、見知れるがあまたあるにてしりぬ。世の人數もさのみは多からぬにこそ。この人皆失せなん後、我が身死ぬべきに定まりたりとも、ほどなく待ちつけぬべし。大なる器に水を入れて、細き穴をあけたらんに、滴ることすくなしといふとも、怠る間なく漏りゆかば、やがてつきぬべし。都のうちにおほき人、死なざる日はあるべからず。一日に一人二人のみならんや。鳥部野舟岡、さらぬ野山にも、おくる數おほかる日はあれど、おくらぬ日はなし。されば棺をひさぐもの、作りてうちおく程なし。若きにもよらず、つよきにもよらず、思ひかけぬは死期なり。今日までのがれきにけるは、有

○怠る間なく——吉澤本「怠る時なく」。鳥部野——第七段の註參照。舟岡——京都市上京區、大德寺の西南の山である。墓地。

—吉澤本「見知れるもあるべし」。○さまざまに——吉澤本「に」の字なし。

り難き不思議なり。しばしも世をのどかにおもひなんや。まゝ子だてといふものを、雙六の石にて作りて、たてならべたるほどは、とられん事、いづれの石とも知らねども、かぞへあてゝ、ひとつを取りぬれば、その外はのがれぬとみれど、又々かぞふれば、彼れ是れまぬきゆく程に、いづれものがれざるに似たり。兵の軍に出づるは、死にちかき事をしりて、家をもわすれ、身をも忘る。世をそむける草の庵には、閑に水石をもてあそびて、是をよそに聞くと思へる、いとはかなし。しづかなる山の奥、無常のかたききほひ來らざらんや。その死にのぞめる事、軍の陣にすゝめるにおなじ。

第百三十八段

祭すぎぬれば、後の葵不用なりとて、ある人の、御簾なるを皆とらせられ侍りしが、色もなくおぼえ侍りしを、よき人のし給ふことなれば、さるべきにやとおもひしかど、周防内侍が

○世をのどかに——嵯峨本「世をのどかには」。○とられん事——吉澤本なし。○彼れ是れまぬき——吉澤本「是れ彼れまぬき」。○家をもわすれ——吉澤本「も」の字なし。○身をも忘る——吉澤本「も」の字なし。○聞くと思へるいと——嵯峨本、吉澤本その他諸本「聞くと思へるはいと」。○山の奥——吉澤本「岩のはざま」。○無常のかたき——吉澤本「無常のあだ」

138 ○後の葵——吉澤本

「の」の字なし。周防内侍――周防守平棟仲の女、仲子。
○葵のかゝりたる――吉澤本「葵の」の二字なし。
鴨長明――加茂の禰宜長繼の子、和歌、管弦に秀でてゐた。後出家。「方丈記」「四季物語」「無名鈔」等の著がある。
四季物語――長明が大原山に隱遁の後、四季月々の公事などを記した書。
○菊の折までも――吉澤本「も」の字なし。
枇杷皇太后宮――三條天皇の皇后。藤原道長の二女妍子。
辨乳母――前ノ加賀守顯時の女。陽明門院禎子內親王の御乳母である。
○あやめの草は――吉澤本「たまぬきしあやめの草は」。
江侍從――赤染衞門の女。父は侍從大江匡衡。
○よみしぞかし――吉澤本「よめるぞかし」。

かくれどもかひなき物はもろともにみすの葵の枯葉なりけり

とよめるも、母屋の御簾に葵のかゝりたる枯葉をよめるよし、家集にかけり。古き歌の詞書に、「枯れたる葵にさして遣はしける」とも侍り。枕草紙にも、「こしかたこひしきもの、かれたる葵」とかけるこそ、いみじくなつかしう思ひよりたれ。鴨長明が四季の物語にも、「たまだれに後の葵はとまりけり」とぞ書ける。おのれと枯るるだにこそあるを、名殘なくいかゞ取りすつべき。

御帳にかゝれるくす玉も、九月九日、菊にとりかへらるゝといへば、さうぶは、菊の折までもあるべきにこそ。枇杷皇太后宮かくれ給ひて後、古き御帳の內に、さうぶ、くす玉などのかれたるが侍りけるを見て、「折ならぬ根を猶ぞかけつる」と辨の乳母のいへる返事に、「あやめの草はありながら」とも、江の侍從がよみしぞかし。

第百三十九段

○139 このころぞ世におほく――吉澤本「いまの世にはいづくにもおほく」。
左近さくら――紫宸殿正面階前の庭に、左(東)に櫻、右(西)に橘がうゑてある。
○こちたくねぢけたり――吉澤本「ねぢけこちたし」。
○またすさまじ――吉澤本「いとすさま

家にありたき木は、松、櫻。松は五葉もよし。花はひとへなるよし。八重櫻は、奈良の都にのみありけるを、このころぞ、世におほくなり侍るなる。吉野の花、左近さくら、みな一重にてこそあれ。八重櫻は異樣の物なり。いとこちたくねぢけたり。うゑずともありなん。おそ櫻、またすさまじ。蟲のつきたるもむつかし。梅は白き、うす紅梅、ひとへなるがとく咲きたるも、かさなりたる紅梅のにほひめでたきも、みなをかし。おそき梅は、櫻に咲きあひて、おぼえおとり、けおされて、枝にしぼみつきたる、心うし。「ひとへなるが先づ咲きて散りたるは、心とくをかし」とて、京極の入道中納言は、猶一重梅をなん、軒ちかく植ゑられたりける。京極の屋の南むきに、今も二本侍るめり。柳又をかし。卯月ばかりの若楓、すべて萬の花、紅葉にもまさりてめでたきものなり。橘、桂、いづれも木は物古り、大なるよし。

草は山吹、藤、杜若、なでしこ、池には蓮、秋の草は荻、すゝき、きちかう、萩、女郎花、ふぢばかま、紫苑、われもかう、苅萱、りんだう、菊、

じ」。
○枝にしぼみつき——吉澤本「はては枝にしぼみつき」。京極入道中納言——權中納言藤原定家、入道して明靜といつた。有名な歌人である。京極の屋——京都市中京區二條寺町のあたりに定家の家趾がある。
○若楓——吉澤本「若楓は」。
○山吹——吉澤本「款冬」。
○ふぢばかま——吉澤本「藺」。
○葛——吉澤本「かつら」。
○この外世に——嵯峨本、吉澤本「この外の世に」。

黄菊も。蔦、葛、朝顔、いづれもいとたかからず、ささやかなる垣に、しげからぬよし。この外、世にまれなるもの、からめきたる名の聞きにくく、花も見なれぬなど、いとなつかしからず。大かた、なにもめづらしく有りがたき物は、よからぬ人のもて興ずるものなり。さやうの物なくてありなん。

第百四十段

身死して財殘ることは、智者のせざる處なり。よからぬものたくはへ置きたるもつたなく、よき物は心をとめけんとはかなし。こちたくおほかる、まして口をし。「我こそ得め」などいふ者どもありて、跡にあらそひたる、さまあし。後は誰にと心ざすものあらば、いけらんうちにぞゆづるべき。朝夕なくてかなはざらん物こそあらめ、その外は、何ももたでぞあらまほしき。

○聞きにくく——吉澤本「聞きにくき」。
140
○心をとめけんと——吉澤本「必ず心とめけん」。
○得めなンど——吉澤本「な」の字なし。
○跡にあらそひたる——吉澤本「跡にあらそへるいと」。
○なくてかなはざらん——吉澤本「なくてあられざらん」。
○何ももたでぞ——吉澤本「いづれも持たでぞ」。
141
悲田院——洛中の孤兒、貧者、病者等を收容した寺。鴨川の西畔にあつたが、今は泉涌寺にうつされてゐる。
堯蓮上人——傳不明
○俗姓に——吉澤本

第百四十一段

悲田院堯蓮上人は、俗姓は三浦の何某とかや、さうなき武者なり。故郷の人の來りて、物がたりすとて、「あづま人こそ、いひつる事はたのまれ。都の人はことうけのみよくて、實なし」といひしを、聖、「それはさこそおぼすらめども、おのれは都に久しく住みて、なれて見るに、人の心おとれりとは思ひ侍らず。なべての心やはらかに、情あるゆゑに、人のいふ程の事、けやけくいなびがたく、よろづえ云ひはなたず、心よわくてことうけしつ。僞せんとは思はねど、ともしく、かなはぬ人のみあれば、おのづからほいとほらぬ事おほかるべし。あづま人は、我がかたなれど、げには心の色もなく、情おくれ、ひとへにすくよかなるものなれば、はじめより否といひてやみぬ。にぎはひゆたかなれば、人にはたのまるゝぞかし」とことわられ侍りしこそ。この聖、聲うちゆがみ、あらあらしくて、聖教のこまやかなることわり、いとわきまへずもやとおもひしに、この一

「は」の字なし。
○なれて見るに――嵯峨本「なれて見侍るに」、吉澤本「なれ見侍るに」。
○なべての心――嵯峨本、吉澤本その他諸本「の」の字なし。
○いなびがたく――嵯峨本、吉澤本「いなびがたくて」。
○心よわくて――嵯峨本、吉澤本その他諸本「て」なし。
○おほかるべし――吉澤本「おほかり」。
○心の色もなく――嵯峨本、吉澤本その他諸本「も」の字なし。
○すくよかなるもの――吉澤本「きすぐなるもの」。
○所ありて――吉澤本「所のありて」。

言の後、心にくくなりて、おほかる中に寺をも住持せらるるは、かくやはらぎたる所ありて、その益もあるこそと覺え侍りし。

第百四十二段

心なしと見ゆる者も、よき一言はいふものなり。

ある荒夷のおそろしげなるが、かたへにあひて、「御子はおはすや」と問ひしに、「一人ももち侍らず」と答へしかば、「さてはものゝあはれは知り給はじ、情なき御心にぞものし給ふらんといとおそろし。子ゆゑにこそ萬のあはれはおもひしらるれ」といひたりし、さもありぬべき事なり。恩愛の道ならでは、かゝる者の心に慈悲ありなんや。孝養のこころなきものも、子持ちてこそ、親の志は思ひしるなれ。

世を捨てたる人の、よろづにするすみなるが、なべてほだしおほかる人の、萬にへつらひ、のぞみふかきを見て、無下におもひくだすは僻事なり。その人の心になりて思へば、誠に悲しからん親のため、妻子のためには、

○その益もあるこそ――嵯峨本、吉澤本その他諸本「その益もあるにこそ」。
○覺え侍りし――吉澤本「覺え侍りしなり」。

142

○よき一言――吉澤本「よきこと」。
○おもひしらるれ――吉澤本「おもひ」の三字なし。
○世を捨てたる人のよろづにするすみなるが――吉澤本「するすみにて、世を思ひ捨てたるまゝに」。
○なりて思へば――吉澤本「なりてみるに」。
○誠に――吉澤本「に」なし。

恥をもわすれ、ぬすみもしつべき事なり。

されば、盗人をいましめ、僻事をのみ罪せんよりは、世の人の飢ゑず、寒からぬやうに、世をば行はまほしきなり。人恒の産なき時は、恒の心なし。人きはまりてぬすみす。世治らずして凍餒の苦しみあらば、科の者絶ゆべからず。人をくるしめ、法をおかさしめて、それを罪なはんこと、不便のわざなり。

さていかがして人を惠むべきとならば、上のおごりつひやす所をやめ、民をなで、農をすゝめば、下に利あらん事うたがひあるべからず。

衣食尋常なるうへに、ひがごとせん人をぞ、まことの盗人とはいふべき。

第百四十三段

人の終焉のありさまの、いみじかりしことなど、人の語るを聞くに、ただしづかにして亂れずといはゞ、心にくかるべきを、愚なる人は、あやし

○盗人をいましめ——吉澤本「盗人のいましめ」。
○世をは行はまほしきなり——吉澤本「世を行はまほしき事なり」。人恒の産——孟子梁惠王上篇に「無二恒産一、因無二恒心一」。
○ひがごとせん人をぞ——吉澤本「を」なし。
143 ○人の語るを——吉澤本「愚なる人の語るを」。
○愚なる人は——吉澤本なし。
144 栂尾の上人——明恵上人。京都の西北栂尾の高山寺の高僧で華嚴宗中興の祖である。
○道をすぎ給ひ——吉澤本「道をすぎ行き給ひ」。府生殿——何人か不明。府生は六衛府、檢非違使などの下級官。
145 秦重躬——傳不詳。下野入道信願——傳不明。
146 明雲座主——久我太政大臣雅實の孫で天台座主。この話は源平盛衰記第三十四に出てゐる。

く、ことなる相をかたりつけ、云ひし言葉も、擧止も、おのれがこのむ方にほめなすこそ、その人の日來の本意にもあらずやと覺ゆれ。

この大事は、權化の人も定むべからず、博學の士もはかるべからず。おのれたがふ所なくば、人の見聞くにはよるべからず。

第百四十四段

栂尾の上人、道を過ぎ給ひけるに、河にて馬あらふ男、「あしあし」といひければ、上人立ちとまりて、「あなたふとや。宿執開發の人かな。阿字阿字と唱ふるぞや。いかなる人の御馬ぞ。あまりにたふとく覺ゆるは」と尋ねたまひければ、「府生殿の御馬に候」と答へけり。「こはめでたき事かな。阿字本不生にこそあなれ。うれしき結緣をもしつるかな」とて、感涙をのごはれけるとぞ。

第百四十五段

御隨身、秦重躬、北面の下野入道信願を、「落馬の相ある人なり。能々つつしみたまへ」といひけるを、いとまことしからず思ひけるに、信願馬より落ちて死ににけり。道に長じぬる一言、神のごとしと人思へり。さて「いかなる相ぞ」と人の問ひければ、「きはめて桃尻にして、沛艾の馬を好みしかば、この相をおほせ侍りき。いつかは申し誤りたる」とぞいひける。

第百四十六段

明雲座主、相者にあひ給ひて、「おのれもし兵仗の難やある」と尋ね給ひければ、相人、「誠にその相おはします」と申す。「いかなる相ぞ」と尋ね給ひければ、「傷害のおそれおはしますまじき御身にて、かりにもかくおぼしよりて尋ね給ふ。是れ既にそのあやぶみのきざしなり」と申しけり。はたして矢にあたりて、うせ給ひにけり。

○147 等にも見えず――嵯峨本、吉澤本その他諸本「等にも見えずとぞ」。

第百四十七段

灸治あまた所になりぬれば、神事にけがれありといふ事、ちかく人の云ひ出せるなり。格式等にも見えず。

第百四十八段

四十以後の人、身に灸を加へて、三里をやかざれば、上氣の事あり。かならず灸すべし。

第百四十九段

鹿茸を鼻にあてゝ嗅ぐべからず。ちひさき蟲ありて、鼻より入りて、腦をはむといへり。

第百五十段

○150 いと心にくく――吉澤本「いと」の二字なし。かくいふ人――嵯峨本「かく」なし。○堅固――吉澤本「稽古」となつてゐる。○天性その骨――嵯峨本「天性天骨」。○瑕瑾もありき――吉澤本「き」の字なし。

151

能をつかんとする人、「よくせざらん程は、なまじひに人に知られじ。うちうちよく習ひえてさし出でたらんこそ、いと心にくからめ」と常にいふめれど、かくいふ人、一藝もならひうる事なし。いまだ堅固かたほなるより、上手の中にまじりて、そしりわらはるゝにも恥ぢず、つれなくすぎてたしなむ人、天性其の骨なけれども、道になづまず、みだりにせずして、年をおくれば、堪能のたしなまざるよりは、終に上手の位にいたり、德たけ、人にゆるされて、ならびなき名をうる事なり。天下のものゝ上手といへども、はじめは不堪の聞えもあり、無下の瑕瑾もありき。されどもその人、道のおきてただしく、これをおもくして、放埒せざれば、世の博士にて、萬人の師となる事、諸道かはるべからず。

第百五十一段

或る人のいはく、「年五十になるまで、上手に至らざらん藝をば捨つべきなり。はげみならふべき行末もなし。老人のことをば人もえわらはず。

○萬のしわざ――吉澤本「の」の字なし。

○おぼつかなからず――吉澤本「おぼつかならず」。

152 西大寺靜然上人――西大寺は稱德天皇の御代の創建で、大和七大寺の一である。靜然上人は傳不明。

○まゐられたりけるを――吉澤本「たり」なし。

西園寺內大臣――西園寺公衡公の子實衡。

資朝卿――權中納言

衆にまじはりたるも、あいなく見ぐるし。おほかた萬のしわざはやめて、いとまあるこそ、めやすくあらまほしけれ。世俗のことにたづさはりて、生涯をくらすは、下愚の人なり。ゆかしく覺えん事は、學びきくとも、その趣をしりなば、おぼつかなからずしてやむべし。もとよりのぞむ事なくしてやまんは、第一の事なり」。

第百五十二段

西大寺靜然上人、腰かゞまり、眉しろく、誠に德たけたる有樣にて、內裏へまゐられたりけるを、西園寺內大臣殿、「あなたふとのけしきや」とて、信仰の氣色ありければ、資朝卿これを見て、「年のよりたるに候」と申されけり。後日に、むく犬の、淺ましく老いさらぼひて、毛はげたるをひかせて、「この氣色たふとく見えて候」とて、內府へまゐらせられたりけるとぞ。

日野資朝。建武の大功臣で後醍醐帝の信任が厚かつた。王政復古をはかり、事洩れて北條高時に捕へられ、元德二年佐渡で殺された。

○內府へまゐらせられたりけるとぞ――吉澤本「內府のもとへまゐらせられけるとぞ」。

153 爲兼大納言入道――定家の曾孫、權大納言藤原爲兼。玉葉集の撰者である。永仁中隱謀の風聞により北條貞時に捕へられ佐渡に流されたが、後召還された。六波羅――承久の亂後、北條氏がおいた六波羅探題の政廳。今、京都市東山區に地名が殘つてゐる。

第百五十三段

爲兼大納言入道、めしとられて、武士どもうちかこみて、六波羅へゐて行きければ、資朝卿、一條わたりにてこれを見て、「あならやまし。世にあらん思出、かくこそあらまほしけれ」とぞいはれける。

第百五十四段

この人、東寺の門に雨やどりせられたりけるに、かたは者どものあつまりゐたるが、手も足もねぢ、ゆがみ、うちかへりて、いづくも不具に、ことやうなるを見て、「とりどりにたぐひなき曲者なり。尤も愛するに足れり」と思ひてまもり給ひけるほどに、やがてその興つきて、見にくく、いぶせく、おぼえければ、たゞすなほにめづらしからぬ物にはしかずとおもひて、歸りて後、この間栽木を好みて、異樣に曲折あるを求めて、目をよろこばしめつるは、かのかたはを愛するなりけりと、興なくおぼえければ、

資朝卿――前段參照
○世にあらん思出――吉澤本「世にあらん思出に」。
151
この人――資朝卿。東寺――京都市下京區西九條にある。眞言宗の總本山で桓武天皇の御創立。
○異樣に――吉澤本「異樣なる」
155
○機嫌をはからず――吉澤本「機嫌をうかゞはず」。
○されば眞俗……思はん事は――吉澤本「さればこの世も後の世も必ずとげんと思はん人は」。
○とかくの用意――

鉢にうゑられける木ども、皆ほりすてられにけり。さもありぬべき事なり。

第百五十五段

世にしたがはん人は、先づ機嫌をしるべし。ついであしき事は、人の耳にもさかひ、心にもたがひて、その事ならず。さやうの折節を心得べきなり。

但し病をうけ、子うみ、死ぬる事のみ、機嫌をはからず、ついであしとてやむことなし。生住異滅のうつりかはる、實の大事は、たけき川のみなぎりながるゝがごとし。しばしもとどこほらず、たゞちにおこなひゆくものなり。

されば眞俗につけて、必ずはたし遂げんと思はん事は、機嫌をいふべからず。とかくの用意なく、足をふみとゞむまじきなり。

春くれて後夏になり、夏はてゝ秋のくるにはあらず。春はやがて夏の氣をもよほし、夏よりすでに秋は通ひ、秋は則ち寒くなり、十月は小春の天

嵯峨本「とかくのもよひ」。
○則ち寒くなり――吉澤本「則ち寒くなりて」。
○まづ落ちて――吉澤本「まづ落ちてのち」。
○是に過ぎたり――嵯峨本「また是に過ぎたり」。
156
宇治左大臣――左大臣藤原頼長。崇德上皇と保元の亂をおこす。
東三條殿――初め靈明親王の第であつたが、後藤原氏の女で母后となられた方の御住居となつた。當時は近衞帝の皇居。

氣、草も青くなり、梅もつぼみぬ。木の葉の落つるも、まづ落ちてめぐむにはあらず。下よりきざしつはるに堪へずして落つるなり。むかふる氣、下にまうけたる故に、待ちとるついで甚だはやし。

生老病死のうつり來る事、是に過ぎたり。四季は猶さだまれるついであり。死期は序をまたず。死は前よりしも來らず、かねてうしろにせまれり。人皆死あることを知りて、待つことしかも急ならざるに、覺えずして來る。沖の干潟はるかなれども、磯より鹽のみつるがごとし。

第百五十六段

大臣の大饗は、さるべき所を申しうけておこなふ、常の事なり。宇治左大臣殿は、東三條殿にておこなはる。內裏にてありけるを、申されけるによりて、他所へ行幸ありけり。させることのよせなけれども、女院の御所などかり申す、故實なりとぞ。

157 ○擲――吉澤本「擲」。
○事に觸れて來る――吉澤本「て」なし。

158 ○心ながらも――吉澤本「も」なし。
○二ならず――吉澤本「ことならず」。
○しひて不信と――嵯峨本「しひて不信たと」。

第百五十七段

筆をとればもの書かれ、樂器をとれば音をたてんと思ふ。盃をとれば酒を思ひ、賽をとれば擲うたんことを思ふ。心は必ず事に觸れて來る。かりにも不善の獻をなすべからず。

あからさまに聖教の一句を見れば、何となく、前後の文もみゆ。卒爾にして多年の非を改むる事もあり。かりに今この文をひろげざらましかば、此の事をしらんや。これ則ちふるゝ所の益なり。心さらにおこらずとも、佛前にありて、數珠をとり、經をとらば、怠るうちにも善業おのづから修せられ、散亂の心ながらも、繩床に坐せば、覺えずして禪定なるべし。

事理もとより二ならず。外相もしそむかざれば、內證かならず熟す。しひて不信といふべからず。あふぎて是をたふとむべし。

第百五十八段

159 ○盃のそこを――吉澤本「を」の字なし。
○申し侍れば――吉澤本、嵯峨本「申し侍るは」。
○そこに凝りたる――吉澤本「そこ濁りたる」。

159 ○みなむすび――嵯峨本、吉澤本「になむすび」。
○蜷――嵯峨本、吉澤本「蜷」。
○おほせられにき――嵯峨本、吉澤本「に」なし。
○になといふは――嵯峨本、吉澤本「みなといふは」。

160 ○門に額かくるを――吉澤本「額かくる

「盃のそこをすつる事は、いかゞ心得たる」と、ある人の尋ねさせ給ひしに、「凝當と申し侍れば、そこに凝りたるをすつるにや候らん」と申し侍りしかば、「さにはあらず、魚道なり。流をのこして、口のつきたる所をすゝぐなり」とぞおほせられし。

第百五十九段

「みなむすびといふは、糸を結びかさねたるが、蜷といふ貝に似たればいふ」と、あるやんごとなき人おほせられにき。になといふはあやまりなり。

第百六十段

門に額かくるを、「うつ」といふはよからぬにや。勘解由小路二品禪門は、「額かくる」との給ひき。見物の「棧敷うつ」もよからぬにや。「平張うつ」などは常の事なり。「棧敷かまふる」などいふべし。「護摩たく」

を」と「うつといふは」の間に「うつといひたるはわろし」の十一字がある。勘解由小路二品禪門——正二位參議世尊寺行忠。

○棧敷うつもよからぬにや——吉澤本「棧敷うつなどもよからず」。

○平張うつなどは常の事なり——吉澤本「平張うてなどはいふめり」。

○護摩たくといふもわろし——吉澤本「護摩たくといふめるもわろき詞なり」。清閑寺僧正——清閑寺は京都市東山區、清水の東南。僧正は道我僧正、兼好の歌友であつた。

といふもわろし　「修する」「護摩する」などいふなり。「行法も、『法』の字をすみていふ、わろし。濁りていふ」と、清閑寺僧正仰せられき。常に云ふ事に、かゝることのみおほし。

第百六十一段

花のさかりは、冬至より百五十日とも、時正の後七日ともいへど、立春より七十五日、おほやうたがはず。

第百六十二段

遍照寺の承仕法師、池の鳥を日來かひつけて、堂のうちまで餌をまきて、戸ひとつをあけたれば、數もしらず入りこもりける後、おのれも入りて、立てこめて、とらへつつ殺しけるよそほひ、おどろおどろしく聞えけるを、草かるわらは聞きて人に告げければ、村のをのこども起りて入りて見るに、大雁どもふためきあへる中に、法師まじりて、打ちふせ、ねぢころ

162 遍照寺——京都嵯峨廣澤の西北にあつた。今はそこの觀音堂に寺號を傳へてゐる。

○戸ひとつを——嵯峨本、吉澤本「を」なし。

○人に告げければ——吉澤本「人に告げたりければ」。

○起りて——吉澤本「て」なし。

○大雁ども——吉澤本「ども」なし。

○基俊大納言——吉澤本「基俊大納言殿」基俊大納言——九十九段に出てゐる。久我基具の二男。

○なん侍りける——嵯峨本「なん」なし。吉澤本「なん有りける」。

163 もりちか入道——傳

しければ、この法師をとらへて、所より使廳へ出したりけり。ころす所の鳥を頸にかけさせて、禁獄せられにけり。基俊大納言、別當の時になん侍りける。

第百六十三段

太衝の太の字、默うつ、うたずといふ事、陰陽のともがら、相論の事ありけり。もりちか入道申し侍りしは、「吉平が自筆の占文の裏にかゝれたる御記、近衞關白殿にあり。點うちたるを書きたり」と申しき。

第百六十四段

世の人あひ逢ふ時しばらくも默止する事なし。必ず言葉あり。そのことをきくに、おほくは無益の談なり。世間の浮説、人の是非、自他のために失おほく、得すくなし。これをかたる時、たがひの心に無益のことなりといふ事をしらず。

不明。
吉平――晴明の子、安倍吉平。主計頭、陰陽博士を歴任した。近衛關白殿――藤原家平であらう。
○書きたりと――吉澤本「書きたるよしと」。
164
○無益のことなりと――吉澤本「なり」の二字なし。
165
○みやこの人の――吉澤本「みやこの人」。
○わが俗――吉澤本「わが屬」。
○まじはれる――嵯峨本「人にまじはれる」、吉澤本「人にまじはるは」。
166
○金銀珠玉――吉澤本「珠玉」なし。嵯峨本、吉澤本「塔」の字なし。
○營まつこと――吉澤本「おこなふこと」。
167
○かくよそに見――吉澤本「かくよそには」。
○心におもへる事――吉澤本「事」なし。
○よにわろく――吉澤本「よに詮なく」。
○我が智を――吉澤本「又我が智を」。
○人にあらそふは――吉澤本「人にあらそふ心は」。
○物とあらそはざる――吉澤本「物と」なし。
○品の高さ――吉澤本「品の高き」。
○いはねども――吉澤本「わが身をほめねども」。

第百六十五段

あづまの人の、都の人にまじはり、みやこの人の、あづまに行きて身を立て、又本寺本山をはなれぬる顯密の僧、すべてわが俗にあらずしてまじはれる、見苦し。

第百六十六段

人間のいとなみあへるわざを見るに、春の日に雪佛をつくりて、そのために金銀珠玉のかざりをいとなみ、堂塔をたてんとするに似たり。そのかまへを待ちて、よく安置してんや。人の命ありと見る程も、下より消ゆること、雪のごとくなるうちに、營まつこと甚だおほし。

第百六十七段

一道にたづさはる人、あらぬ道のむしろにのぞみて、「あはれ我が道な

らましかば、かくよそに見侍らじものを」といひ、心にもおもへる事、常のことなれど、よにわろくおぼゆるなり。知らぬ道のうらやましくおぼえば、「あなうらやまし。などかならはざりけん」といひてありなん。

我が智をとり出でて人にあらそふは、角あるものゝ角をかたぶけ、牙あるものゝ牙をかみいだすたぐひなり。

人としては善にほこらず、物とあらそはざるを德とす。他にまさることのあるは、大なる失なり。品の高さにても、才藝のすぐれたるにても、先祖のほまれにても、人にまされりと思へる人は、たとひ言葉に出でてこそいはねども、內心にそこばくのとがあり。つゝしみて是をわするべし。をこにも見え、人にも云ひ消たれ、わざはひをもまねくは、たゞこの慢心なり。

一道にも誠に長じぬる人は、みづからあきらかにその非を知る故に、志常に滿たずして、終に物にほこることなし。

○わざはひたも――吉澤本「も」なし。
○その非な――吉澤本「その」なし。
○滿たずして――吉澤本「みだらずして」
8
○才能ありて――嵯峨本「才のありて」。
○この人の後には――吉澤本「に」なし。
○などいはゞ――嵯峨本、吉澤本その他諸本「なンどいはるゝは」。
○すたれたる――吉澤本「すぐれたる」。
○さばかりの才には――吉澤本「は」なし。
○猶まことに――吉澤本「まことに」の四字なし。
○べくもあらぬ人の――吉澤本「べくもあらぬ人に」。

第百六十八段

年老いたる人の、一事すぐれたる才能ありて、「この人の後には、誰にかとはむ」などいはゞ、老の方人にて、いけるもいたづらならず。

さはあれど、それもすたれたる所のなきは、一生この事にて暮れにけりとつたなく見ゆ。

「今はわすれにけり」といひてありなん。大かたは知りたりとも、すぐろにいひちらすは、さばかりの才にはあらぬにやと聞え、おのづからあやまりもありぬべし。「さだかにもわきまへしらず」などいひたるは、猶まことに道のあるじとも覺えぬべし。

ましてしらぬ事、したり顔に、おとなしくもどきぬべくもあらぬ人のいひ聞かするを、さもあらずと思ひながら聞き居たる、いとわびし。

第百六十九段

169 後嵯峨――八十八代後嵯峨天皇。
――建禮門院の右京大夫――建禮門院は平清盛の女で高倉天皇の中宮、右京大夫はその女官で、藤原伊行の女。一時官を退いてゐたが、後に後鳥羽帝に仕へた。家集「建禮門院右京大夫集」二卷がある。
後鳥羽院――八十二代後鳥羽天皇。
170
○人とむかひたれば――吉澤本「人もむかひたれば」。
○互のため益なし――吉澤本「互のためいと益なし」。
○いはんもわろし――吉澤本「いはんもわびし」。
○心づきなき――吉

「何事の式といふ事は、後嵯峨の御代まではいはざりけるを、近きほどよりいふ詞なり」と、人の申し侍りしに、建禮門院の右京大夫、後鳥羽院の御位の後、又内裏住したることをいふに、「世のしきもかはりたることはなきにも」と書きたり。

第百七十段

さしたることなくて、人のがりゆくは、よからぬことなり。用ありて行きたりとも、その事はてなば、とく歸るべし。ひさしくゐたる、いとむつかし。

人とむかひたれば、詞おほく、身もくたびれ、心もしづかならず、萬の事さはりて、時をうつす、互のため益なし。

いとはしげにいはんもわろし。心づきなき事あらん折は、なかなかそのよしをもいひてん。

同じ心にむかはまほしく思はん人の、つれづれにて、「いましばし、け

澤本「心づたなき」。阮籍――晉の竹林の七賢の一人。好む客には青眼を以て、好まぬ客には白眼を以てむかへたといふ。

○あるべき事なり――吉澤本「事」なし。

○また文も――吉澤本「また」なし。

○171 ○見わたして――吉澤本「て」なし。

○ちかきばかりおほふやうなれど――吉澤本「ちかきばかりをおふやうなれど」。

○むかひなる石を守りてはじくは――吉澤本「むかひなる石をのみ守りてはじく

ふは心しづかに」などいはんは、このかぎりにはあらざるべし。阮籍が青き眼、誰もあるべき事なり。

その事となきに、人の來りて、のどかに物語してかへりぬる、いとよし。また文も、「久しくきこえさせねば」などばかりいひおこせたる、いとうれし。

第百七十一段

貝をおほふ人の、我がまへなるをばおきて、よそを見わたして、人の袖のかげ、膝の下まで目をくばる間に、前なるをば人におほはれぬ。よくおほふ人は、他所までわりなくとるとは見えずして、ちかきばかりおほふやうなれど、おほくおほふなり。碁盤のすみに、石をたててはじくに、むかひなる石を守りてはじくはあたらず。我が手もとをよく見て、ここなるひじりめをすぐにはじけば、たてる石必ずあたる。

萬の事、外にむきてもとむべからず。たゞこゝもとをたゞしくすべし。

に」。嵯峨本「守りて」は「まほりて」となつてゐる。

○たてる石――嵯峨その他諸本「たてたる石」。

清獻公――宋の趙抃のこと。侍御史として權倖を彈劾したので鐵面御史の名を得た。

禹――禹は舜に位をゆづられて後に夏の國をたてた聖王。禹は始め舜の命で當時南方にゐた蠻族三苗を征したが、三旬にしても服さなかつた。そこで伯益の議を用ひ軍を歸して德政を布いた處、三苗は間もなく服したのをいふ。

○172 ○美麗――吉澤本「花麗」。

清獻公が言葉に、「好事を行じて前程をとふことなかれ」といへり。

世をたもたん道もかくや侍らん。内をつゝしまず、輕くほしきまゝにして、みだりなれば、遠國必ずそむく時、はじめて謀をもとむ。「風にあたり、濕に臥して、病を神靈に訴ふるは、おろかなる人なり」と、醫書にいへるがごとし。目の前なる人の愁をやめ、惠をほどこし、道をたゞしくせば、その化とほくながれん事をしらざるなり。禹のゆきて三苗を征せしも、師をかへして德をしくにはしかざりき。

第百七十二段

わかき時は、血氣うちにあまり、心物に動きて情欲おほし。身をあやぶめてくだけやすき事、珠をはしらしむるに似たり。美麗をこのみて財をつひやし、是を捨てて苔のたもとにやつれ、いさめる心さかりにして、物とあらそひ、心に恥ぢうらやみ、このむ所日々にさだまらず。色にふけり、情にめで、行をいさぎよくして、百年の身を誤り、命を失へるためしね

○心に恥ぢ——吉澤本「人に恥ぢ」。
○百年の身を誤り——吉澤本なし。
○なからんことをおもふ——吉澤本「なからんことをおもひ」。
173 玉造——玉造小町壯衰書、一卷。群書類從第百三十六に收められてゐる。
○玉造といふ文——吉澤本「玉造といふ物」。
○この文——吉澤本「この書」。

がはしくして、身のまたく久しからんことをば思はず。すけるかたに心ひきて、ながき世がたりともなる。身をあやまつことは、わかき時のしわざなり。

老いぬる人は精神おとろへ、あはく、おろそかにして、感じ動くところなし。心おのづからしづかなれば、無益のわざをなさず。身をたすけて愁なく、人のわづらひなからんことをおもふ。老いて智のわかき時にまされること、わかくしてかたちの老いたるにまさるがごとし。

第百七十三段

小野小町がこと、きはめてさだかならず。おとろへたるさまは、玉造といふ文に見えたり。この文、清行が書けりといふ說あれど、高野大師の御作の目錄にいれり。大師は承和のはじめにかくれ給へり。小町がさかりなること、その後の事にや、猶おぼつかなし。

清行——三善清行かといふ。
高野大師——弘法大師。
承和——仁明天皇の年號。大師の入定は同二年三月二十一日。
174 ○すたれざらん——吉澤本「すぐれざらん」。
175 ○ともあるごとには——吉澤本「は」なし。
○酒をすゝめ——嵯峨本吉澤本その他諸本「酒をすゝめて」。

第百七十四段

小鷹によき犬・大鷹につかひぬれば、小鷹にわろくなるといふ。大につき小をすつることわり、誠にしかなり。

人事おほかる中に、道をたのしむより氣味ふかきはなし。是れ實の大事なり。一たび道を聞きて、これに志さん人、いづれのわざかすたれざらん。何事をかいとなまん。おろかなる人といふとも、かしこき犬の心におとらんや。

第百七十五段

世には心得ぬ事のおほきなり。ともあるごとには、まづ酒をすゝめ、しひのませたるを興とする事、いかなるゆゑとも心得ず。

飲む人の顏、いとたへがたげに、眉をひそめ、人目をはかり捨てんとし、にげんとするをとらへて、ひきとゞめて、すずろに飲ませつれば、うるは

○人目をはかり――嵯峨本、吉澤本その他諸本「人目をはかりて」。
○とらへて――吉澤本「て」なし。
○いはふべき――吉澤本「よろこぶべき」。
○慈悲もなく――吉澤本「も」なし。
○みづからも――吉澤本「も」なし。

しき人も忽ちに狂人となりて、をこがましく、息災なる人も、目の前に大事の病者となりて、前後もしらずたふれふす。いはふべき日などは、淺ましかりぬべし。あくる日まで、頭いたく、物くはず、によびふし、生をへだてたるやうにして、昨日のこと覺えず、おほやけわたくしの大事をかきて、わづらひとなる。人をしてかゝるめを見する事、慈悲もなく、禮儀にもそむけり。かくからきめにあひたらん人、ねたくくちをしと思はざらんや。ひとの國にかゝるならひあなりと、これらになき人事にて、傳へ聞きたらんは、あやしく不思議におぼえぬべし。

人のうへにて見たるだにこゝろうし。思ひ入れたるさまに、心にくしと見し人も、おもふ所なくわらひのゝしり、詞おほく、烏帽子ゆがみ、ひもはづし、脛高くかゝげて、用意なき氣しき、日來の人とも覺えず。女は窮髮はれらかにかきやり、まばゆからず顏うちささげてうちわらひ、盃もてる手にとりつき、よからぬ人は、肴とりて口にさしあて、みづからもくひたる、さまあし。聲のかぎり出して、おのおのうたひまひ、年老いたる法

○此の世にては――嵯峨本、吉澤本「て」なし。
○百藥の長といへど――嵯峨本、吉澤本その他諸本「百藥の長とはいへど」。

師めし出されて、黑くきたなき身をかたぬぎて、目もあてられずすぢりたるを、興じ見る人さへうとましくにくし。あるは又、我が身いみじき事ども、かたはらいたくいひきかせ、あるは醉ひ泣きし、下ざまの人は、のりあひ、いさかひて、あさましくおそろし。恥がましく、心うき事のみありて、はてはゆるさぬものどもおしとりて、緣より落ち、馬、車よりおちてあやまちしつ。物にものらぬきはゝ、大路をよろぼひ行きて、ついひぢ、門の下などにむきて、えもいはぬ事どもしちらし、年老い袈裟かけたる法師の、小わらはの肩をおさへて、聞えぬ事どもいひつゝ、よろめきたる、いとかはゆし。かゝる事をしても、此の世も、後の世も、益あるべきわざならばいかがはせん。

此の世にては、あやまちおほく、財をうしなひ、病をまうく。百藥の長といへど、萬の病は、酒よりこそおこれ。憂をわするといへど、醉ひたる人ぞ、過ぎにしうさをも思ひ出でて泣くめる。後の世は、人の智惠をうしなひ、善根をやく事火のごとくして、惡をまし、萬の戒を破りて、地獄に

○舅をわする――嵯峨本「を」なし。
○過ぎにしうさをも――吉澤本「を」なし。
○人の智恵を――吉澤本「人の」なし。
○とりおこなひ――吉澤本「とり」なし。
○物いりなんど――嵯峨本「火にて物いりなど」吉澤本「火にて物になど」。
○御さかな何――嵯峨本「御さかな何かな」吉澤本「御さかな何か」。
○上戸はをかしく罪ゆるさるゝ――吉澤本「上戸はをかし。罪もゆるさるゝ」。

おつべし。「酒をとりて人に飲ませたる人、五百生が間、手なき者に生る」とこそ、佛は說きたまふなれ。

かくうとましとおもふ物なれど、おのづから捨てがたき折もあるべし。月の夜、雪のあした、花のもとにても、心のどかに物語して盃出したる、萬の興をそふるわざなり。つれづれなる日、思ひの外に友の入り來て、とりおこなひたるも心なぐさむ。なれなれしからぬあたりの御簾の中より、御くだ物、みきなど、よきやうなるけはひして、さし出されたる、いとよし。冬、せばき所にて、物いりなどして、へだてなきどちさしむかひて、おほくのみたる、いとをかし。旅のかりや、野山などにて「御さかな何」などいひて、芝の上にてのみたるもをかし。いたういたむ人の、しひられて少し飲みたるもいとよし。よき人の、とりわきて、「今ひとつ、上すくなし」などのたまはせたるもうれし。ちかづかまほしき人の、上戸にて、ひしひしとなれぬる、又うれし。さはいへど、上戸はをかしく、罪ゆるさるゝ者なり。

○あさいしたる處を――吉澤本「あしたいしたるを」。
○いだきもち――吉澤本「いだきもちて」。
176 黑戸――清涼殿の北、瓮口の戸の西。黑戸の御所ともいふ。小松の御門――五十八代光孝天皇。
○忘れたまはで――吉澤本「忘れたまはず」。
177 鎌倉中書王――鎌倉幕府に迎へられた征夷大將軍一品中務卿宗尊親王。後嵯峨帝の皇子。中書は第六

醉ひくたびれて、あさいしたる處を、あるじのひきあけたるにまどひて、ほれたる顏ながら、ほそきもとどりさし出し、物も着あへず、いだきもち、ひきしろひてにぐる、かいどりすがたのうしろ手、毛おひたるほそ脛のほど、をかしく、つきづきし。

第百七十六段

黑戸は、小松の御門、位につかせ給ひて、昔たゞ人におはしましゝ時、まさな事せさせ給ひしを忘れたまはで、常にいとなませ給ひける間なり。御薪にすゝけたれば、黑戸といふとぞ。

第百七十七段

鎌倉中書王にて、御鞠ありけるに、雨ふりて後、いまだ庭のかわかざりければ、「いかがせん」と沙汰ありけるに、佐々木隱岐入道、鋸のくづを車につみて、おほく奉りたれば、一庭にしかれて、泥土のわづらひなか

段註參照。
佐々木隱岐入道——佐々木隱岐前司義清の嫡男、太郎左衞門入道心願。
○拳りたれば——嵯峨木、吉澤本「拳りたりければ」。
吉田中納言——萬里小路中納言藤原藤房であらう。
○用意やはなかりける——吉澤本「は」なし。
○のたまひたりしかば——吉澤本「のたまひたりしが」。
○故實——吉澤本「故實の事」。
178 內侍所——第二十三段註參照。
寶劍——三種の神器の一、草薙劍。
○持ち給へる——嵯

りけり。とりためけん用意、ありがたしと人感じあへりけり。この事を、ある者の語り出でたりしに、吉田中納言の、「乾沙の用意やはなかりける」と、のたまひたりしかば、はづかしかりき。いみじとおもひける鋸のくづ、賤しく、ことやうの事なり。庭の儀を奉行する人、かわきすなごをまうくるは、故實なりとぞ。

第百七十八段

ある所のさぶらひども、內侍所の御神樂を見て、人にかたるとて、「寶劍をばその人ぞ持ち給へる」などいふを聞きて、うちなる女房の中に、「別殿の行幸には、畫御座の御劍にてこそあれ」と、忍びやかにいひたりし、心にくかりき。その人、ふるき典侍なりけるとかや。

第百七十九段

入宋の沙門道眼上人、一切經を持來して、六波羅のあたり、やけ野といふ處に安置して、殊に首楞嚴經を講じて、那爛陀寺と號す。その聖の申されしは、「那爛陀寺は、大門北むきなりと、江帥の說とて云ひつたへたれど、西域傳、法顯傳などにも見えず。更に所見なし。江帥はいかなる才覺にて申されけん、おぼつかなし。唐土の西明寺は、北むき勿論なり」と申しき。

嵯木「持ち給ひつる」吉澤本「持ち給ひぬる」。
畫御座——清涼殿中の主上の御常座。その御座の南におき給ふ御劍が「畫御座御劍」である。
典侍——內侍司の次官である女官。
179 道眼上人——傳不明、兼好と同時代の人らしく、第二百三十八段にも出てゐる。
一切經——大藏經。經、律、論、註釋等一切を網羅してゐる。
六波羅——第百五十三段註參照。
やけ野——不明。
首楞嚴經——首楞嚴は梵語で、一切事究竟堅固也といふ意。唐代に印度の僧般剌密帝の譯した經。十

第百八十段

さぎちやうは、正月に打ちたる「ぎちやう」を、眞言院より神泉苑へ出して燒きあぐるなり。「法成就の池にこそ」とはやすは、神泉苑の池をいふなり。

第百八十一段

「ふれふれこゆき、たんばのこゆき」といふ事、米つきふるひたるに似たれば、粉雪といふ。「たまれこゆき」といふべきを、あやまりて、「たん

卷。
那爛陀寺――印度にあつた寺の名。上人はその寺の號を借りたのである。
江師――大江匡房。
西域傳――玄奘三藏の大唐西域記。十二卷。
法顯傳――法顯三藏が渡天の折のことを記した自傳。高僧法顯傳。一卷。
○才覺にて――嵯峨本「才覺にてか」。
西明寺――唐の高宗の時長安に建てられた寺。玄奘三藏がゐた。
180 眞言院――大内裏八省院の北にある眞言の道場。後七日の御修法を行はれる。
神泉苑――桓武天皇遷都の初め作り設け

ばの」とはいふなり。「垣や木のまたに」とうたふべしと、ある物しり申しき。昔よりいひける事にや、鳥羽院をさなくおはしまして、雪のふるに、かく仰せられけるよし、讃岐のすけが日記に書きたり。

第百八十二段

四條大納言隆親卿、から鮭といふものを、供御にまゐらせられたりけるを、「かくあやしき物まゐるやうあらじ」と、人の申しけるを聞きて、大納言、「鮭といふ魚、まゐらぬ事にてあらんにこそあれ、鮭のしらぼし、何條事かあらん。鮎のしらぼしはまゐらぬかは」と申されけり。

第百八十三段

人つく牛をば角をきり、人くふ馬をば耳をきりて、そのしるしとす。しるしをつけずして人をやぶらせぬるは、ぬしのとがなり。人くふ犬をば養ひ飼ふべからず。是れみな科あり。律のいましめなり。

られた庭。二條大宮にあつて、池をもつて名高かつた。
181 ○米つき――吉澤本「米をつき」。
○「たんばの」とは――吉澤本「は」の字なし。
○鳥羽院をさなく――嵯峨本「鳥羽院をさなくて」。
鳥羽院――七十四代鳥羽天皇。
讃岐のすけが日記――讃岐典侍日記。三卷。讃岐典侍は堀川帝に仕へた女流歌人である。
182 四條大納言隆親卿――正二位權大納言檢非違使別當。歌人である。
183 ○そのしるし――吉澤本「その」の二字

第百八十四段

相模守時頼の母は、松下禪尼とぞ申しける。守をいれ申さるゝことありけるに、すゝけたるあかり障子のやぶればかりを、禪尼手づから、小刀して切りまはしつゝ、はられければ、せうとの城介義景、その日のけいめいして候ひけるが、「給はりて、なにがし男にはらせ候はん。さやうの事に心得たる者に候」と、申されければ、「その男、尼が細工によもまさり侍らじ」とて、なほ、一間づつはられけるを、義景、「皆をはりかへ候はんは、はるかにたやすく候べし。まだらに候も見ぐるしくや」と、かさねて申されければ、「尼も、後は、さわさわとはりかへんとおもへども、けふばかりは、わざとかくてあるべきなり。物はやぶれたる所ばかりを修理して用ふる事ぞと、わかき人に見ならはせて、心づけんためなり」と申されける。いとありがたかりけり。世を治むる道、儉約を本とす。女性なれども聖人の心にかよへり。天下をたもつほどの人を、子にてもたれける、誠に

なし。

184 相模守時頼――鎌倉五代の執權、最明寺入道北條時頼。弘長三年、三十八で卒した。

松下禪尼――秋田城介景盛の女で、修理亮北條時氏の室である。松下は鎌倉地方の地名。

城介義景――秋田城介伊達義景。秋田城介は出羽秋田城を管する役である。

○心得たる者に候――吉澤本「に」なし。

○まさり侍らじ――吉澤本「まさり候はじ」。

○はるかにたやすく――吉澤本「た」なし。

○けふばかりは――吉澤本「は」なし。

たゞ人にはあらざりけるとぞ。

第百八十五段

城陸奥守泰盛は、さうなき馬乘なりけり。馬をひきいでさせけるに、足をそろへて、鬩をゆらりとこゆるを見ては、「是はいさめる馬なり」とて、鞍をおきかへさせけり。また足をのべて、しきみに蹴あてぬれば、「是はにぶくしてあやまちあるべし」とて乘らざりけり。道をしらざらん人、かばかり恐れなんや。

第百八十六段

吉田と申す馬乘の申し侍りしは、「馬ごとにこはきものなり。人の力あらそふべからずとしるべし。のるべき馬をば、まづよく見て、強き所、弱きところをしるべし。次に、轡、鞍の具にあやふき事やあると見て、心にかゝる事あらば、その馬をはすべからず。この用意をわすれざるを、馬乘

○慳約を本とす。女性なれども、聖人の心にかよへり。天下をたもつほどの――吉澤本「本とす」より「天下を」迄二十一字なし。

185 城陸奥守泰盛――前段に出た伊達義景の三男。この家は代々秋田城介で、且つ弘安年中には陸奥守をも兼ねたので城陸奥守といふ。

○あやまち――吉澤本「あやまり」。

186 吉田と申す馬乘――傳不明。

○こはきもの――吉澤本「つよきもの」。

○のるべき馬をば――吉澤本「弱きところを知るべし」迄二十六字なし。

187 ○ならぶ時――吉澤

とは申すなり。これ祕藏の事なり」と申しき。

第百八十七段

萬の道の人、たとひ不堪なりといへども、堪能の非家の人にならぶ時、必ずまさる事は、たゆみなくつつしみて、かろがろしくせぬと、ひとへに自由なるとのひとしからぬなり。藝能、所作のみにあらず、大方のふるまひ、心づかひも、おろかにしてつつしめるは、得の本なり。たくみにしてほしきまゝなる、失の本なり。

第百八十八段

ある者、子を法師になして、「學問して、因果の理をもしり、說經などして、世わたるたつきともせよ」といひければ、教のまゝに說教師にならんために、先づ馬に乘りならひけり。興、車もたぬ身の、導師に請ぜられん時、馬などむかへにおこせたらんに、もゝじりにて落ちなんは、心うか

本「ならぶる時」。
○ほしきまゝなる―の―嵯峨本、吉澤本その他諸本「ほしきまゝなるは」。
188
○車もたぬ身の――嵯峨本「車はもたぬ身の」、吉澤本「車もたぬ身に。」
○能なきは――吉澤本「能なきを。」
早歌――神樂歌の中に早歌といふのがあるが、それは別でこれは當時流行した一種の俚謠であらうといふ。
○二のわざ――吉澤本「このわざ」。
○いよいよよくしたく――吉澤本「いよいよしたく」。
○さしあたりたる―吉澤本「さしあたる」。

るべしとおもひけり。次に、佛事の後、酒などすゝむる事あらんに、法師の無下に能なきは、檀那すさまじくおもふべしとて、早歌といふ事を習ひけり。二のわざやうやうさかひに入りければ、いよいよよくしたく覺えて嗜みける程に、說經ならふべきひまなくて、年寄りにけり。

この法師のみにもあらず、世間の人、なべてこの事あり。若きほどは、諸事につけて、身をたて、大なる道をも成し、能をもつき、學問をもせんと、行末久しくあらます事ども、心にはかけながら、世をのどかにおもひて、うちおこたりつつ、まづさしあたりたる、目の前のことのみにまぎれて、月日を送れば、事毎なす事なくして、身は老いぬ。つひに物の上手にもならず、思ひしやうに身をもたず。とりかへさるゝ齡ならねば、走りて坂をくだる輪のごとくにおとろへゆく。

されば、一生のうちに、むねとあらまほしからん事の中に、いづれかまさると、よくおもひくらべて、第一のことを案じさだめて、その外は思ひすてて、一事をはげむべし。一日の中、一時の中にも、あまたのことのき

○目の前のことのみに――嵯峨本「目の前のことにのみ」、吉澤本「目の前のことのみ」。
○事毎――嵯峨本「事毎に」。
○身は老いぬ――吉澤本「身は又老いぬ」。
○とりかへさるゝ――嵯峨本、吉澤本「悔ゆれども、とりかへさるゝ」
○輪のごとくに――吉澤本「に」なし。
○一生のうちに――嵯峨本、吉澤本「に」なし。
○一手も――吉澤本「一手たも」
○まさらんかたへこそ――吉澤本「こそ」なし。

たらん中に、少しも益のまさらん事をいとなみて、その外をばうち捨てて大事をいそぐべきなり。何方をもすてじと心にとりもちては、一事もなるべからず。

たとへば碁をうつ人、一手もいたづらにせず、人にさきだちて、小をすて、大につくがごとし。それにとりて、三の石をすてて、十の石につくことはやすし。十をすてて、十一につく事はかたし。一つなりとも、まさらんかたへこそつくべきを、十までなりぬれば、をしくおぼえて、おほくまさらぬ石にはかへにくし。是をも捨てず、かれをもとらんと思ふ心に、かれをも得ず、これをも失ふべき道なり。

京にすむ人、いそぎて東山に用ありて、既に行きつきたりとも、西山に行きて、その益まさるべき事を思ひ得たらば、門より歸りて、西山へゆくべきなり。こゝまで來着きぬれば、このことをば先づ云ひてん。日をさゝぬ事なれば、西山の事は、歸りて又こそ思ひたゝめとおもふ故に、一時の懈怠、すなはち一生の懈怠となる。これをおそるべし。

東山――第五十段註参照。
西山――東山に對して西方嵯峨あたりの山をさしていふ。
○來着きぬれば――吉澤本「來」なし。
○一生の懈怠となる――吉澤本「一生の懈怠なり」。
○人の嘲をも――吉澤本「きげんをも待つべからず、人の嘲るをも」。
○ありける中にて――吉澤本「ある中に」。
わたのべの聖――傳不明であるが、今の大阪市浪速區堀江を昔渡部と云つたが、そこに住んだ僧であらうといふ。
登蓮法師――傳不明。詞花集以下十一代の

一事を必ずなさんとおもはゞ、他の事のやぶるゝをもいたむべからず。人の嘲をも恥づべからず。萬事にかへすしては、一の大事なるべからず。

人のあまたありける中にて、ある者「ますほのすゝき、まそほのすゝきなどいふ事あり。わたのべの聖、このことをつたへ知りたり」と語りけるを、登蓮法師、その座に侍りけるが、聞きて、雨のふりけるに、「蓑笠やある。かし給へ。彼のすゝきの事習ひに、渡邊のひじりのがり尋ねまからん」といひけるを、「あまりに物さわがし。雨やみてこそ」と人の云ひければ、「無下の事をも仰せらるるものかな。人の命は雨のはれ間をも待つものかは。我も死に、聖もうせなば、尋ねきゝてんや」とて、走りいでて行きつつ習ひ侍りにけりと、申し傳へたるこそ、ゆゝしく有りがたう覺ゆれ。

「敏きときは則ち功あり」とぞ、論語といふ文にも侍るなる。この薄をいぶかしく思ひけるやうに、一大事の因緣をぞ思ふべかりける。

勅撰集にその歌が載つてゐる。
○尋ねきゝてんや――吉澤本「尋ね問ひてんや」。
○走りいでて行きつつ――吉澤本「きつつ」なし。
敏ときは則ち功あり――論語陽貨篇に「敏則有功」とある。
○一大事の因緣――嵯峨本「の」なし。
○189 思ひつるに似ず――嵯峨本「思ひつるには似ず」。
○一年の事も――吉澤本、嵯峨本「一年のうちも」。
○かねてのあらまし――吉澤本「かねての有樣」。
○190 妻――嵯峨本「妻子」吉澤本「妻女」。

第百八十九段

今日はその事をなさんとおもへど、あらぬいそぎ先づ出で來てまぎれくらし、待つ人はさはりありて、たのめぬ人は來り、たのみたる方の事はたがひて、思ひよらぬ道ばかりはかなひぬ。わづらはしかりつる事はことなくて、やすかるべき事はいと心ぐるし。日々に過ぎゆくさま、かねて思ひつるに似ず。一年の事もかくのごとし、一生の間も又しかなり。かねてのあらまし、皆たがひゆくかと思ふに、おのづからたがはぬ事もあれば、いよいよ物は定めがたし。不定と心得ぬるのみ、まことにてたがはず。

第百九十段

妻といふものこそ、をのこの持つまじきものなれ。

「いつもひとり住みにて」など聞くこそ、心にくけれ。「誰がしが聟になりぬ」とも、又「いかなる女をとりすゑて相住む」など聞きつれば、無下

○この男をぞ――吉澤本「ぞ」なし。
○らうたくして――吉澤本「らうたくこそ」。
○子など――吉澤本「子ども」。
○男なくなりて――吉澤本「夫なくなりて」。
○そひ見んには――吉澤本、嵯峨本「は」なし。
○いと心づきなく――吉澤本「いと」なし。
○にくかりなん――吉澤本「なりなん」。

に心おとりせらるゝわざなり。「ことなる事なき女を、よしと思ひ定めてこそ、そひゐたらめ」と、賤しくもおしはかられ、よき女ならば、「この男をぞ、らうたくして、あが佛とまもりゐたらめ、たとへば、さばかりにこそ」とおぼえぬべし。

まして家のうちを行ひをさめたる女、いとくちをし。子などいできて、かしづき愛したる、心うし。男なくなりて後、尼になりて年よりたるありさま、なき跡まであさまし。

いかなる女なりとも、明暮そひ見んには、いと心づきなくにくかりなん。女のためも、半空にこそならめ。よそながら時々通ひすまんこそ、年月へても絶えぬなからひともならめ。あからさまに來て、とまりゐなどせんはめづらしかりぬべし。

第百九十一段

○191 にほひも――吉澤本「にほひなども」。
○ことなることなき夜――吉澤本「ことなることなきに夜」。
○つくろひ出づる――吉澤本、嵯峨本「つくろひて出づる」。

夜に入りてものゝはえなしといふ人、いとくちをし。萬の物のきら、かざり、色ふしも、夜のみこそめでたけれ。

晝はことそぎ、およすけたる姿にてもありなん。夜はきらゝかに、花やかなるさうぞくいとよし。人のけしきも、夜の火影ぞよきはよく、物いひたる聲も、くらくて聞きたる、用意ある、心にくし。にほひも、ものゝ音も、ただ夜ぞひときはめでたき。

さしてことなる事なき夜、うち更けてまゐれる人の、きよげなるさましたる、いとよし。わかきどち、心とゞめて見る人は、時をもわかぬものなれば、ことにうちとけぬべき折節ぞ、けはれなくひきつくろはまほしき。よき男の、日暮れてゆするし、女も、夜ふくるほどに、すべりつゝ、鏡とりて、顏などつくろひ出づるこそをかしけれ。

第百九十二段

神佛にも、人のまうでぬ日、夜まゐりたる、よし。

○193 碁うつ事――吉澤本「圍碁をうつ事」。○たくみなるは――吉澤本「は」なし。

○194 世に虚言を――吉澤本「世中に虚言を」。

第百九十三段

くらき人の、人をはかりて、その智を知れりと思はん、更にあたるべからず。

つたなき人の、碁うつ事ばかりにさとく、たくみなるは、かしこき人の此の藝におろかなるを見て、おのれが智におよばずと定めて、萬の道の巧、我が道を人のしらざるを見て、おのれすぐれたりと思はん事、大なる誤りなるべし。文字の法師、暗證の禪師、たがひにはかりて、おのれにしかずと思へる、共にあたらず。

おのれが境界にあらざるものをば、あらそふべからず、是非すべからず。

第百九十四段

達人の人をみる眼は、少しもあやまる所あるべからず。

たとへば、或人の、世に虚言をかまへ出して、人をはかることあらんに、

○あまりに――吉澤本「あやまりに」。

○覺束なくおぼえて――吉澤本「覺束なく思ひて」。

○さるめりと――吉澤本「さるめりとは」

○あやまりもこそあれ――吉澤本「あれ」なし。

○やうもなかりける――嵯峨本その他諸本「やうもなかりけり」。

○おなじやうにて――吉澤本「おなじやうで」。

○顔にても――吉澤本「聲にても」。

すなほに、まことと思ひて、いふまゝにはからるゝ人あり。あまりにふかく信をおこして、なほわづらはしく虚言を心得そふる人あり。又何としも思はで、心をつけぬ人あり。又いさゝか覺束なくおぼえて、たのむにもあらず、たのまずもあらで、案じゐたる人あり。又まことしくは覺えねども、人のいふ事なれば、さもあらんとてやみぬる人もあり。又さまざまに推し、心得たるよしして、かしこげにうちうなづき、ほゝゑみてゐたれど、つやつやしらぬ人あり。又推し出して、あはれさるめりと思ひながら、なほあやまりもこそあれと、あやしむ人あり。又ことなるやうもなかりけると、手をうちてわらふ人あり。又心得たれども、しれりともいはず、覺束なからぬはとかくの事なく、しらぬ人とおなじやうにて過ぐる人あり。又此の虚言の本意を、はじめより心得て、少しもあざむかず、かまへ出したる人と同じ心になりて、力をあはする人あり。愚者の中の戯だに、しりたる人の前にては、此のさまざまのえたる所、詞にても、顔にても、かくれなくしられぬべし。ましてあきらかならん人の、まどへるわれらを見

195 久我繩手――京都の南郊、乙訓郡久我村より山崎に至る繩手道をいふ。
○おはしけり――吉澤本、嵯峨本「おはしましけり」。
久我内大臣――從一位久我通基。
○おはしましける時は――吉澤本「おはしける時は」。
196 東大寺の神輿――奈良東大寺の鎭守神、手向山八幡宮の神輿をいふ。
東寺の若宮――東寺

んこと、掌の上の物を見んがごとし。但し、かやうのおしはかりにて、佛法までをなずらへいふべきにはあらず。

第百九十五段

ある人、久我繩手を通りけるに、小袖に大口きたる人、木造の地藏を、田の中の水におしひたして、ねんごろにあらひけり。心得がたく見る程に、狩衣の男二三人出で來て、「爰におはしけり」とて、此の人をぐしていにけり。久我内大臣殿にてぞおはしける。尋常におはしましける時は、神妙にやんごとなき人にておはしけり。

第百九十六段

東大寺の神輿、東寺の若宮より歸座の時、源氏の公卿まゐられけるに、この殿、大將にてさきをおはれけるを、土御門の相國、「社頭にて警蹕いかゞ侍るべからん」と申されければ、「隨身のふるまひは、兵仗の家が

は第百五十四段に註した。若宮は東寺の鎭守神、若宮八幡宮。
この殿――前段に出た久我内大臣。
土御門相國――久我の庶流、從一位太政大臣源定實。
北山抄――藤原公任の著、十一卷。一條以後の儀式のことをしるしてある。
西宮――西宮記、二十卷は西宮左大臣源高明の著で、儀式の事をしるす。
○神社にては――嵯峨本、吉澤本「は」なし。
197 ○僧のみにも――吉澤本「も」なし。
女孺――宮中内侍司の下役の女官。
延喜式――五十卷、宮中年中行事、百官

知る事に候」とばかり答へ給ひけり。さて後に仰せられけるは、「この相國、北山抄を見て、西宮の說をこそしられざりけれ。眷屬の惡鬼惡神をおそるゝ故に、神社にてはことにさきをおふべき理あり」とぞ仰せられける。

第百九十七段

諸寺の僧のみにもあらず。定額の女孺といふ事、延喜式に見えたり。すべて數さだまりたる公人の通號にこそ。

第百九十八段

揚名介にかぎらず、揚名目といふものもあり。政事要略にあり。

第百九十九段

横川行宣法印が申し侍りしは、「唐土は呂の國なり、律の音なし。和國

臨時の作法、諸國の定例などを記す。醍醐帝の時藤原時平が編したが中途で歿し弟忠平が完成した。

198 揚名介、揚名目――名ばかりて職掌も俸祿もない地方官。

政事要略――百三十卷。一條帝の時、惟宗允亮が古來の法制の事を輯めた書。

199 横川――比叡山三塔の一、横川谷。

行宣法印――傳不詳であるが、井蛙抄に坂本の北あふぎといふ所に住してゐたことが見えてゐる。

200 御溝――禁中にある溝の名。

仁壽殿――紫宸殿の北、清涼殿の東にある禁中一殿の名。元主上の御殿であつた

は軍律の國にて、呂の音なし」と申しき。

第二百段

吳竹は葉ほそく、かは竹は葉ひろし。御溝にちかきは河竹、仁壽殿の方によりて植ゑられたるは、吳竹なり。

第二百一段

退凡下乘の卒塔婆、外なるは下乘、內なるは退凡なり。

第二百二段

十月をかみな月といひて、神事にはゞかるべきよしは、しるしたるものなし。本文も見えず。但し、當月、諸社のまつりなきゆゑに、この名あるか。此の月、萬の神達、太神宮へあつまり給ふなど云ふ說あれども、その本說なし。さる事ならば、伊勢にはことに祭月とすべきに、その例もな

が後內宴蹴鞠なども行はれる所となつた。

202 ○この月――吉澤本「この月は」。

太神宮――伊勢太神宮、今は大の字を尾ひてゐる。

○說あれども、その本說なし――吉澤本「說あれど、それも本說なし」。

○その例――嵯峨本「その例も」。

203 ○知れる人――吉澤本「知れる人も」。

五條の天神――京都市西洞院五條にある。

鞍馬――洛北鞍馬山。

鞦の明神――鞍馬の氏神由岐明神。

○鞦の明神――

し。十月諸社の行幸その例おほし。但しおほくは不吉の例なり。

第二百三段

勅勘のところに鞦かくる作法、今はたえて知れる人なし。主上の御惱、六方世中のさわがしき時は、五條の天神に鞦をかけらる。鞍馬に鞦の明神といふも、鞦かけられたりける神なり。看督長の負ひたる鞦を、その家にかけられぬれば、人出入らず。此の事絕えて後、今の世には、封をつくることになりにけり。

第二百四段

犯人をしもとにてうつ時は、拷器によせてゆひつくるなり。拷器のやうも、よする作法も、今はわきまへしれる人なしとぞ。

第二百五段

—吉澤本「刱の明神といひて」。
○刱かけられたりける神——吉澤本「刱かけられける神」。
看督長——檢非違使の下で追捕のことを掌る。
○その家にかけられぬれば——吉澤本「その家にかけぬれば」。
○封をつくることになりにけり——吉澤本「封をつくることになりたり」。

204 ○わきまへしれる——吉澤本「れ」なし。

205 ○大師勸請の起請文——嵯峨本、吉澤本「文」なし。
大師勸請の起請文——賀緣阿闍梨が、慈惠を濫行、食の人と云ひふらしたので、慈惠は起請を書いて三塔に披露したと古今著聞集に見えてゐる。
慈惠僧正——法號良源、康保三年天台座主、永觀三年入寂。七十四。
○起請文といふ事——吉澤本「文」なし。

206 德大寺右大臣——德大寺公孝であらう。
章兼——傳不明。
大理——第九十九段註。
○大理の座の——嵯峨本、吉澤本その他諸本「廳のうちへ入りて大理の座の」。
父の相國——太政大臣藤原實基。
○微牛を——吉澤本

比叡山に、大師勸請の起請文といふ事は、慈惠僧正書き始め給ひけるなり。起請文といふ事、法曹にはその沙汰なし。いにしへの聖代、すべて起請文につきておこなはるゝ政はなきを、近代この事流布したるなり。又法令には、水火に穢をたてず、入物にはけがれあるべし。

第二百六段

德大寺右大臣殿、檢非違使の別當の時、中門にて使廳の評定おこなはれける程に、官人章兼が牛はなれて、大理の座の、はまゆかの上にのぼりて、にれ打ちかみて臥したりけり。おもき怪異なりとて、牛を陰陽師のもとへつかはすべきよし、おのおの申しけるを、父の相國きゝ給ひて、「牛に分別なし。足あればいづくへかのぼらざらん。庭弱の官人、たまたま出仕の微牛をとらるべきやうなし」とて、牛をば主にかへして、臥したりける疊をばかへられにけり。あへて凶事なかりけるとなん。「あやしみを見てあやしまざる時は、あやしみかへりてやぶる」といへり。

第二百七段

龜山殿たてられんとて、地をひかれけるに、大なる蛇、數も知らず凝りあつまりたる塚ありけり。この所の神なりといひて、ことのよしを申しければ、いかがあるべきと勅問ありけるに、「ふるくより此の地をしめたる物ならば、さうなく堀りすてられがたし」と皆人申されけるに、この大臣ひとり、「王土にをらん蟲、皇居をたてられんに、何のたたりをかなすべき。鬼神はよこしまなし、とがむべからず。たゞみなほり捨つべし」と申されたりければ、塚を崩して蛇をば、大井川に流してけり。さらにたゝりなかりけり。

第二百八段

經文などの紐をゆふに、上下よりたすきにちがへて、二すぢの中より、わなの頭を横さまにひき出すは、常の事なり。左樣にしたるをば、華嚴院

「た」なし。

207 龜山殿――第五十一段頭註。この大臣――前段の實基相國。

○鬼神は――吉澤本「鬼神に」。

○たゞみなほり捨つべし――吉澤本「ただみなほり捨てらるべし」。

○申されたりければ――吉澤本「たり」なし。大井川――第五十一段頭註。

208 ○ひき出すは――嵯峨本「ひき出す事は」吉澤本「ひき出す事」。

華嚴院弘舜僧正――

の弘舜僧正、ときてなほさせけり。「是は、此の比やうの事なり。いとにくし。うるはしくは、たゞくるくるとまきて、上より下へわなのさきをさしはさむべし」と申されけり。ふるき人にて、かやうの事、知れる人にな ん侍りける。

第二百九段

人の田を論ずるもの、うたへにまけてねたさに、「その田をかりて取れ」とて、人をつかはしけるに、先づ道すがらの田をさへ刈りもてゆくを、「是は論じ給ふ所にあらず。いかにかくは」といひければ、刈る者ども、「その所とても刈るべき理なけれども、僻事せんとてまかるものなれば、いづくをか刈らざらん」とぞいひける。理いとをかしかりけり。

第二百十段

喚子鳥は春の物なりとばかりいひて、いかなる鳥ともさだかにしるせる

傳記は慥でないが、和論語に「弘舜宇多源氏也。道德兼才人也。號二華嚴院僧正一」と出てゐる。

○わなのさきを――吉澤本「わなのさきをば」。

209 ○うたへ――吉澤本「うつたへ」。

210 ○萬葉集の――吉澤本「集」なし。萬葉集――二十卷、わが國最初の歌集。「霞たつ」の歌は卷一、國歌大觀番號五の歌。

○ながき春日の――吉澤本「ながき春の日」。

○つづけたり――吉澤本「た」なし。

ものなし。ある眞言書の中に、呼子鳥な〳〵時、招魂の法をばおこなふ次第あり。これは鵺なり。萬葉集の長歌に、「霞たつながき春日の」などつづけたり。鶯鳥も喚子鳥のことざまにかよひて聞ゆ。

第二百十一段

萬の事はたのむべからず。愚なる人はふかく物を賴むゆゑに、うらみいかる事あり。

いきほひありとて賴むべからず、こはきもの先づほろぶ。財多しとてたのむべからず、時の間に失ひやすし。才ありとて賴むべからず、孔子も時にあはず。德ありとてたのむべからず、顏回も不幸なりき。君の寵をもたのむべからず、誅をうくる事すみやかなり。奴したがへりとてたのむべからず、そむきはしる事あり。人の志をも賴むべからず、必ず變ず。約をもたのむべからず、信ある事すくなし。

身をも人をもたのまざれば、是なる時はよろこび、非なる時はうらみず。

211 孔子――文那春秋の世の聖人。莊子に「孔子：不レ容ニ身天下一」とある。
顔回――第百二十九段の註參照。論語に「有ニ顔回者一不幸短命而死矣」。
○非なる時はうらみず――吉澤本「非なる時はうらむ」。
○あらそひやぶる――嵯峨本、吉澤本「あらそひてやぶる」。
○天地はかぎる所なし――吉澤本「は」なし。
212 ○かくこそあれとて――吉澤本「て」なし。

左右ひろければさはらず、前後とほければ寒がらず。せばき時はひしげくだく。心を用ふる事、少しきにして、きびしき時は、物にさかひあらそひやぶる。ゆるくして、やはらかなる時は、一毛も損ぜず。

人は天地の靈なり。天地はかぎる所なし、人の性なんぞことならん。寛大にしてきはまらざる時は、喜怒是にさはらずして、ものゝためにわづらはず。

第二百十二段

秋の月はかぎりなくめでたき物なり。いつとても月はかくこそあれとて、思ひわかざらん人は、無下に心うかるべき事なり。

第二百十三段

御前の火爐に火をおく時は、火ばししてはさむことなし。土器より、たゞちにうつすべし。さればころび落ちぬやうに心得て、炭をつむべきな

213 八幡の御幸――八幡は第五十二段註の岩清水八幡宮をさすものであらう。
○火ばしを用ふる――吉澤本「火ばしを持ちたる」。
214 想夫戀――樂の名。
○戀ふる故の――吉澤本「故」なし。
○相府蓮――吉澤本「相府蓮なり」とある。
王儉――字は仲寶、年十八で秘書郎に拜し、齊に仕へて吏部を領した。三十八で死んだ。
廻忽――樂の名。
廻鶻――回紇族の祖。外蒙古を領してゐた野蠻族。

り。八幡の御幸に、供奉の人淨衣をきて、手にて炭をさゝれければ、ある有職の人、「しろき物を着たる日は、火ばしを用ふる、くるしからず」と申されけり。

第二百十四段

想夫戀といふ樂は、女、男を戀ふる故の名にはあらず。本は相府蓮、文字のかよへるなり。晉の王儉、大臣として、家にはちすを植ゑて愛せし時の樂なり。これより大臣を蓮府といふ。廻忽も廻鶻なり。廻鶻國とて、夷のこはき國あり。その夷、漢に伏して、後に來りて、おのれが國の樂を奏せしなり。

第二百十五段

平宣時朝臣、老の後、むかし語りに、「最明寺入道、ある宵の間によばるゝことありしに、『やがて』と申しながら、直垂のなくてとかくせし

215 平宣時——大佛陸奥守宣時。北條氏、時政の曾孫。
最明寺入道——北條時頼、第百八十四段に註した。
○罷りたりしに——吉澤本「程」なし。
○その世には——吉澤本「に」なし。
○申されき——吉澤本「申されけり」。

216 最明寺入道——前段註。
鶴岡——鎌倉鶴岡八幡宮。

程に、又使來りて、『直垂などのさふらはぬにや。夜なれば、ことやうなりとも、とく』とありしかば、なへたる直垂、うちうちのまゝにて、罷りたりしに、銚子に土器とりそへてもていでて、『此の酒をひとりたうべんがさうざうしければ申しつるなり。さかなこそなけれ、人はしづまりぬらん。さりぬべき物やあると、いづくまでももとめ給へ』とありしかば、紙燭さして、くまぐまをもとめし程に、臺所の棚に、小土器にみその少しつきたるを見出でて、『これぞもとめえてさふらふ』と申ししかば、『事たりなん』とて、心よく數献におよびて、興にいられ侍りき。その世にはかくこそ侍りしか」と申されき。

第二百十六段

最明寺入道、鶴が岡の社參のついでに、足利左馬入道の許へ、先づ使をつかはして立ちいられたりけるに、あるじまうけられたりけるやう、一獻にうちあはび、二獻にえび、三獻にかいもちひにてやみぬ。その座には、

足利左馬入道——左馬頭足利義氏、剃髪して法樂寺正義と號した。
○あるじまうけられたりけるやう——吉澤本「たり」なし。
隆辨僧正——當時の鶴岡八幡宮の別當。
足利—下野國足利。
○心もとなく候——吉澤本「心もとなくや候」。
○用意しさふら——嵯峨本、吉澤本その他諸本「用意しさふらふ」。
○てうぜさせて——吉澤本「ぜ」なし。

217 ○まづしくては——吉澤本「まづしくしては」。
○その心といふは——吉澤本なし。

亭主夫婦、隆辨僧正、あるじ方の人にて座せられけり。さて「年毎に給はる、足利の染物、心もとなく候」と申されければ、「用意しさふら」とて色々のそめ物三十、前にて女房どもに、小袖にてうぜさせて、後につかはされけり。その時見たる人の、ちかくまで侍りしが、語り侍りしなり。

第二百十七段

ある大福長者のいはく、「人は萬をさしおきて、ひたぶるに德をつくべきなり。まづしくては生けるかひなし。富めるのみを人とす。德をつかんとおもはゞ、すべからく先づその心づかひを修行すべし。その心といふは、他のことにあらず。人間常住の思ひに住して、かりにも無常を觀ずる事なかれ。是れ第一の用心なり。次に、萬事の用をかなふべからず。人の世にある、自他につけて所願無量なり。欲にしたがひてこゝろざしをとげんとおもはば、百萬の錢ありといふとも、しばらくも住すべからず。所願はやむ時なし。財はつくる期あり。限ある財をもちて、かぎりなき願にし

○是れ第一の用心なり――吉澤本「第一の用意なり」。
○心にきざす――吉澤本「心にきます」。
○用ふる事かれ――嵯峨本、吉澤本その他諸本には「用ふる事なかれ」。
○此の義をまもりて――嵯峨本「此の義をまほりて」。
○所願を成ぜざれども――嵯峨本、吉澤本「所願をなさざれども」。
○成ぜんがために――吉澤本「成さんがために」。
○願ひをかなふる――吉澤本「願ひをかなへる」。
○財なからんには――吉澤本「欲なからんには」。

たがふ事、得べからず。所願、心にきざす事あらば、我をほろぼすべき惡念きたれりと、かたくつつしみおそれて、小用をもなすべからず。次に、錢を奴のごとくして、つかひもちふる物としらば、ながく貧苦をまぬかるべからず。君のごとく、神のごとく、おそれたふとみて、したがへ用ふる事かれ。次に、恥にのぞむといふとも、怒り恨みる事なかれ。次に、正直にして約をかたくすべし。此の義をまもりて利をもとめん人は、富のくる事、火のかわけるにつき、水のくだれるにしたがふがごとくなるべし。錢つもりてつきざる時は、宴飲聲色をことゝせず、居所をかざらず、所願を成ぜざれども、心とこしなへにやすくたのし」と申しき。

抑人は所願を成ぜんがために財をもとむ。錢を財とする事は、願ひをかなふるがゆゑなり。所願あれどもかなへず、錢あれども用ひざらんは、全く貧者とおなじ。何をか樂とせん。この掟は、たゞ人間の望をたちて貧をうれふべからずと聞えたり。欲をなして樂とせんよりは、しかじ財なからんには。癰疽をやむもの、水に洗ひて樂とせんよりは、やまざらん

218 堀川殿――第九十九段に出た太政大臣久我基具の邸だといふ。
仁和寺――第五十二段參照。
○ひとつはつきころしぬ――吉澤本「ひとつはころしつ」。
219 四條黃門――樞中納言藤原隆資か。黃門は中納言の唐名。

にはしかじ。爰に至りては、貧富わくところなし。究竟は理卽にひとし。大欲は無欲に似たり。

第二百十八段

狐は人にくひつくものなり。堀川殿にて、舍人がねたる足を、狐にくはる。仁和寺にて、夜本寺の前をとほる下法師に、狐三つ飛びかかりてくひつきければ、刀をぬきてこれをふせぐ間、狐二疋をつく。ひとつはつきころしぬ。二つはにげぬ。法師はあまた所くはれながらことゆゑなかりけり。

第二百十九段

四條黃門命ぜられていはく、「龍秋は道にとりてはやんごとなきものなり。先日來りて云はく、『短慮のいたり、きはめて荒凉の事なれども、横笛の五の穴は、聊かいぶかしき所の侍るかと、ひそかに是を存ず。その故

龍秋――豐原龍秋。後醍醐、後光嚴兩帝に師範し奉つた笛の名手。
○道にとりては――吉澤本「は」なし。
○いぶかしき の侍るかと――吉澤本「いぶかしき所の侍ると」。
○へだてたり――吉澤本「たり」なし。
○上の穴雙調――嵯峨本、吉澤本「上雙調」。
○その次に――吉澤本「に」なし。
○間々に――吉澤本「間に」。
○おそるといふ事――吉澤本「事」なし。
○他日に景茂が申し――吉澤本「他日に景茂對面の時、この事を語り侍りしに、

は、干の穴は平調、五の穴は下無調なり。その間に勝絶調をへだてたり。上の穴雙調、次に鳧鐘調をおきて、夕の穴黃鐘調なり。その次に鸞鏡調をおきて、中の穴盤涉調、中と六とのあはひに神仙調あり。かやうに間々に皆一律をぬすめるに、五の穴のみ上の間に調子をもたずして、しかも間をくばる事ひとしき故に、その聲不快なり。されば此の穴をふくときは、必ずのく。のけあへぬ時は、ものにあはず。吹きうる人かたし』と申しき。料簡のいたり、誠に興あり。先達、後世をおそるといふ事、此の事なり」と侍りき。

他日に、景茂が申し侍りしは、「笙は、しらべおほせてもちたれば、ただ吹くばかりなり。笛は、吹きながら、息のうちにて、かつしらべもてゆく物なれば、穴ごとに口傳の上に、性骨をくはへて、心をいるゝ事、五の穴のみにかぎらず。ひとへにのくとばかりも定むべからず。あしく吹けばいづれの穴もこころよからず。上手はいづれをも吹きあはす。呂律の物にかなはざるは、人のとがなり。器の失にあらず」と申しき。

景茂が申し」。景茂――大神景茂。笛の家柄の人である
○もちたれば――吉澤本「もちぬれば」。
220 天王寺――大ヽ市天王寺區にある四天王寺。聖德太子の建立である。
○恥ちずといへば――吉澤本「いへば」の三字なし。
○外よりもすぐれたり故は――吉澤本「外よりもすぐれたる故は」。
太子――聖德太子。
六時堂――天王寺境内にある堂。
○六時堂――嵯峨本「堂」なし。
○あがりさがりあるべき――吉澤本「あ

第二百二十段

「何事も邊土はいやしくかたくなれども、天王寺の舞樂のみ、都に恥ぢず」といへば、天王寺の伶人の申し侍りしは、「當寺の樂は、よく圖をしらべあはせて、ものの音のめでたくとゝのほり侍る事、外よりもすぐれたり。故は、太子の御時の圖、今に侍るを博士とす。いはゆる六時堂の前の鐘なり。その聲黃鐘調のもなかなり。寒暑にしたがひて、あがりさがりあるべきゆゑに、二月涅槃會より聖靈會までの中間を指南とす。秘藏の事なり。此の一調子をもちて、いづれの聲をもととのへ侍るなり」と申しき。凡そ鐘の聲は黃鐘調なるべし。是れ無常の調子、祇園精舍の無常院の聲なり。西園寺の鐘、黃鐘調に鑄らるべしとて、あまた度いかへられけれども、かなはざりけるを、遠國より尋ねいだされけり。法金剛院の鐘の聲、また黃鐘調なり。